

この先へ。
ともに。

「めぐカフェ」 就労体験修了者 調査報告書

～若年無業女性(“ガールズ”)支援の
現場から



「めぐカフェ」 就労体験修了者 調査報告書

～若年無業女性(“ガールズ”)支援の現場から

2019 年 1 月

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
男女共同参画センター横浜南

(三菱財団助成事業)

目 次

はじめに	1
I 調査の趣旨	
1. 若年無業女性支援事業の経緯	2
コラム：手づくりの「めぐカフェ」立ち上げ、そして発展	5
2. 調査の目的と方法	6
3. 検討会の開催	7
II 「めぐカフェ」就労体験とは	
1. 事業の概要	8
2. プログラム	
(1) 参加の流れ	9
(2) 体験プログラム	10
(3) 「めぐカフェ」の店舗運営	11
(4) フォローアップ	11
3. よこはま若者サポートステーションとの連携	12
4. 利用実績	
(1) 数の推移と年齢	13
(2) 住所地	13
コラム：担当職員として苦心すること	14
III アンケート調査	
1. 実施概要	15
2. 調査結果	
(1) 回答者について	16
(2) 「めぐカフェ」就労体験に参加して	22
(3) 修了後の就労等の状況について	31
(4) 今後に向けて	38
3. 考察	
(1) 回答者の状況	46
(2) 「めぐカフェ」就労体験の成果	46
(3) プログラムの検証	48
(4) 体験修了後の就労状況	49

IV グループインタビュー

1. 実施概要	51
2. 結果と考察	
(1) 「めぐカフェ」での就労体験をふりかえって	53
(2) 体験終了後からこれまで	56
(3) 現在の悩みとこれからの希望	60
(4) インタビューを終えて ～風を受けて進む(杉田真衣)	62

V 専門家・支援機関の視点

1. 専門家(検討会委員)の視点	
(1) 第2の壁「社会との関わり」を乗り越えるための支援の拡充を(長谷川能扶子)	64
(2) 「めぐカフェ」就労体験事業の4つの意義(杉田真衣)	66
2. 就労支援(連携)機関の視点(よこはま若者サポートステーション)	69

VI 当協会の視点とこれからの可能性

1. 社会と支援の変化～横浜市を中心として	71
2. 女性間に広がる格差と、支援の必要性	72
3. 本事業の目ざすもの	75
4. 本事業の成果	76
5. 地域のNPOや企業の力を借りる	77
6. 今後に向けて	79

《資料編》

1. 「めぐカフェ」関連	83
2. 本調査関連	95

はじめに

「めぐカフェ」が男女共同参画センター横浜南(以下、「センター横浜南」)にオープンして、8 年を経た。カフェは、就労に困難をかかえる単身の若い女性に就労体験の場を提供することを目的として、センターの女性就労支援事業の一つとして開設した。

センター横浜南を運営する公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会は、1980 年代末の設立当初から女性の就労支援に取り組んできた。再就職支援からスタートし、主婦からシングルマザー、DV 被害女性など困難な状況にある女性へと対象層を広げてきた。2000 年代半ば、若者就労支援が国を挙げて始まった頃、若い女性は「家事手伝い」と呼ばれて統計にも上らず、社会的に見えない状況に置かれていた。そこで私たちは 2008 年の調査を経て翌年、単身の若い女性を新たな対象として「ガールズ編しごと準備講座」というかたちで支援事業を開始した。

しかし、講座を修了してもすぐに就活に向かうケースは少なかった。一定期間人と関わらずに過ごしていた場合には、働く前に「人々の中で、安心を感じる」体験がもっと必要なのかもしれない。そう考え、社会参加の助走期間として就労体験の場「めぐカフェ」を 2010 年に立ち上げた。就労体験は接客の職業訓練ではなく、週 2 回、1 回 3 時間というゆっくりペースで、人や社会にかかわるソーシャルスキルを獲得する実習の場である。「決められた日、時間に通う」「声をだす」「人とやりとりする」などから始めて、「チームで働く」練習ができるようにプログラムを組み立てていった。

一人ひとり異なる困難をかかえ、切実な思いで一歩を踏みだす実習生を受け入れる場を運営するこの事業は、私たちにとって初めての経験であった。実習生を受け入れ、ていねいに見守ることと、カフェ運営(経営)を持続することの両立は容易ではなく、試行錯誤で改善・整備してきた。

人がそれぞれのペースでゆっくりと進んでいくことに対して、寛容な社会はいまだ遠い。その中でとくに包摂されない若い女性を対象に取り組んできたこの事業は、果たして役に立ってきたのか。これから何が必要なのかと考え、本調査を実施した。

アンケートに回答し、グループインタビューに参加して下さった修了者および検討委員、横浜市、三菱財団、地域の NPO 等 支えて下さった皆様に心より感謝申し上げたい。私たちの経験が各方面の方々に少しでも参考になれば幸いである。

2019 年 1 月

I 調査の趣旨

1. 若年無業女性支援事業の経緯

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会¹(以下、「協会」)では2008年度、「若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査」²を実施した。シングルの女性も多く参加していた自助グループの支援事業等の経験から、ジェンダーによる経済格差が大きい日本社会の中で困難に直面するのはシングルマザーだけではなく、若年シングル女性もそうであろうと考えた。調査結果からは、人間関係や家族関係、いじめ、性被害などの重層的な困難と心身の不調をかかえて自分の将来を見通せないと感じながらも、どうかして働きたいという当事者の希望がみられた。にもかかわらず、彼女たちの問題は顕在化されておらず、困難を受けとめる社会資源がほとんどない。また、よこはま若者サポートステーションの2008年度利用統計を男女別にみると、当時女性の利用は3割にとどまっており、女性たちはすでに地域にある支援にもなかなかつなげていないことがわかった。

そこで、若年無業女性(15歳から39歳のシングル女性を対象とする)に向けた就労・自立等支援事業を2009年度より開始した。これまでの女性向けグループ型就労支援事業の経験に基づいて、まず「ガールズ編しごと準備講座」(以下、「ガールズ講座」という)を立ち上げた³。女子学生の就職支援講座や働く女性のキャリアアップ講座とは異なる、働きづらさ・生きづらさに悩む若い女性向けの講座は当時どこにもなく、試行錯誤であった。講座の目的は、①安心感を体験すること、②自己肯定につながる気づきを得ること、③孤立からの脱出、と整理した。自己開示や状況を言語化することを強要せず、ヨガや声のワークなど身体的な面から入るのが特徴だ。また、相談からではなく講座を入口としたのは、グループ・ダイナミクスのよさが生かせると考えたためである。同じように悩む他のメンバーとかかわり、評価や競争なしのありのままにいられる安全な場を、参加者とともに作れるよう努力した。その結果、仲間の中で自分を見つめ、再発見できた、次の一歩につながったということがこの間の「ガールズ講座」修了者調査からわかった⁴。2018年12月現在、「ガールズ講座」は第20期までを終え、総計417名が受講している。

しかし、先の修了者調査において、「ガールズ講座」後すぐに求職活動に移行するケースは半数に満たなかった。若年の修了者が就労に踏み出すにはセルフケアや体調管理、人の中にいる安心感を繰り返し体験すること、具体的な体験から自己肯定感をもつこと、などいくつかのステップが必要だと思われた。

¹ 1987年「財団法人横浜市女性協会」として設立、2005年に名称変更。現在「男女共同参画センター横浜」(戸塚区)、「同センター横浜南」(南区)、「同センター横浜北」(青葉区)の3館を指定管理者として管理・運営する。

² 『若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査報告書』2009年3月
http://www.women.city.yokohama.jp/girls/tyousa_houkoku.pdf

³ 『男女共同参画センター等における生活困難を抱える若年(シングル)女性の自立支援プログラム開発事業報告書』2011年3月 http://www.women.city.yokohama.jp/girls/girls_tyousa/

『“ガールズ” 自立支援ハンドブック』2012年12月、当協会編、NPO法人全国女性会館協議会
⁴ 『ガールズ講座&「めぐカフェ」就労体験修了者追跡調査報告書』2014年3月
http://www.women.city.yokohama.jp/admin/pub/content-attached/id/5881/girls_tsuisekichosa
※2018年に2度目の調査を実施、『ガールズ講座修了者調査報告書』を2019年3月に発行予定

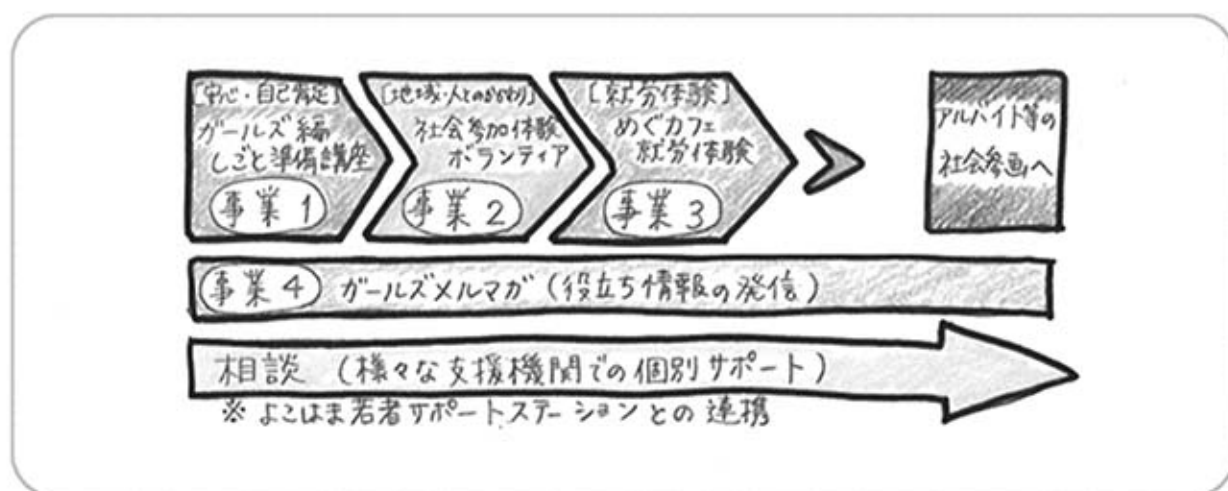
そこで2010年11月、男女共同参画センター横浜南の1階に、就労体験の場として「めぐカフェ」をオープンした。初夏からの立ち上げ準備には、「ガールズ講座」第1期～第3期修了者のうち希望した約20名が関わり、店名もメンバーでアイディアを出し合い、投票で決めたものだ。立ち上げ期のあれこれについては当時のブログ「めぐカフェスタッフ日記」⁵に記録がある。

就労体験事業がある程度軌道に乗った頃、体調等が整わずに就労体験にも参加できない人が少なくないことに担当職員が気づいた。そこで、地域のさまざまな市民グループ・NPOをお願いしてボランティアとして受け入れていただく社会参加体験事業を試行し、2015年度に本格的に開始。ここでセンターは中間支援のコーディネート役割を担った。センターの職員と支援事業利用者の間では支援する・される関係だが、市民活動の中でボランティア参加者はフラットで自発的に結ばれた人の輪の中にいられる。そして、自分の関わりによって人の役に立つ経験ができる。社会参加体験参加者の振り返りのコメントからは各人が自己肯定感を高めていることがうかがわれた。また、支援事業の講座や就労体験では期間が定まっているが、社会参加体験の活動では期間を限定されずに参加できることも、ペースが一人ひとり異なる利用者にはメリットであった。

さらに、2015年には当センターの仲介により市内の企業による職場体験機会の提供も始まり、事業の幅が広がった。

現在、案内している支援事業の「利用の流れ」は次の図のとおりである。

■若年無業女性（“ガールズ”）支援事業における「利用の流れ」



支援事業全体については専用の「ガールズ応援サイト」⁶を開設し、運営している。利用者の声をはじめ、この間の実績について、また、発表したいいくつかの調査報告書や執筆レポート、折々のメディア掲載等もサイト上に一覧を掲載している。

これまで積み重ねてきた支援事業の足跡について、次の表に整理した。

⁵ 「めぐカフェスタッフ日記」（2010年7月～2016年4月）<http://cafegirls.blog104.fc2.com/>

この後、「めぐカフェ」専用サイトに移行 <http://megucafe.sakura.ne.jp/home>

⁶ 「ガールズ応援サイト（働きづらさに悩む“ガールズ”サポート）」<http://girls-support.info/>

■横浜市男女共同参画推進協会における若年無業女性（“ガールズ”）支援事業の足跡

年 度	実 施 内 容
2009	◎「ガールズ編 しごと準備講座」（事前説明会あり）を開始。以来、春と秋に年間 2 コースずつ開講
2010	◎ 就労体験の場「めぐカフェ」開設 ◎ ブログ「めぐカフェスタッフ日記」、ツイッター「めぐカフェめぐちゃん」開設
2011	◎「めぐカフェ」での就労体験の段階的しくみと支援事業実施要領を整備 よこはま若者サポートステーションとの連携システム構築 ◎「若い女性の自立支援のための公開講座&支援者研修」企画・実施
2012	◎「ガールズ応援サイト」およびツイッターアカウント「横浜“ガールズ”サポート」開設 ◎ ガールズ講座修了者が期をこえて集う場「いちごの会」を開始(2016 年度で終了) ◎ 冊子『“ガールズ” 自立支援ハンドブック』刊行(発行:全国女性会館協議会)
2013	◎ 社会参加（ボランティア）体験事業を「ファイバーリサイクルネットワーク」「NPO 法人おもしろ科学たんけん工房」等の協力を得て試行実施 ◎「ライブラリ等就労体験」（20 回）を男女共同参画センター横浜で実施 ◎ 公開講座&支援者研修「若い単身女性の自立支援～講座・就労体験と地域連携」を企画・実施
2014	◎ 語りと写真によるデジタル・ストーリー「みんなの めぐカフェ」を制作、You Tube で公開
2015	◎ 社会参加体験事業を本格開始（ボランティア受入れは約 10 団体） ◎「若年女性のための社会参加体験プログラム」報告会&受入団体懇談会を実施 ◎「株式会社ティーアールアイ」受入れによる職場体験開始 ◎「めぐカフェ」専用サイト開設 ◎「寄付のお願い」リーフレット作成 ◎『下層化する女性たち～労働と家庭からの排除と貧困』刊行（勤草書房、「横浜市男女共同参画センターの“ガールズ” 支援～生きづらさ、そして希望をわかちあう場づくり」所収）
2018	◎「向洋電機土木株式会社」受入れによる職場体験実施

■コラム

手づくりの「めぐカフェ」立ち上げ、そして発展

●怒涛の立ち上げ

センター横浜南 1 階 交流ラウンジの奥にあるキッチンが空くことになりました。2010 年初夏。前年から始まった「ガールズ講座」が第 3 期まで終わっていたので、それまでのメンバーに「いっしょにカフェをつくりませんか？」と呼びかけたのです。全修了者の 3 分の 1 にあたる 20 人余が手をあげました。

やってみよう。だけど、何をどうしたらいいの？ 店名は？ 何を売る？ 仕入はどこから？ 職員も素人です。協働事業として「地モノやさい市」を行っていた団体の三好さんが運んでくれる旬の野菜を使ったスープと地元作業所の天然酵母パンのセットを基本メニューにすることに。必要なことのあれこれを洗い出し、立ち上げのガールズチームと汗を流す日々。参考になりそうなカフェを見学に行き、コーヒーのいれ方をみんなで習ったこともありました。今まで培ってきた人的ネットワークを駆使し、各人の得意なことを持ちより、4 ヶ月間の準備で 2010 年 11 月、「めぐカフェ」オープン！ 黒いエプロンをつけたメンバーの誇らしい顔。顔。顔。あの夏の暑さ、熱さが、めぐカフェの原点です。

●実習生を受け入れる場「めぐカフェ」を持続する

立ち上げ時は希望者に長期の研修を行い、修了したメンバー全員をアルバイトスタッフに迎えました。が、当時の営業は月曜と火曜の週 2 日だった（現在は週 4 日）のでスタッフのほうが多く、1 人がシフトに入れるのは微々たる時間でした。また、人がしょっちゅう入れ代わって責任の範囲もあいまいだと、店の運営に支障が出てきます。

カフェを持続していかないと体験の場は維持できない。そう考えてアルバイトは安定態勢をめざし、いろんな世代の人に入って支えてもらうようにしています。それでもカフェで調理をしながら実習生を見守るカフェコーディネーターの負担は大きいと思います。人が燃え尽きないようにするには……。大きな課題です。

●温かさが広がる場に

「ガールズ講座」で仲間との出会いがあったとすれば、「めぐカフェ」では仕事を通じた人間関係ができます。スタッフや、いっしょに取り組んだ仲間との絆が生まれ、過ごした場所が古巣になっていく。実習生は男女共同参画センターの職員やお客さんたちに見守られています。さらに野菜や食材を届けてくださる事業所やボランティアを受け入れてくださる地域の団体の方々、利用するお客さんとのつながりも温かいです。そして職員もまた「〇〇さんの笑顔を初めて見たね」などと彼女たちの変化を楽しみにし、励まされています。

関わる人それぞれ完ぺきではない者どうし、フォローし合って、しんどい荷物をおろしながら、やっていけたらと思っています。

(職員 K)



2. 調査の目的と方法

(1) 調査の目的

2010年に就労体験の場として「めぐカフェ」を開設以来、2017年度末までに体験修了者は122名に上った。

今回、三菱財団の助成(2017年度～2018年度)を得て、以下の3つを目的として「“めぐカフェ”就労体験修了者調査」を企画・実施した。

- ①体験修了者に聞くことで就労体験プログラムの長所・短所を検証、改善点等を抽出し、具体的改善を行うこと
- ②若年無業女性への支援プログラムとしての就労体験事業の効果・成果を明らかにすること
- ③本事業の効果・成果を社会に広く発信し、モデル事業としての汎用可能性を探ること

(2) 調査の方法

①アンケート調査の実施

体験修了者の声は、まず、アンケート調査を実施して把握した。

②グループインタビューの実施

続いて、体験修了者の生の声をより詳細に聴取するため、3回におよぶグループインタビューを実施し、分析・考察を深めた。

③関係者による考察

また、次に述べる検討会を立ち上げ、当支援事業の実施主体による自己評価、就労支援において連携している機関および専門家による評価を加え、事業の検証と今後のあり方の展望へと考察を進めた。

3. 検討会の開催

(1) 検討の体制

本調査は、有識者・関係者からなる次の検討会を組織して実施した。メンバーは以下のとおりである。

「めぐカフェ就労体験修了者調査およびプログラム検証検討会」

【検討委員】

名 前	所 属
大友 喜一郎	横浜市政策局男女共同参画推進課 担当課長
熊部 良子	NPO法人ユースポート横浜 よこはま若者サポートステーション 施設長
杉田 真衣	首都大学東京 准教授
長谷川 能扶子	有限会社 C マインド 代表取締役
常光 明子 (2017 年度)	男女共同参画センター横浜南 館長
小園 弥生 (2018 年度)	同 上

【事務局】

名 前	所 属
小園 弥生 (2017 年度)	男女共同参画センター横浜南 管理事業課長
大竹 彌生 (2018 年度)	同 上
関根 崇年	男女共同参画センター横浜南 職員

(2) 検討会の開催状況

検討会は 2017 年 10 月から 2018 年 7 月まで、以下のような内容で開催した（会場はいずれも男女共同参画センター横浜南）。

- 第 1 回 2017 年 10 月 6 日 「検討会の目的の確認、就労体験事業の現況と課題について」
- 第 2 回 2017 年 12 月 4 日 「調査方法と調査票の検討」
- 第 3 回 2018 年 5 月 16 日 「調査結果の共有と課題の検討」
- 第 4 回 2018 年 7 月 17 日 「事業の成果と改善点、報告書の構成・作成についての検討」

Ⅱ 「めぐカフェ」就労体験とは

1. 事業の概要

(1) 趣旨

「めぐカフェ」就労体験の主な目的は、接客や調理などの職業訓練ではなく、社会に参加するために必要なソーシャルスキル訓練の場を提供することである。「体調を管理する」「時間を守る」「あいさつをする」「声を出してやりとりする」などから始め、「人といっしょに安心して働く」ことを体験し、就労に必要な心身の状態を自ら確認し、次のステップに進むための準備機会としている。労働契約ではなく、いわゆる中間的就労として1人に1回3時間、週に2回程度の体験の場を提供するものだ。

段階的に「ステップ1」（無給で10日間）と「ステップ2」（手当付で20日間）の2段階のプログラムとしている。「ステップ1」では集合研修と個別研修を組み合わせ、就労に必要な基本を実践的に学び、「ステップ2」では個別研修が中心で、チームで仕事をする体験をする。

(2) 対象

「ガールズ講座」修了者を中心に、就労意向を持ち、その準備に入る体調等が整った人を対象に実施している（連携機関「よこはま若者サポートステーション」からの紹介者を受け入れることもある）。

「ステップ1」への参加の条件は、原則として「ガールズ講座」の欠席が3回以内であり、体調が整っていることとし、ガールズ講座の終盤(第10回)の説明でこれを伝えている。

「ステップ2」への移行は、「ステップ1」修了後、希望者から面談を経て決定している。

(3) 実施体制

男女共同参画センター横浜南の主催事業である。

- ・実施場所：男女共同参画センター横浜南 1階 交流ラウンジ内
- ・実施体制：担当職員(主担当1名ほか)、カフェコーディネーター(調理・見守り)、カフェアルバイト
- ・支援体制：「よこはま若者サポートステーション」等の支援機関との連携により体験者の支援体制を構成している。

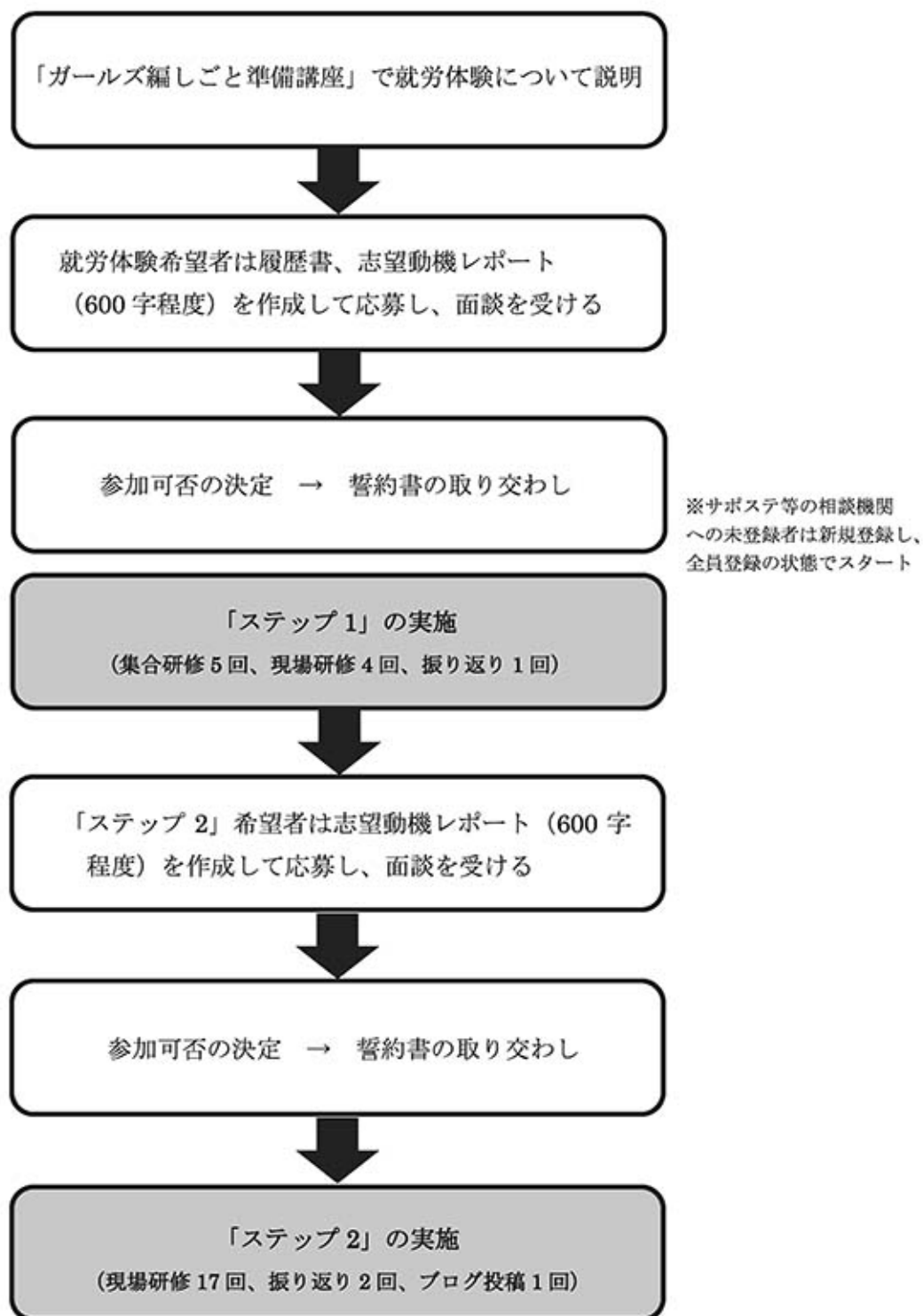
(4) 実施時期

「ガールズ講座」(春と秋)修了後、年2回受け入れている。通常、「ステップ1」は7～8月および1～2月、「ステップ2」は4～6月および10～12月に実施している。

2. プログラム

(1) 参加の流れ

「ガールズ講座」から「めぐカフェ」就労体験に参加する流れと手続きは次のようになっている。



※利用者への説明文、参加に際しての手続き書類は資料編参照

(2) 体験プログラム

段階的なプログラムの概要は次のとおりである。

■めぐカフェ就労体験「ステップ1」の概要（8名程度・3時間×10回・週2回程度）

◎目標

体調管理をする、時間を守る、あいさつをする、声をだす、身だしなみをきちんとするなど社会に参加するスキルを身につけること。

◎体験内容

1 オリエンテーション①	・自己紹介 ・食品衛生、体調管理、みだしなみ、日誌について
2 オリエンテーション②	・実習の心得、挨拶やコミュニケーション ・先輩スタッフの体験談、1日の業務の流れ
3 集客を考える	・カフェの集客方法について考えるワークショップ
4 情報を発信する・伝える	・ブログ・ツイッター投稿方法、投稿時のルールについて ・写真と記事執筆・アップ
5 マルシェやさい市	・野菜販売アシスタント。2チーム（午前・午後）に分けて実施
6 カフェ実習	午前シフト（10:00～13:00）開店準備、ランチ 等 午後シフト（13:00～16:00）ティータイム、閉店作業 等 （ひとり4回：午前、午後2回ずつ ※個別日程） ※カフェエプロン貸与。インナーは白を着用、髪はまとめること。
7 カフェ実習	
8 カフェ実習	
9 カフェ実習	
10 ふりかえりと発表	・修了レポートの提出と発表（全員）と振り返り ・修了証 授与

■めぐカフェ就労体験「ステップ2」の概要（4名・3時間×20回・週2回程度・手当付）

◎目標

カフェ業務においてチームの一員として動くスキルを身につけること。具体的には、

- ・業務の流れを自分で把握していく
- ・わからないことは聞く
- ・スタッフ間で必要に応じて声をかけあうことになれる
- ・日々の目標を自分で設定し、達成し、次の目標を立てていく

◎体験内容

開店準備（清掃、品出しなど）、調理補助（野菜を切る、下ごしらえをする）、番号札を呼ぶ、商品を出す、レジの練習をする（全員ではない）、ブログ記事投稿、振り返りなど

(3) 「めぐカフェ」の店舗運営

「めぐカフェ」の店舗としての運営は、次のとおりである。

営業日時：火・水・木・金曜日 11：30～16：00（14:00～ティータイム）

年間営業日数：約 170 日

座席数：20 席

メニュー：地場野菜を使った化学調味料無添加のスープ（2 種）と天然酵母パンまたはおにぎりのランチセット、手作りスイーツ、ドリンクなど

運営体制：カフェコーディネーターが営業時間中、常駐。ほかアルバイトスタッフ。

※カフェコーディネーターは調理責任者と就労体験トレーナーを兼ねる。

経営状況：2018 年度の売上目標は 1 日 22,000 円で、ほぼ達成している。

直接の運営経費には食材費、消耗品費、カフェコーディネーター謝金等があり、直接経費は売上でまかなっている。

スタッフ態勢として、1 日当たりのカフェ現場のスタッフは 3 名（コーディネーター 1 名、アルバイト 2 名）である。

コーディネーターには調理とカフェ現場の運営及び実習生のトレーナーといった複数の役割を依頼している。負担が大きくなりがちのため、現在は週 2 日ずつを 2 名で分担してもらっている。

コーディネーターと担当職員・課長は随時情報を共有し、定期的にミーティングを行っている。

アルバイトスタッフは週 1 日の人から 4 日勤務の人まで複数名がいる。実習生へのサポート・声かけも生じることから、アルバイトには多世代の人がいるよう配置を工夫している。

食材は神奈川県産の野菜など健康と環境にやさしいものを使用し、区内の福祉施設やお店の米粉パンやスイーツを仕入れている。地域の団体や人と連携することは当初からカフェ運営のポリシーとなっている。

(4) フォローアップ

●情報提供

「ガールズ講座」修了生専用のメールマガジン（講座修了後、希望者を登録）で、地域の団体のボランティアでの社会参加体験や企業での職場体験について、参加者募集の情報を配信している。就労体験を修了した直後や、時間を経ても就労に向かう状況が整わない場合に、気軽に利用できる体験機会としている。

●相談体制

若者サポートステーションの個別相談は修了後も継続利用できる。また、「ガールズ講座」で紹介している男女共同参画センター横浜の相談センターで面接相談を利用する人もいる。

●場の提供・見守り

就労体験修了後も「めぐカフェ」及び交流ラウンジはいつ来てもよい自由なスペースである。事務室にいる担当職員等に声をかけられれば話を聞いている。

また、修了者同士でその後も連絡を取り合ったり、同期会や自助グループ等の自主活動に取り組んだりしている姿も見られる。就労体験の場が、その後も続く人間関係を形成する機会となるよう図っている。

3. よこはま若者サポートステーションとの連携

センター横浜南の現場では就労体験の場を提供しているが、体験中に実習生への個別相談の機能は持っていない。そのため、実習中は必ず若者サポートステーション（以下、サポステ）等で個別相談をしてもらうことをルールとしている。支援機関とつながっていない人には「よこはま若者サポートステーション」を利用してもらうこととしており、結果として、実習生の9割近くがサポステでの相談を受けている。

体験応募時に行っている面談の際、サポステ等支援機関と当センター間で本人の目標と状況を共有することの了解を得ている。さらにサポステと当センターでは、体験のステップが修了する節目ごとに、その人にとってこの体験がどうであったか、ケースごとの振り返りを行っている。これを整理すると次のようになる。

■サポステとの連携の流れ

就労体験 開始時	実習生本人の了解を得て、担当相談員からサポステの連携担当者を通して各人の支援計画書を受け取る
就労体験中	各人の就労体験中の様子など、必要に応じてサポステの連携担当者及び担当相談員と情報を共有
就労体験 修了後	サポステの連携担当者及び担当相談員と就労体験中の様子、変化等をミーティングで共有

これらの情報共有は適切なサポートを行っていくために日頃から役立っている。とくに「ステップ1」から「ステップ2」への希望者をキャパシティ不足から受け入れることができなかった（これまでに複数回あった）ときに連携が心強いものとなっている。その人がいったんは疎外感を持ったとしても、「めぐカフェ」とは別の場を選んで、適切なサポートが得られるように支えていくことは、私たちセンターの現場だけでは到底できないことである。

なお、支援・連携機関が増え、横浜市青少年相談センター、かながわ若者就職支援センターなどサポステ以外の場で個別相談を行っている実習生もいる。その場合にも当センターの担当職員は、できる限りその機関の相談担当者と支援の方向性をすり合わせるよう努めている。

4. 利用実績

(1) 数の推移と年齢

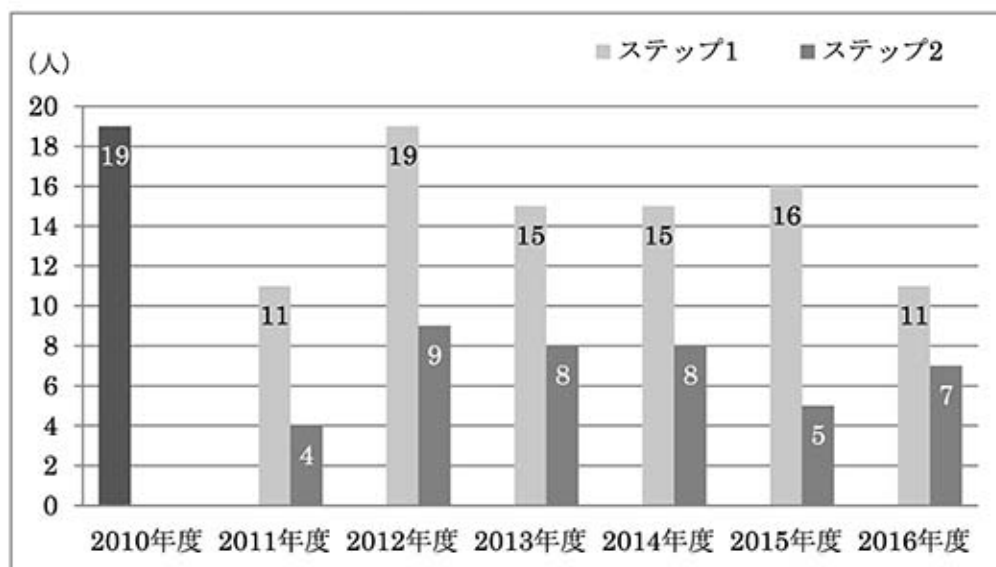
2010年度の「めぐカフェ」立ち上げ時は、段階的なプログラム体系はまだなく、開店までが一連の研修プログラムとなっていた。(実習)参加者は19名、平均年齢は28.7歳であった。

2011年度からはステップ1、ステップ2の2段階構成とした。平均年齢は28.2歳であった。「めぐカフェ」の体験事業がメディアに何度か取り上げられたことで周知が進み、2012年度には大幅に参加者が増加した。平均年齢は24.5歳となり、若い年齢層の参加が多く見られた。

2013年度からの参加者は年に15名前後となり、平均年齢も26歳前後に落ち着いた。

各年度の参加者数の推移は、次のグラフのとおりである(グラフには示していないが、この後2017年度はステップ1に12名、ステップ2に6名、2018年度はステップ1に14名、ステップ2に7名の利用があった。)

■めぐカフェ就労体験の参加者数



※2010年度はステップ1、2と分かれていないため、参加者の合計数のみ。

※2011年度より、基本的にはステップ1を修了した者がステップ2に応募し、受け入れている。

(そのため、本調査では2010年度の参加者数と2011年度より2016年度までのステップ1参加者数およびステップ2のみの参加者4名を合計した110名を対象とした。)

(2) 住所地

横浜市内	84名 ※18区の市内全域より
横浜市外	26名 (内訳：川崎市 6名、横須賀市・東京都大田区 各4名、鎌倉市・藤沢市 各2名、茅ヶ崎市・平塚市・相模原市・三浦市・大和市・秦野市・葉山町・愛川町 各1名)

2010-2016年度の(実習)参加者110名の住所地は横浜市内が8割近くを占めるが、2割強は他市町となっている。京急沿線で比較的通いやすいと思われる川崎・横須賀・東京都大田区のほか、県内の広域から参加がある。

■コラム

担当職員として苦心すること～チーム運営、持続、実習生への対応

「めぐカフェ」就労体験事業の主担当職員は1名だが、シフト勤務もあり、カフェの庶務や実習生の対応などほかの職員が随時フォローをしている。職員のチームが機能していないとフォローは難しい。職員一人ひとりにとって、実習生の表情が豊かになったり、生活リズムが整い顔色がよくなったり、話す言葉が増え楽しそうにしていたり、変化していく様子を見ることはうれしい。次の受入れを準備するモチベーションにつながっている。

カフェは、当センターの主催事業として財政面で自立した運営となることが望ましい。収支バランスをとることは就労体験の場を持続可能なものにしていくことである。同時に、来客が多くあれば実習生やスタッフのやりがいにつながる。そのため、集客の手立てとして、コーディネーターと相談して季節メニューを増やしたり、専用サイトやツイッターで伝えたり、リーフレットを作って配布したり、メディアの取材に対応したりといった情報発信をさまざま工夫している。また、一般に広く寄付や古本募金もお願いしている。必要経費をカバーできるようカフェの1日当たりの売上目標を設定し、現在これをクリアしていることは、歴代のコーディネーターはじめみんなの努力の結果だろう。しかし、繰り返し来店してもらえようお店の環境を整えるため、細かな気配りと実務をしながら、連携機関と情報を共有して就労体験を進めることはボリュームのある業務である。

また、実習生一人ひとりに対応するときに、本人の背景や(場合によっては障害などの)特性をある程度把握したうえで接することは大切だが、限界もある。実習生が人とのやりとりを何年もしていなかった場合、人の視線が気になりすぎるなど、人への不満や自分の感情を訴えてくることもある。そんな時にはグループ型支援の難しさを感じる。あとになって、世の中にはさまざまな人とその組み合わせがあり、人間関係も体験の一つだと本人に位置付けてもらえているとほっとする。

もう一つ、難しさを感じているのは実習生の受入れ時、ポジション転換について伝える伝え方だ。「ガールズ講座」受講時にはサービスを受ける立場だったが、就労体験では来店するお客様にサービスを提供する立場に変わる。この転換の意味を伝え、意識づくりを促している。しかし、参加のハードルが高くなりすぎないようにこれを伝えることが難しい部分である。

(職員 S)

Ⅲ アンケート調査

1. 実施概要

(1) 実施方法

郵送法（調査票を郵送、切手を貼付した返信用封筒を同封）

(2) 実施期間

2017 年 12 月 28 日～2018 年 1 月 20 日

(3) 調査の対象

2010 年度から 2016 年度までの就労体験修了者 110 名

内訳：ステップ 1 のみ参加 65 名

ステップ 2 のみ参加 4 名

ステップ 1,2 両方に参加 41 名

※修了後もない 2017 年度の修了者は対象外とした。

(4) 調査項目

設問数：計 30 問

①回答者のプロフィール

②就労体験について（ステップ 1、ステップ 2）

③就労体験後の行動および就労状況

④現在の就労状況

⑤悩みの相談先、仕事以外の活動、今の自分に必要なこと、将来について等

(5) 回収状況

①配布数：現住所不明者を除く 98 件

②回収数：46 件（有効回答票数）

③回答率：46.9%（②／①）

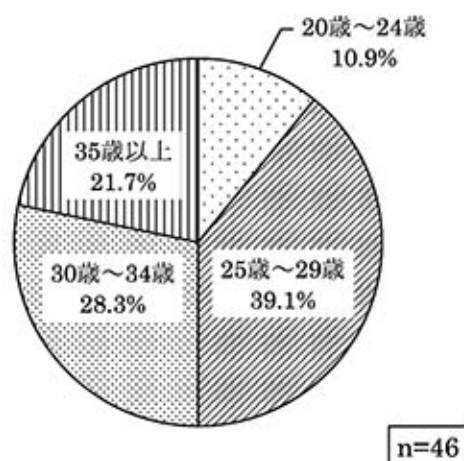
2. 調査結果

(1) 回答者について

Q1 2018年1月1日現在、何歳ですか？

現在の年齢（2018年1月1日現在）は平均29.9歳。「25歳～29歳」が39.1%で最も多く、次いで「30歳～34歳」の28.3%となっており、20代後半から30代前半が多くなっている。

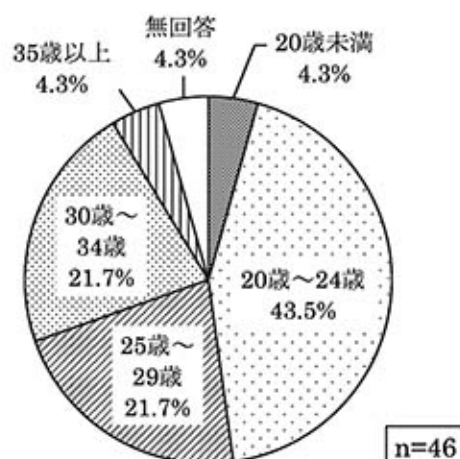
図表 1：現在の年齢



Q2 「めぐカフェ」就労体験を修了したときは、何歳でしたか？

就労体験修了時の年齢は平均26.2歳。「20歳～24歳」が43.5%で最も多く、次いで「25歳～29歳」と「30歳～34歳」の21.7%となっている。

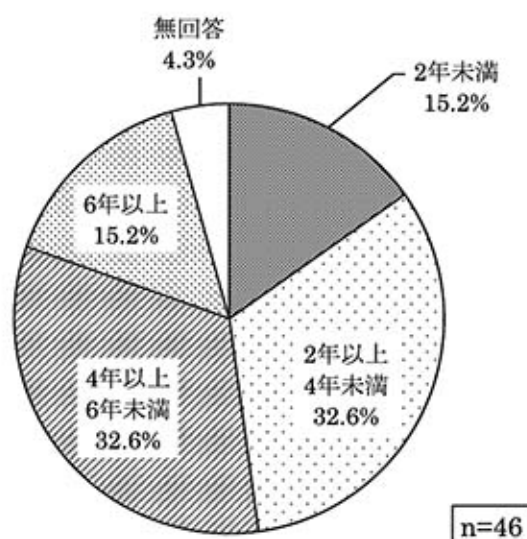
図表 2：就労体験修了時の年齢



Q1×Q2 「めぐカフェ」就労体験修了からの経過年数

現在の年齢（Q1）から、めぐカフェ就労体験修了時の年齢（Q2）をマイナスした、調査時点での経過年数をみると、平均 3.7 年。「2 年以上 4 年未満」と「4 年以上 6 年未満」がいずれも 32.6%、「2 年未満」と「6 年以上」がいずれも 15.2%となっている。

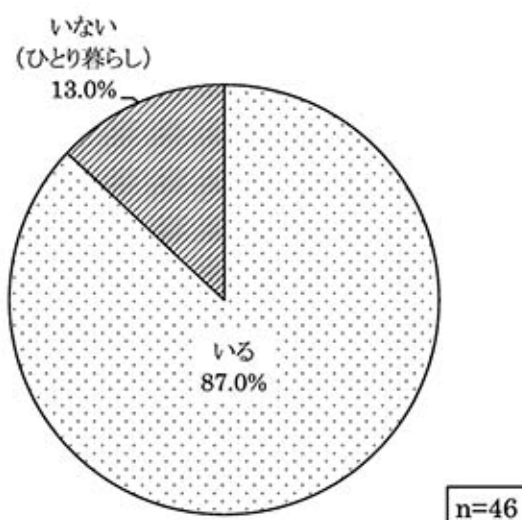
図表 3：就労体験修了からの経過年数



Q3 現在、同居の家族はいますか？

現在の同居の家族は「いる」が 87.0%、「いない（ひとり暮らし）」が 13.0%となっている。

図表 4：同居の家族の有無

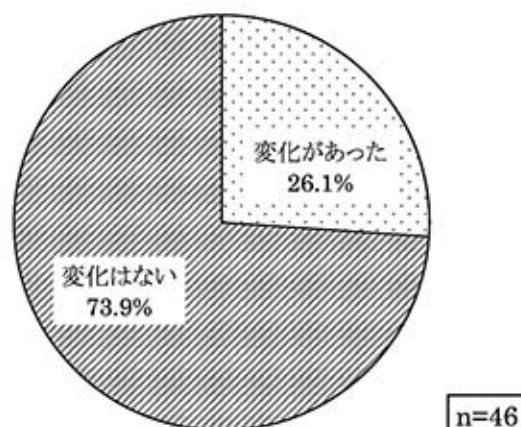


Q4 就労体験当時と比べて、同居の状況に変化がありましたか？

同居の状況については、就労体験当時と比べて「変化があった」は26.1%、「変化はない」が73.9%で「変化がない」割合が高くなっている。

「変化があった」内容としては、「ひとり暮らしを始めた」が5名、「結婚した」「親が亡くなった」が各1名あった。

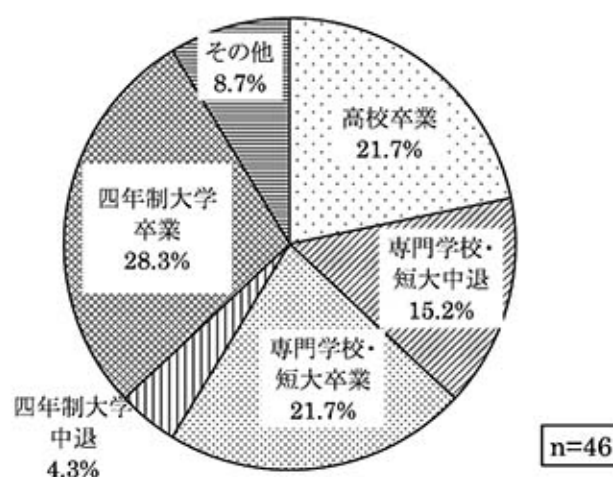
図表 5：同居の状況の変化



Q5 最終学歴をおたずねします

最終学歴は「四年制大学卒業」が28.3%で最も多く、次いで「専門学校・短大卒業」と「高校卒業」がいずれも21.7%で続いている。

図表 6：最終学歴

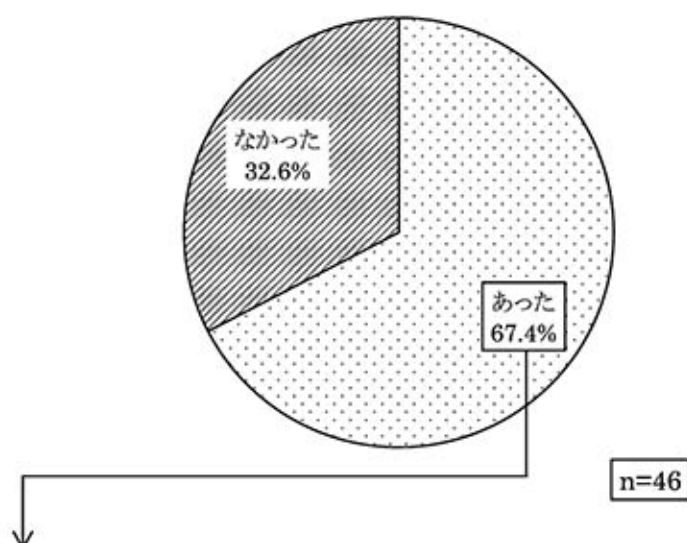


なお「その他」と回答したのは4名で、「通信の大学に在学中」「職業技術校在学中」「放送大学卒業」「四大卒の上に、現在聴講生として単科履修」と記述していた。

Q6 「めぐカフェ」に通う以前に、就労した経験はありましたか？

めぐカフェ就労体験以前の就労経験については、就労経験が「あった」が 67.4%、31 名となっている。「なかった」は 32.6%と 3 割を上回った。

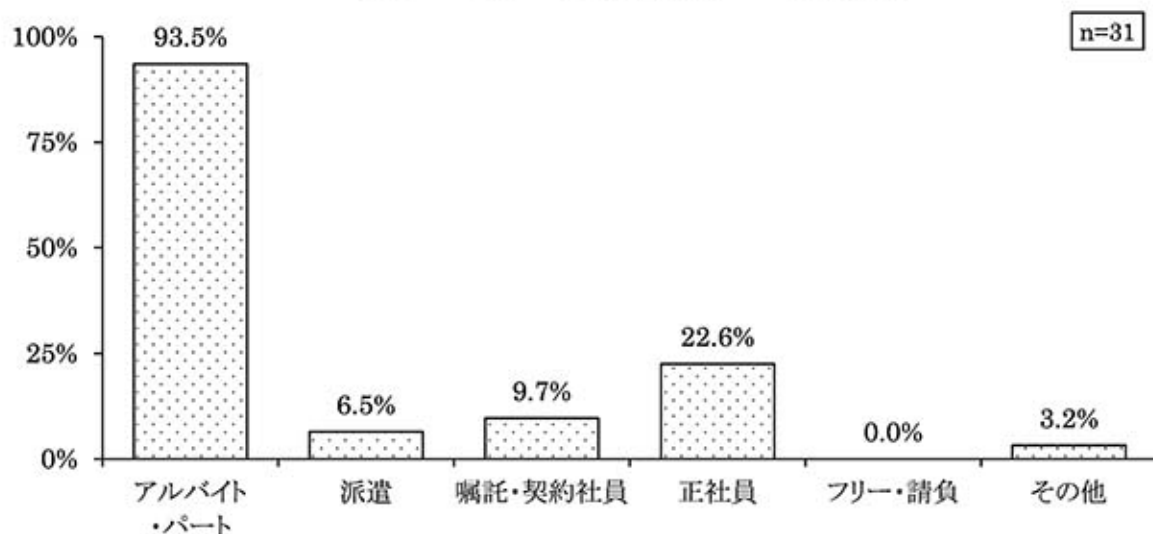
図表 7：めぐカフェ就労体験以前の就労経験



Q7 以前に経験した仕事の雇用形態はどれにあたりましたか？

めぐカフェ就労体験以前に就労経験のある 31 名に、経験した雇用形態を複数回答形式で質問した。その結果をみると「アルバイト・パート」が 93.5%と高く、次いで「正社員」が 22.6%となっている。なお「その他」(1 名)は「実習生」となっている。

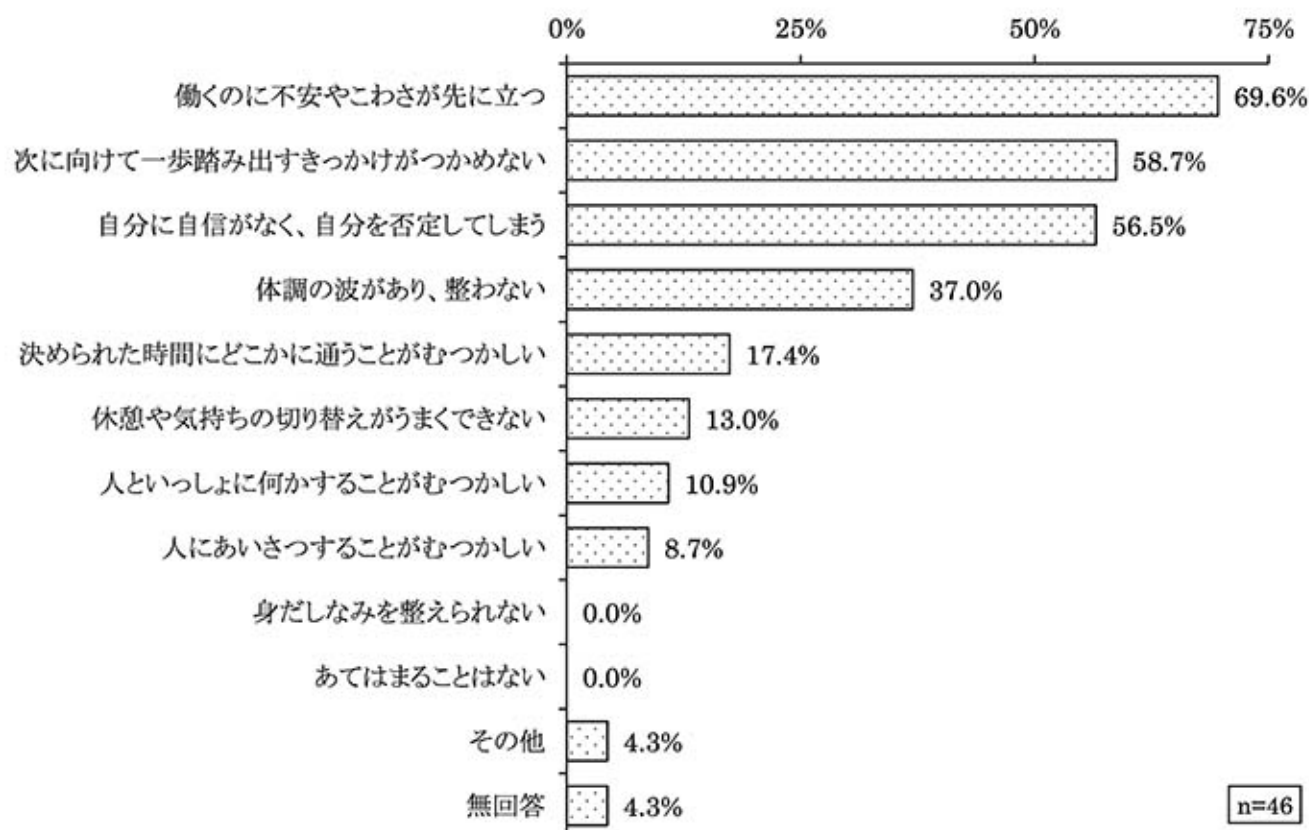
図表 8：経験のある就労形態 (複数回答)



Q8 「めぐカフェ」に入る前に、悩んでいたのはどんなことでしたか？

めぐカフェ就労体験以前に悩んでいたことは、「働くのに不安やこわさが先に立つ」が69.6%で最も多く、次いで「次に向けて一歩踏み出すきっかけがつかめない」(58.7%)、「自分に自信がなく、自分を否定してしまう」(56.5%)が続く、この上位3項目については過半数の回答者が当てはまると回答した。

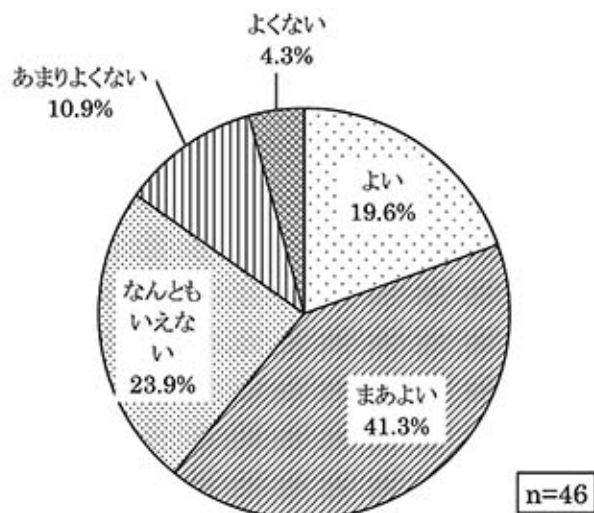
図表9：「めぐカフェ」に入る前に悩んでいたこと（複数回答）



Q9 現在の体調はいかがですか？

体調は「まあよい」と答えた回答者の割合が41.3%で高い。「よい」の19.6%を加えると6割程度は体調がよい。一方で「あまりよくない」(10.9%)と「よくない」(4.3%)の合計は15.2%となっている。

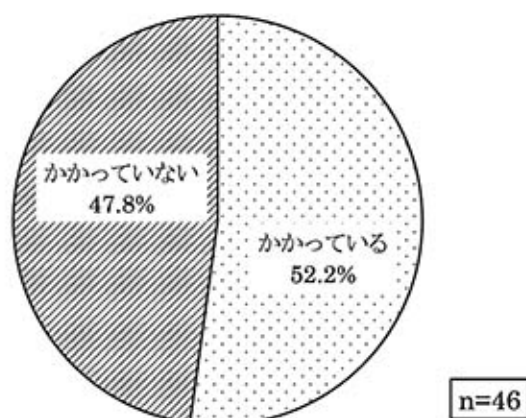
図表 10：現在の体調



Q10 現在、医療機関にかかっていますか？

現在医療機関に「かかっている」のは52.2%、「かかっていない」のは47.8%で、ほぼ半々となっている。

図表 11：医療機関受診の有無

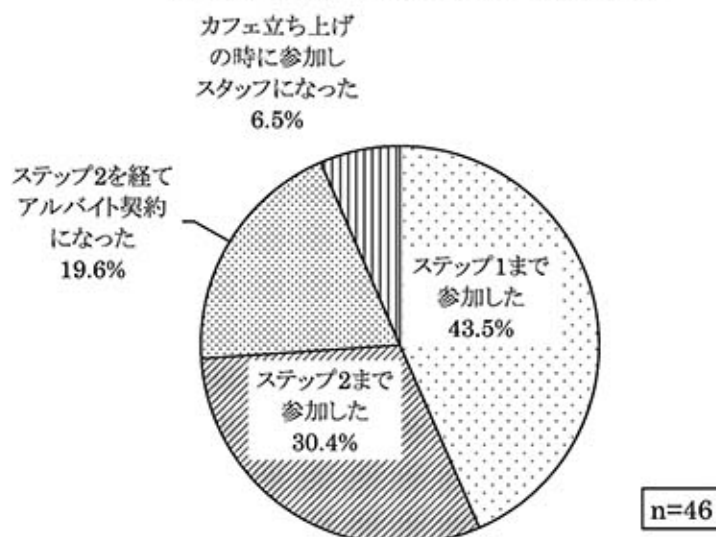


(2) 「めぐカフェ」就労体験に参加して

Q11 「めぐカフェ」就労体験にはどこまで参加しましたか？

めぐカフェ就労体験については、「ステップ1まで参加した」が43.5%で多く、次いで「ステップ2まで参加した」が30.4%となっている。なお「途中で参加をやめた」は回答がなかった。

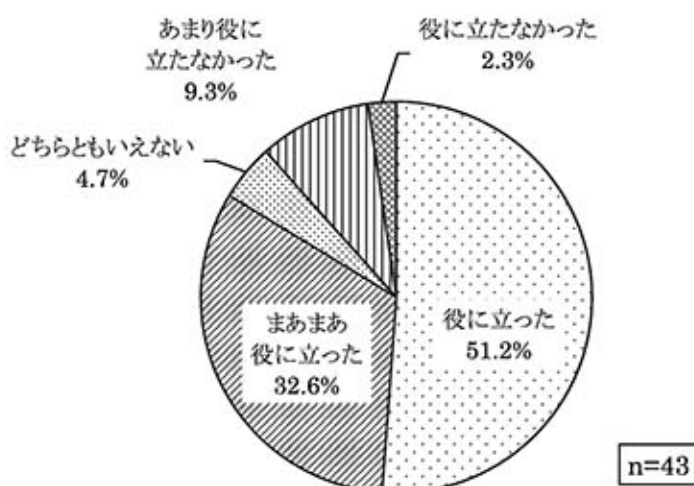
図表 12：就労体験にどこまで参加したか



Q12 就労体験ステップ1 プログラムはあなたの役に立ちましたか？

「めぐカフェ」立ち上げに参加した3名を除く43名にステップ1の効果を質問している。その結果をみると「役に立った」が51.2%と半数を超え、「まあまあ役に立った」の32.6%と合わせると8割以上が役に立ったと回答している。

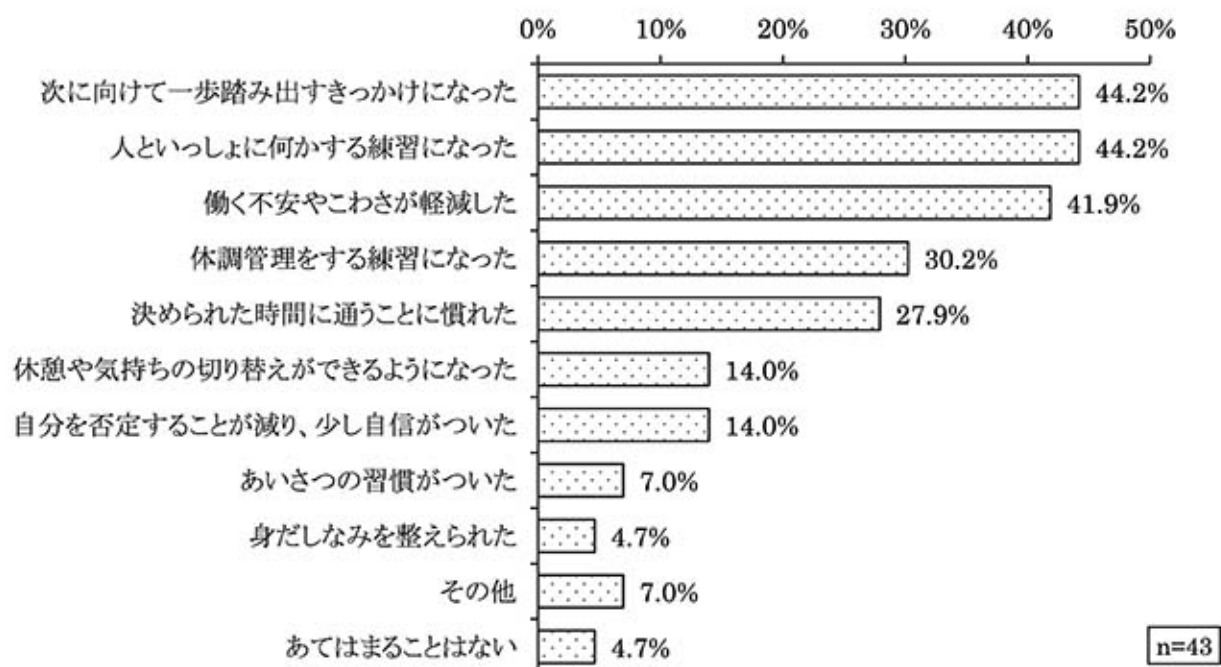
図表 13：ステップ1のプログラムの効果



Q13 役に立ったのはどんな点でしたか？

役に立った点は「次に向けて一歩踏み出すきっかけになった」と「人といっしょに何かする練習になった」がいずれも 44.2%、「働く不安やこわさが軽減した」も 41.9%とほぼ同じ割合で高くなっている。

図表 14：ステップ 1 が役に立った点（複数回答）



Q14 ステップ1をふりかえってとくによかった点

回答を「体験内容」「環境」「本人の変化」の3項目に分け、キーワードごとに整理・抜粋した。

① 体験内容について

1. 身だしなみ、あいさつ、業務の流れ、などの座学で心構えができた	
	- いきなりカフェ実習に入るのではなく、心がまえや身だしなみなどの座学で始まり、カフェ実習を少ない回数で少しずつ取り入れることができて安心した。 - アルバイト等社会に出る勇気がなくなっていたとき、身だしなみ、あいさつなど簡単なことからできたので、その当時の私には無理のない内容でよかった。 - 最初に座学で食品衛生や接客時の言葉遣いなどについて学び、その後カフェ実習に入ったことで、きちんと心の準備ができたのでよかった。 - 実技だけでなく、座学があったところがよかった。実際にカフェに立つ前に衛生管理や仕事の流れを知れた。心構え、心の準備ができた。
2. 現場実習回数が無理のない回数だった	
	現場実習が(10回のうち)4回だけで、短期間だったので体力的にも精神的にも負担が少なく、通いやすかった。
3. 集客を考えたり、ブログ投稿したりすることが勉強になった	
	- カフェの集客を考えたり、ブログの投稿をすることで、実際のカフェの雰囲気を知れた点もよかった。 - カフェ実習だけでなく座学もあったので、ブログなど他のことも勉強になった。
4. その他	
	- 毎回はじめに振り返りを発表した点もよかった。人前で話すことに慣れた。 - アルバイト経験もない状態だったので、実際にカフェでお客様相手に接客できたこと。挨拶の言い回しも身に付いた。 - やさしい市の実習がとくに楽しかった。

② 環境について

1. 仲間がいることを実感でき、励まされた	
	- 家族以外の人と関わることができた。 - 他の参加者と一緒に活動する日が多かったので、仲間が居るという事を実感することができて心強かった。 1人ではなくスタッフとして仲間ができて働けたのがよかった。 - 同期の仲間を見て、「私も頑張ろう」と励まされた。 - めぐカフェで一緒だった方と知り合いになって、一度お茶ができた。
2. スタッフや先輩によるサポートがいてよかった	
	- 実習生は一人ずつ入るシステムだったので、スタッフさんの目が行き届く環境で、分かりやすくていねいに仕事内容を教えていただけた。 - やることがわからなかったとき、先輩が「これやってくれる?」と気にかけてくれた。
3. 安心して実習できる場だった	
	- お客様やフォーラムのスタッフさんなど、めぐカフェ全体の雰囲気が優しく、安心して参加できた。 - 安心して作業や実習ができる場所だったことがよかった。 - 事務所の人も含め、まわりの方が優しく安心した。

	・怒鳴ったり、理不尽な理由で怒ったりされなかった。
--	---------------------------

③ 本人の変化について

1. 体調管理を心がける習慣がついた	
	・無理はしないようにと言ってくれて、自分の体調と向き合いながら参加できた。 ・体調管理を心がける習慣が身につくようになった。
2. 自分の向き、不向きを確認することができた	
	・飲食業や接客業に適性があるかどうか見極めることができた。 ・接客、飲食店の体験ができ、自分の向き不向きが知れてよかった。
3. 定期的に通う場所ができ、通う練習ができた	
	・定期的に通う練習ができた。 ・毎週、行く場所を与えて頂けたことがよかった。
4. 働くことをイメージできた	
	・働くことへのイメージがつかめるようになった。 ・野菜市の体験やカフェ実習を通して人と接する楽しさを知り、そういう仕事がしたいと改めて思った。 ・自分がどのような状況で慌ててしまうのか、体験できた。接客の楽しさを再確認できた。

Q15 ステップ1をふりかえってこんな内容がほしかった、こうだったらよかった、など改善点

回答を「体験内容」「環境」の2項目に分け、キーワードごとに整理・抜粋した。

① 体験内容について

1. カフェの現場実習回数をもう少し増やしてほしかった	
	・カフェ現場実習が10回くらいできたらよかった。 ・実技の回数がもう少し多いといいかも？（ステップ2まで進めない方もいるので） ・カフェでの実習があと1～2回多いと、より“現場”で学べるが増えていいと思う。 ・カフェ現場実習の時間がもう少しあってもよかった。4回だけでは中途半端でステップ2に進むか進まないか非常に迷ったので。せめて10回、もしくは1週間くらい設けてほしかった。
2. 実習内で考えたことを実践する機会がほしかった	
	・カフェの宣伝を考えることが楽しかったけれど、あまり実行できなかったのも、看板を書くこと等、できそうなことはしてみたかった。 ・ブログの練習をしたが、実習では機会がなく残念だった。
3. その他	
	・野菜市で試食をすすめるのが難しく感じたので、少し練習してから挑みたかった。 ・与えられた仕事だけでなく、自分から仕事を教えたり、指示する機会がほしかった。 ・カフェ（現場）実習中にも他の実習生と、不安なところなど共有できる回があったらよかった。 ・カウンターの中での作業が多かったのも、もっと全体的に自分の働いている姿を客観視できたらよかった。

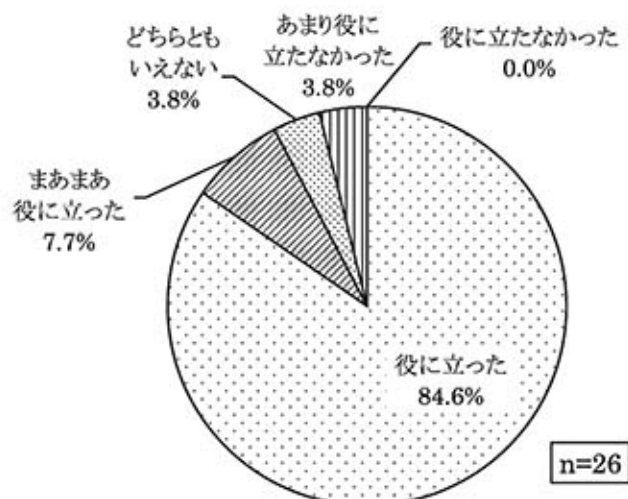
② 環境について

1. 個別の相談機会やサポートがほしかった	
	・ひまな時間帯の「雑談」が苦痛だったので、そういう悩みを相談できる個別相談のようなものがあればよかった。 ・もっと、つきっきりで指導をしてくれる人がいたらよかった。1回の説明で、ほっとかれた感じがした。
2. その他	
	・指導につくのは女性スタッフだと思って応募していたため、事前に男性とわかっていれば応募しなかった。できれば女性スタッフか、女性スタッフとのセットにしてほしい。ただ、最終的にはスタッフは男性だけれど危険ではないと徐々に考えられるようになり、男性恐怖を克服するとてもよい訓練となった。

Q16 就労体験ステップ2 現場体験プログラムはあなたの役に立ちましたか？

ステップ2に参加した26人にその効果を質問している。その結果は「役に立った」が84.6%で、「まあまあ役に立った」7.7%と合わせると9割以上が役に立ったと回答している。

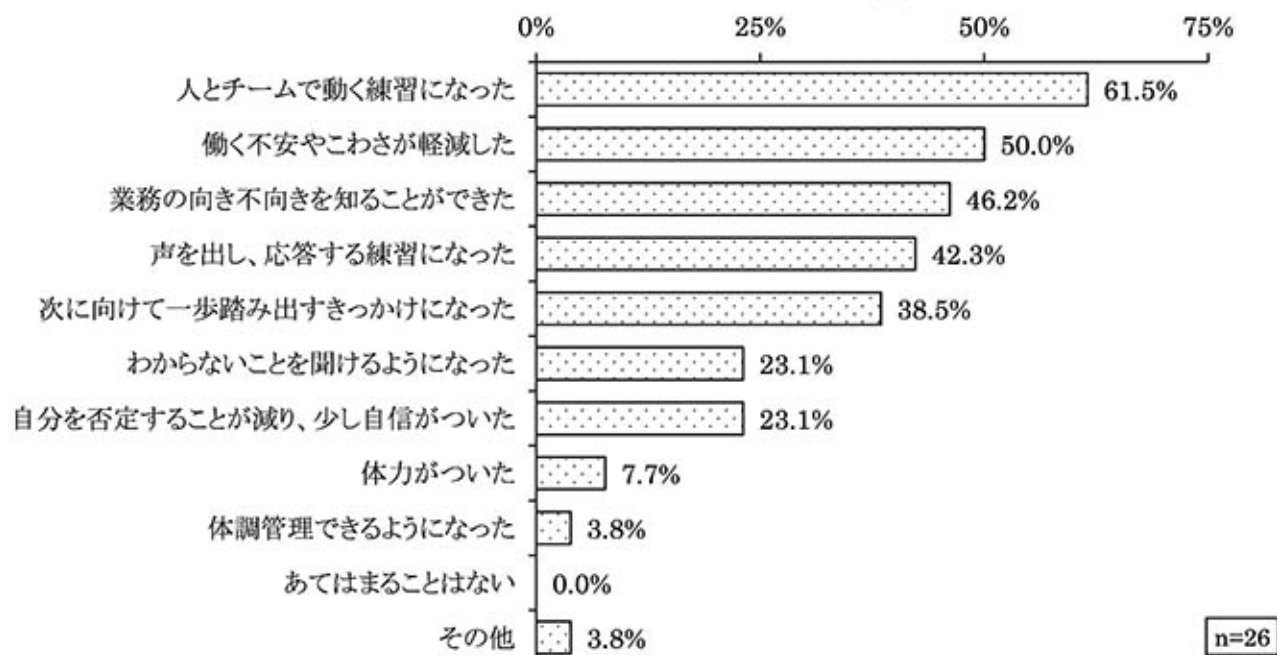
図表15：ステップ2プログラムの効果



Q17 役に立ったのはどんな点でしたか？

役に立った点は「人とチームで動く練習になった」が61.5%で多く、次いで「働く不安やこわさが軽減した」が50.0%となっている。

図表16：ステップ2が役に立った点（複数回答）



Q18 ステップ2をふりかえってとくによかった点

回答を「体験内容」「環境」「本人の変化」の3項目に分け、キーワードごとに整理・抜粋した。

① 体験内容について

1. 現場の実習回数が多かった	
	・カフェ業務を20日間も体験することができて良い経験になってよかった。 ・現場実習の回数が多くてよかった。 ・「めぐカフェ」に通うことが習慣になった。
2. 他の人との共同作業が体験できた	
	・他の人と一緒に作業することが今まで少なかったのが、無理のないやり方で共同作業ができたのが、とてもありがたかった。 ・それまでの生活と比べて、誰かと話したり、行動したりする時間がとても増えたので、うれしかった。
3. その他	
	・毎回目誌を書くことも大事だった。その日の行動についてきちんと振り返り、反省して、次の実習につなげられたのが、特によかった。 ・レジ操作、お金の管理ができたこと。

② 環境について

1. ていねいなサポートがあり、安心して体験・参加できた	
	・やさしく、わかりやすく教えていただいて、安心して体験することができた。 ・働きづらさを理解して働ける場所だったので、安心して働くことができた。 ・自分ができている点とまだできていない点(改善点)をスタッフの人に教えてもらえたことで、自分がどうすべきか考えることができた。 ・まわりの方たちがあたたかくフォローしてくださったので、苦手なことにもゆっくり取り組むことができた。 ・調理のやり方やコーヒーのいれ方等、すべて一からていねいに親切に教えていただいたので、とても安心して参加することができた。
2. 実習手当があることがよかった	
	・初めて働いて、実習手当の明細をもらった時が、とても感動した。 ・手当が出たことでほんの少し胸を張って過ごせるようになった。 ・交通費がかかったのが、手当をいただけたことはありがたかった。 ・手当がいただけるのも、「働いている」という実感が得られてよかった。 ・週2回決まった時間、働いて手当をいただくことで、自信になった。

③ 本人の変化について

1. 人と働くイメージをつかむことができた	
2. 自分の向き、不向きを知ることができた	・ずっとカフェ(現場)実習だったので、働いている意識をステップ 1 より強く持てた。人と働くことのイメージがつかめた。 ・以前の仕事からブランクがあったので、人と働くということの感覚を取り戻す、よい場になった。
3. 働くことへの抵抗感が減り、自信がついた	・ステップ 1 よりも長く勤める(体験する)ことでイメージができ、自分の向き不向きを知ることができた ・自分はということが苦手なのか、仕事の上でも、一緒に働く人との関わり合いの上でも、それを改めて知るきっかけになった。 ・自分の得意・苦手なことがよくわかった。
4. 自分で考えて行動できるようになった	・働くことについての抵抗感が少し軽くなった。 ・自分なりの目標を立てて達成できたことで、できることが増えて少しずつ自信がついた。 ・仕事をすることが怖くなくなった。 ・週 2 日、1 日 3 時間というペースがその時の自分の体力に合っていたので、体調を整えながら通い通すことができ、自信がついた。
	・初めはスタッフさんが一緒に作業をして下さり、慣れてきたら徐々に指示なしで、自分で考えて行動できるようになった。その点がとても自信になったので、よかった。 ・少しずつ自信にもつながり、自分がどう行動したらいいのかを、自分自身でも考えられるようになった。

Q19 ステップ2をふりかえってこんな内容がほしかった、こうだったらよかった、などの改善点

回答を「体験内容」「環境」の2項目に分け、キーワードごとに整理・抜粋した。

① 体験内容について

1. 同期の人たちと悩みを共有できる場がほしかった	
	・一緒に実習をしている人たちと、不安や悩みを話したり、意見交換する時間がほしかった。 ・他の実習生と、不安なところを共有できる回があったらよかった。
2. レジ打ちの練習をもう少ししたかった	
	・もう少しだけレジの実践がしてみたかった。 ・レジ打ちの練習をしたかった。アルバイトになってから不安だったので。

② 環境について

1. 長時間のシフトに挑戦したかった	
	・午前と午後のシフトに分かれていて体力的にもちょうどよかったが、一度だけでも通しでやってみたかった。 ・長時間入れる日が1回でもあるとよかったかも？ (フルタイムで働いたことがなかったので、どんな感じなのだろうと…)
2. その他	
	・体験のペースや時間を簡単に調節できたらうれしかった。 ・振替制度があればうれしかった。(体調不良で休んでしまったことが心残りだったため)

(3) 修了後の就労等の状況について

Q20 あなたが「めぐカフェ」就労体験の後にしたことはどんなことでしょうか？

① 就労体験後行ったこと

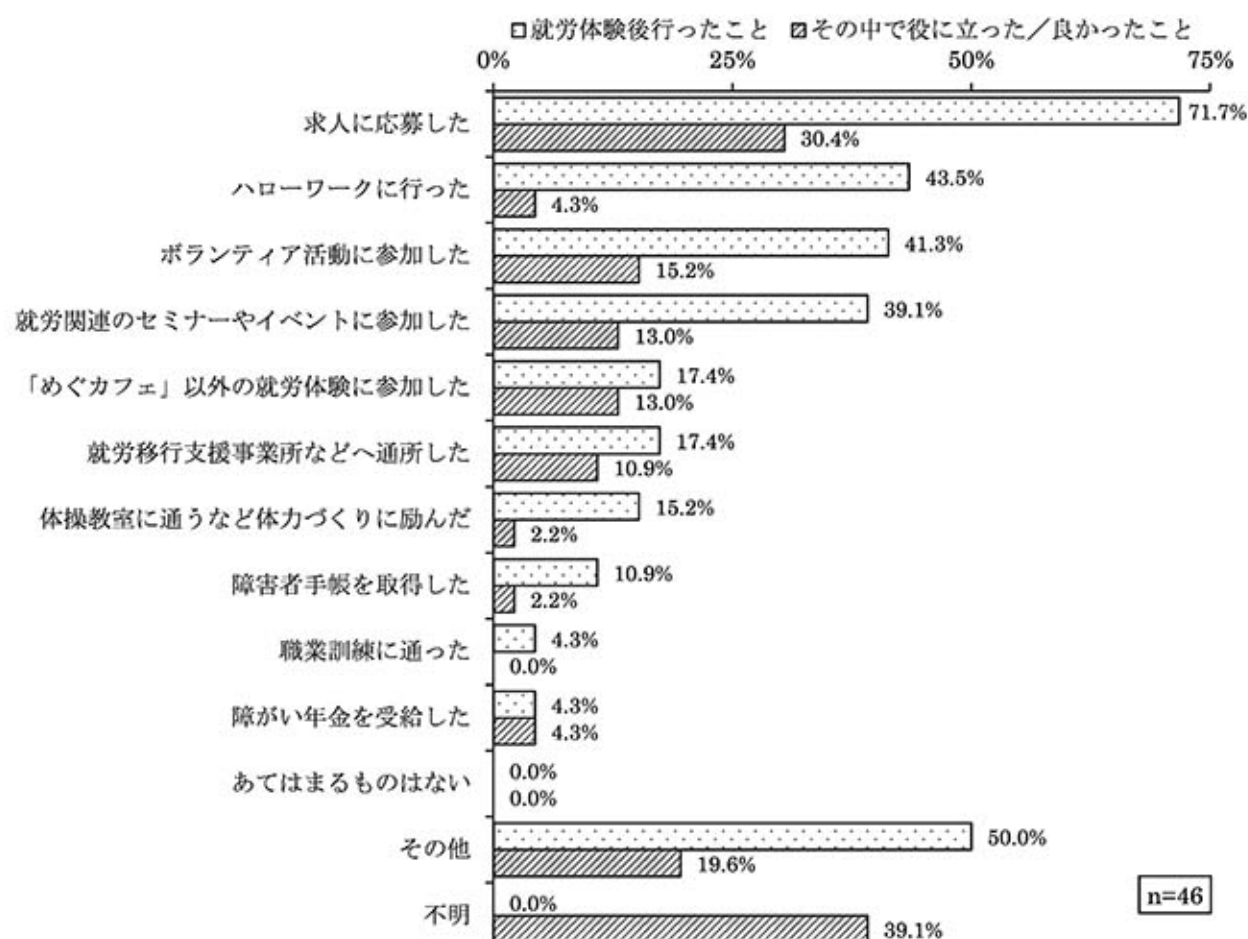
「求人に応募した」が71.7%で最も多い。次いで高いのは「ハローワークに行った」「ボランティア活動に参加した」「就労関連のセミナーやイベントに参加した」の順になっている。

② 就労体験後行ったことで役に立った／良かったこと

就労体験後行ったことで、役に立った／良かったことは「求人に応募した」が30.4%で多く、次いで「ボランティア活動に参加した」が15.2%となっている。「ハローワークに行った」のは43.5%だったが、役に立った割合は4.3%と、低くなっている。

「その他」も多い。具体的な内容としては「精神科などの医療機関の受診」が10名、「よこはま若者サポートステーションに行った」が9名、「学校に通った」が5名、「ひきこもり女子会」が3名、などとなっている。

図表 17：就労体験後にしたこと（複数回答）

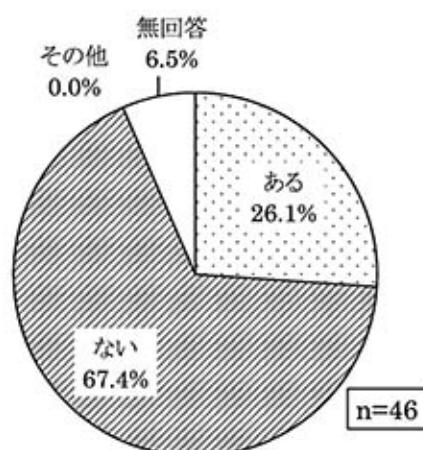


Q21 障害福祉サービスを利用したことがありますか？

障害福祉サービスの利用は、「ある」が 26.1 で、「ない」が 67.4%となっている。

具体的な利用の内容としては、「自立支援医療」が 3 名、「デイケア」「就労移行支援事業所」「福祉サービス受給証（福祉パス）」が 2 名、ほかに「障害者手帳」「障害年金」「生活訓練に通所」「相談支援」「生活支援センター」「自立生活アシスタント」という記述が各 1 名ずつあった。

図表 18：障害福祉サービスの利用



Q22 「めぐカフェ」体験修了後からこれまでに経験した仕事がある方に、内容や期間、働き方についてお聞きします

39 名がこの問いに回答し、経験した仕事を記入している。これは全回答者 46 名の 84.8%に上っており、次の Q23「現在、収入のある仕事や活動をしているか」への回答で「している」と答えた 67.4%より高い割合となっている。

回答は、次ページの一覧のとおりである。直近の働き方をみると、「アルバイト」が 24 名と過半数を占め、次が「障害者雇用」で 4 名、「正社員」「契約社員」が各 3 名、「フリーランス」が 2 名となっている。

また、経験した仕事の数では、2 つを経験した者が 21 名と最も多く、1 つを経験した者が 16 名、3 つ以上の仕事を経験した者は 2 名である。

書き込まれた直近の職種を多い順にみると、「作業・清掃」（9 名）、「事務」「接客・販売」（各 7 名）、「病院の受付等」「飲食」（各 3 名）と続く。ほかには「製造」「調理補助」「介護」「看護補助」などがあげられた。

修了後の年数と仕事の経験、本人の年齢と仕事の経験については特段、相関関係はみられなかった。

図表 19:「めぐカフェ」就労体験修了後の職業経験

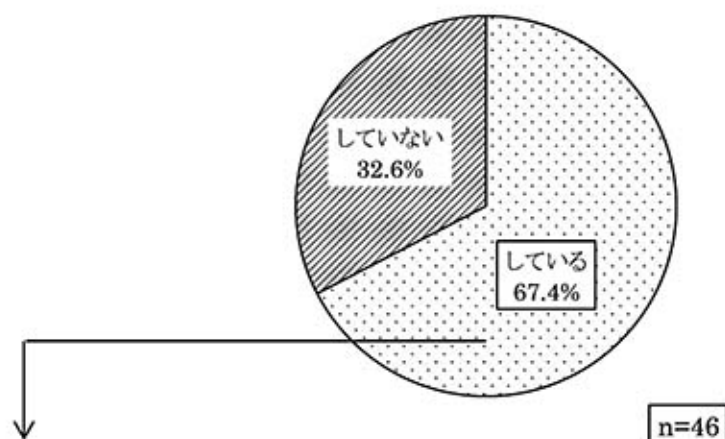
	修了後に経験した主な仕事			修了後に経験したその他の仕事	修了後に経験した仕事の数	修了後の年数	直近の働き方
	内容	期間	働き方				
1	病院の事務・受付	2年1ヵ月	正社員		1	4年	正社員
2	販売・製造	10ヵ月	正社員	販売・製造	2	2年	
3	事務	2年	正社員	事務	2	2年	
4	接客業	5年	契約社員	事務	2	不明	契約社員
5	サービススタッフ	2ヵ月～現在	契約社員	イベントスタッフ(単発)	2	5年	
6	介護	1年3ヵ月	契約社員		1	2年	
7	販売・製造	3年	アルバイト	販売	2	7年	アルバイト
8	パン屋(接客・製造)	1年4ヵ月	アルバイト	飲食店接客	2	3年	
9	軽作業	5ヵ月	アルバイト		1	3年	
10	調理補助	1年7ヵ月	アルバイト		1	5年	
11	販売接客	3年2ヵ月	アルバイト		1	5年	
12	スーパー(商品の袋詰め)	3ヵ月	アルバイト		2	3年	
13	飲食	2年5ヵ月	アルバイト		1	1年	
14	介護	1年	アルバイト	接客(高齢者住宅)※	1	1年	
15	事務	1年	アルバイト	式場の飾りつけ	2	5年	
16	清掃	1年	アルバイト	軽作業	2	4年	
17	販売	2ヵ月	アルバイト	事務	2	3年	
18	調理・接客	3年	アルバイト	調理・接客	1	1年	
19	受付、事務、接客	1年6ヵ月	アルバイト	受付、事務、接客	2	3年	
20	調理	1年3ヵ月	アルバイト	接客	2	7年	
21	医院の受付・事務	2年4ヵ月	アルバイト	菓子の製造・販売	2	4年	
22	倉庫内軽作業	2ヵ月	アルバイト		1	3年	
23	軽作業		アルバイト		1	6年	
24	事務系書類チェック	1ヵ月	アルバイト	郵便局短期(年賀状の仕分け)	2	5年	
25	絵画教室の講師	3年	アルバイト	墓地管理事務所の事務	2	4年	
26	軽作業(郵便物の仕分け)	11日	アルバイト		1	1年	
27	めぐカフェスタッフ	1年3ヵ月	アルバイト		1	3年	
28	コールセンター(発信)	2年	アルバイト	コンタクトセンター(受発信)	2	5年	
29	調理補助	10ヵ月	アルバイト	医療※	2	1年	
30	一般事務	1年3ヵ月	アルバイト	データ整理・入力	2	4年	
31	総務事務(雑務・電話対応)	9ヵ月	障害者雇用	事務補助(PC作業等)	2	5年	障害者雇用
32	事務	9ヵ月	障害者雇用	軽作業	1	7年	
33	看護補助	1年5ヵ月	障害者雇用		1	2年	
34	事務	5年	障害者雇用	クラウドワークスでwebライター	2	1年	フリーランス
35	ハンドメイド作品の販売	2年6ヵ月	フリーランス	学童保育、軽作業	3	3年	
36	就労継続支援A型事業所(接客)	1ヵ月	障害者雇用	軽作業	3	不明	福祉就労
37	B型事業所(菓子製造・生花販売)	3ヵ月	その他		1	3年	
38	宅配弁当の調理補助	8ヵ月	その他	倉庫内軽作業	1	3.5年	形態不明
39	ホテルの客室清掃	2年6ヵ月	不明		2	8年	

※本人の記述のまま

Q23 現在、収入のある仕事や活動をしていますか？

現在、収入のある仕事や活動を「している」が 67.4%に達し、「していない」は 32.6%となっている。Q20 で修了後の職業経験を聞いた設問には 39 名、84.8%が「経験あり」と回答したのと比べると、現在「している」人はやや少なくなっている。

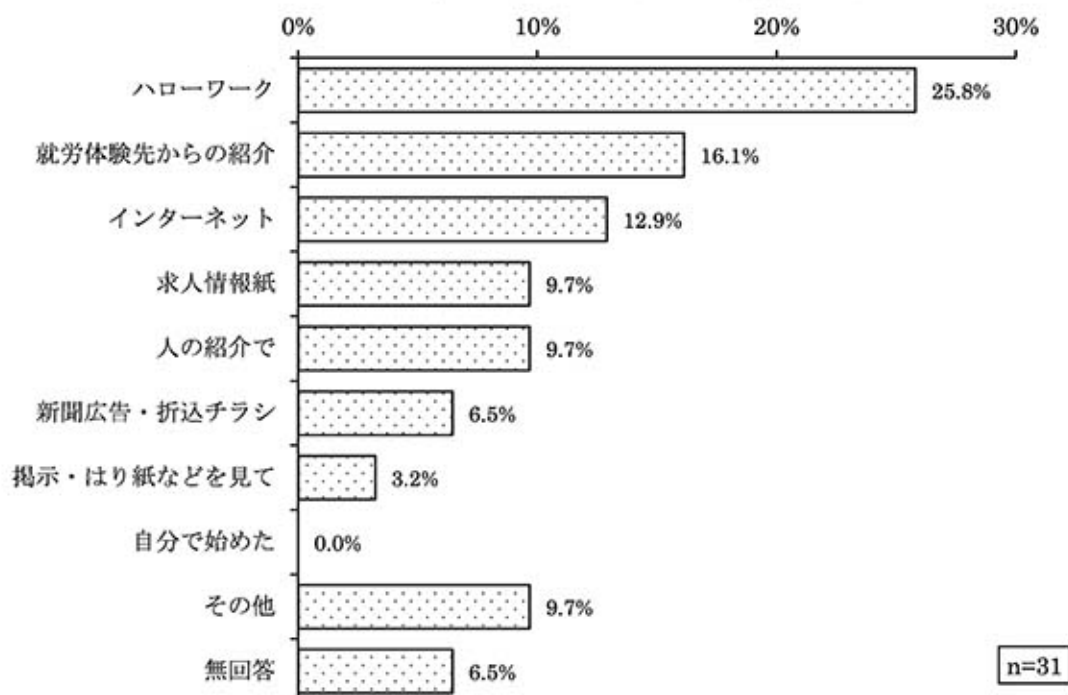
図表 20：収入のある仕事や活動



Q24 その仕事はどのようにして見つめましたか？

収入のある仕事をしている 31 名について、その仕事を見つけた経路を質問した。その結果は、「ハローワーク」が 25.8%、「就労体験先からの紹介」が 16.1%の順で多くなっている。「就労体験先からの紹介」と「人の紹介で」を足すと「ハローワーク」と同程度になっている。

図表 21：仕事を見つけた経路（複数回答）



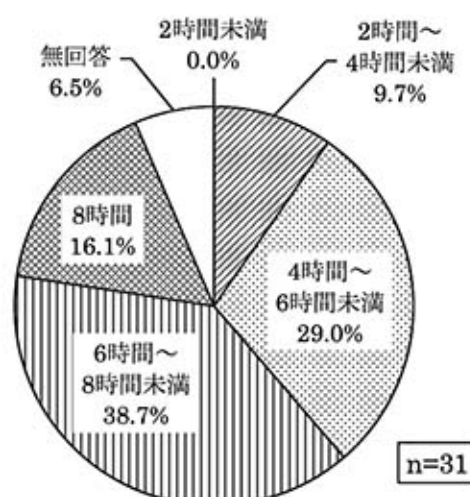
Q25 現在についている仕事・活動の条件についてうかがいます

① 1日に働く時間（平均）

1日に働く時間の分布は「6時間～8時間未満」が38.7%で最も多く、次いで「4時間～6時間」が29.0%となっている。「8時間」との回答も16.1%と2割近い。

回答のあった人のうち最低は3時間、最高は8時間、平均すると5.7時間となっている。

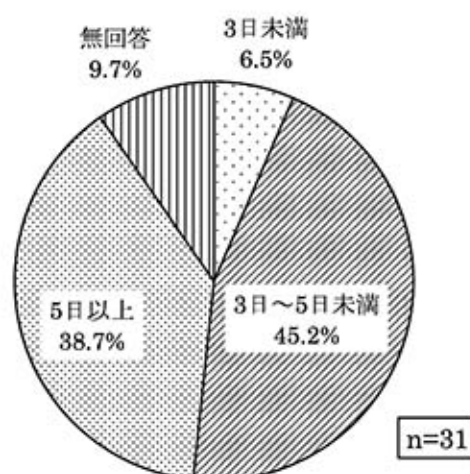
図表 22：1日の働く時間（平均）



② 1週間に働く日数（平均）

1週間に働く日数は「3日以上5日未満」が45.2%と最も多く、次いで「5日以上」が38.7%となっている。回答のあった人のうち最低は0.5日、最高は5.5日、平均すると4.1日となっている。

図表 23：1週間の働く日数（平均）

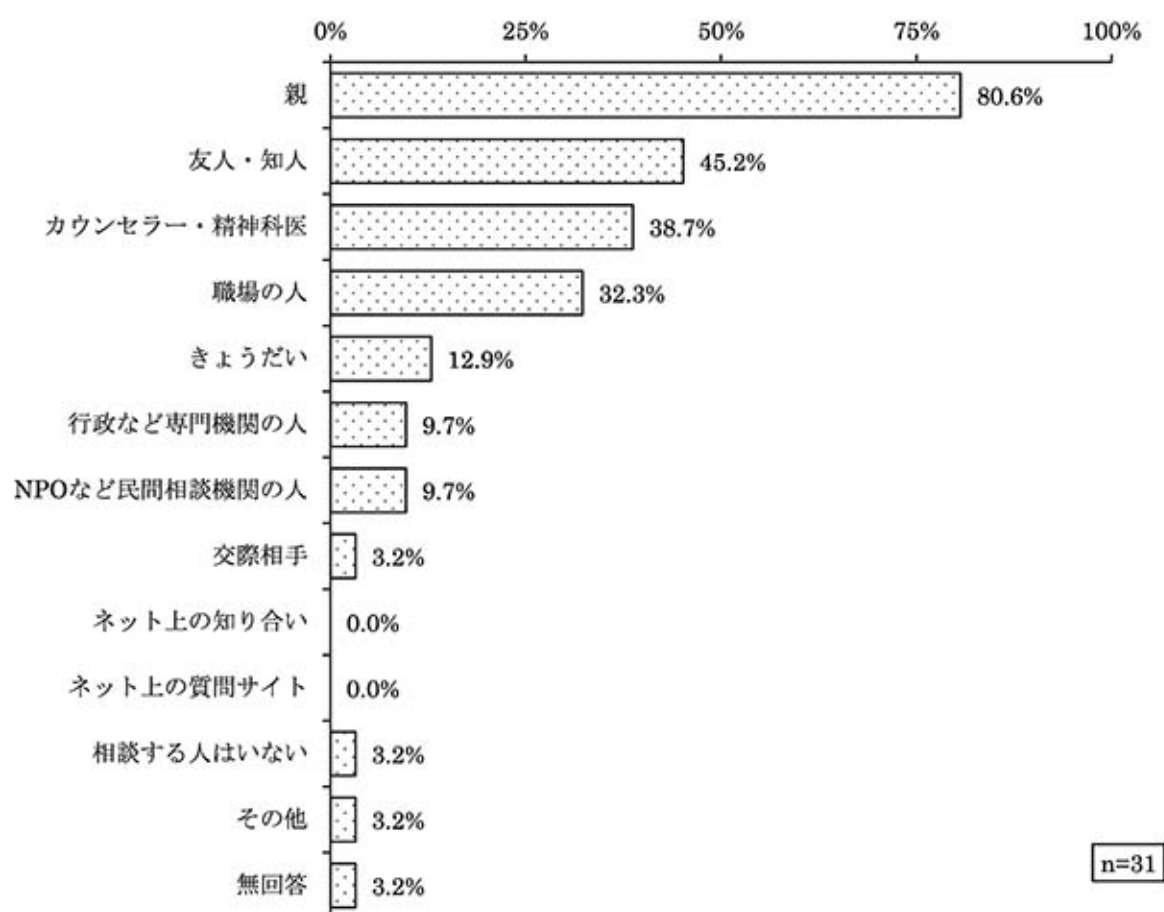


Q26 働く上で困っていることや悩みごとがあるとき、だれに相談したり、話したりしていますか？

現在収入のある仕事をしている 31 名に悩みごとの相談相手について質問した。

その結果、相談相手は「親」が最多で 80.6%、「友人・知人」が 45.2%、「カウンセラー・精神科医」が 38.7%、「職場の人」が 32.3%の順で多くなっている。少数だが「交際相手」「相談する人はいない」という回答もあった。

図表 24：仕事の悩みごとの相談相手（複数回答）

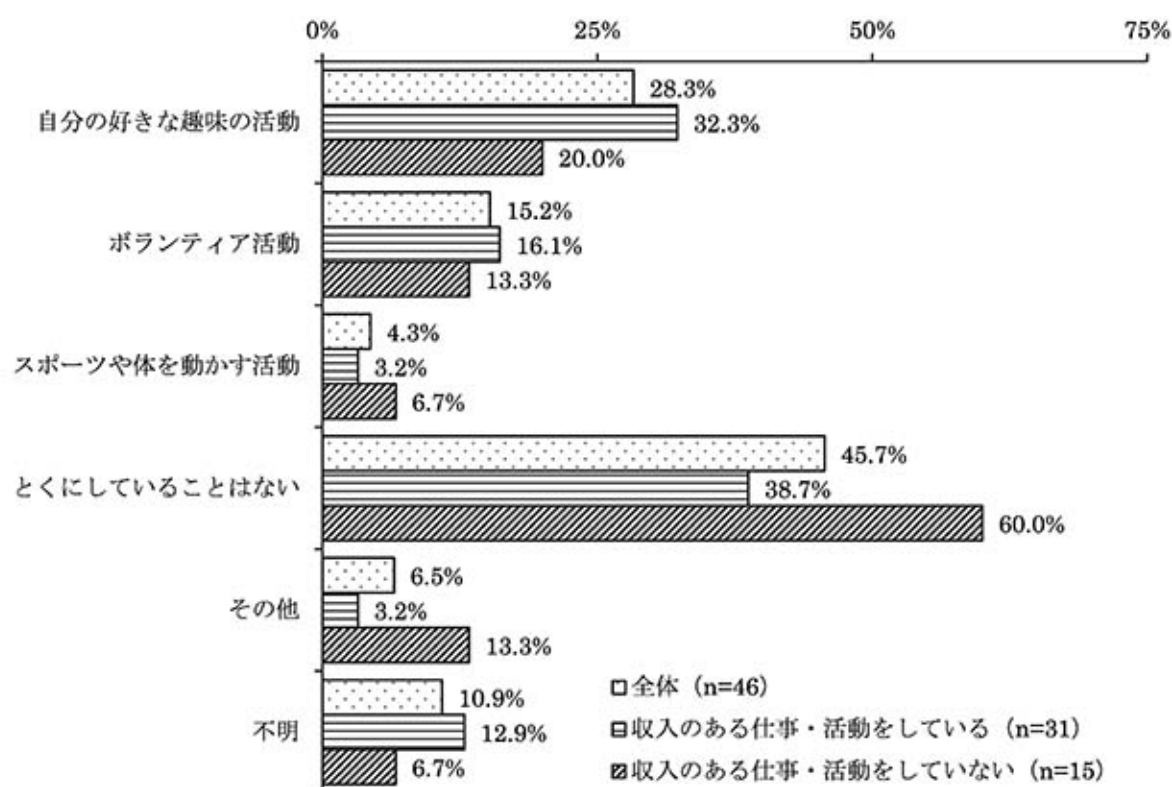


Q27 仕事以外の活動で参加しているもの

仕事以外の活動について、「とくにしていることはない」が 45.7%と 4 割を超えている。次いで、「自分の趣味の活動」が 28.3%で多くなっている。

「収入のある仕事・活動をしている」者と「していない」者を比較すると、「趣味の活動」をしているのは「仕事をしている」者のほうが多くなっており、「とくにしていることはない」は「仕事をしていない」者で特に高くなっている。

図表 25：仕事以外の活動で参加しているもの（複数回答）

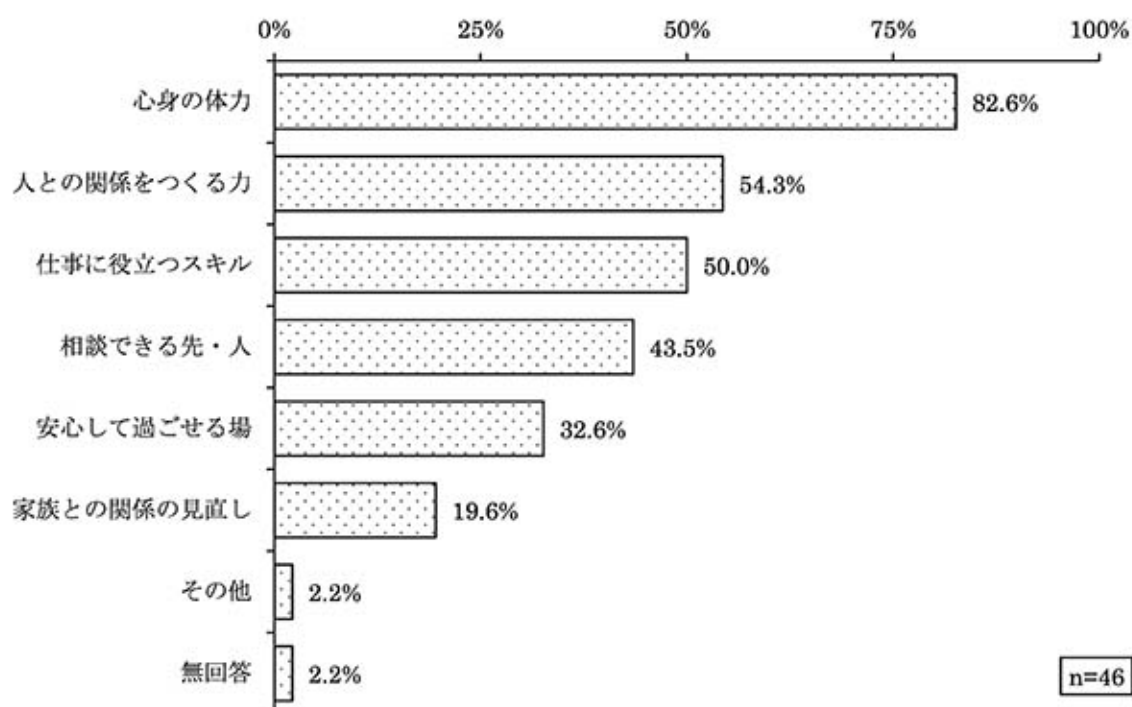


(4) 今後に向けて

Q28 働く・働き続けるために、今の自分に必要だと思うこと

働くために必要なことは「心身の体力」が82.6%で最も多く、次いで「人との関係をつくる力」「仕事に役立つスキル」の順で多くなっている。「相談できる先・人」「安心して過ごせる場」などのセーフティネットの必要についての回答も、少なくなかった。「家族との関係の見直し」は多くはなかったが、5人に1人が必要と回答していた。

図表 26：働く・働き続けるために、今の自分に必要だと思うこと（複数回答）



Q29-1 自分の将来について感じていること、考えていること

《不安なこと》

回答を「仕事」「結婚」「生活全般」の3項目に分け、キーワードごとに整理・抜粋した。

①仕事について、就労中の場合は「収入が少ない」「働き続けられるか」「転職したいが経験やスキルが不足」「人との関係が不安」という声が多く、現在無職の場合は「仕事に就けるか」「働くのが怖い」「自分に合った仕事が見つからない」「家事負担が多い」という声が寄せられた。

②次に「結婚できないかもしれない」不安が多く記された。

③生活全般では、「体調・体力に自信がない」「自分で生活できるのか」「親が老いたらどうなるのか」などが書き込まれた。

① 仕事

【就労中の人】

1. 収入が少ない	
	・お給料が少ないので貯金がほとんどできない。将来が不安。 ・収入があまり多くなく、社会保険にも入っていない。 ・今のままでは収入が少ないので経済的自立ができない。 ・収入が少ない。生活保護に頼らざるを得ない。 ・今以上に働く日数・時間を増やせるだろうか。
2. 働き続けられるかどうか	
	・今は働けるようになったけど、今後長く働き続けることができるか。 ・現在は体調が安定しているが、今後も体調を崩さず働けるか。 ・今後長く仕事を続けられるか。
3. 転職したいが経験やスキルが不足	
	・経験や履歴に自信がないため、仕事を変えたくてもなかなかふみ出せない。 ・転職するにも経験が浅く、資格もない。次の職場でやっていけるのか考えると勇気がまだない。 ・単純労働が多いので、辞めた場合、他の職場で通用するスキルが身につくかわからない。 ・仕事に役立つスキルが不足している。
4. 人との関係が不安	
	・人と関わるのが怖くて、仕事で説明する時も、緊張してうまく話せない。 ・人間関係はやっぱり不安。

【現在は無職の人】

1. 仕事に就けるか	
	・今の状態(無職)がずっと続くのではないかと不安。 ・まだ就職先が決まってない。 ・今までバイトもパートもしたことがないので、今後、働くことができるのかどうか。
2. 働くのが怖い、自信がない	
	・働くことへの不安や恐怖心がなかなか軽くない。 ・今だに働けない。働く自信がない。

3. 自分に合った仕事が見つからない	
	・自分に合った仕事が見つからない。 ・現在就職活動をしているが、これから自分に合った仕事が見つかるかどうか。
4. 家事負担が多い	
	・家庭の事情で家事負担が多いので、なかなか仕事探しなどをできない。

② 結婚

1. 結婚できないかもしれない	
	・結婚あるいはパートナーのような人ができるのかどうか。独身で生きていくことへの不安。 ・結婚や出産が一生できなさそうなこと。(深い付き合いができない)。 ・ある程度安定した生活を送っていると、出会う人も固定されてくるので、「新たな出会いはどこに…? このままでいいのか」という悩みが出てくる。 ・この数年間、両親、特に父が結婚をすすめるようになった。いつまでも経済的に両親に甘えているばかりではいけないと思う反面、どうしても結婚にむけて切り替えられずにいる。 ・ルームシェアしているパートナーと別れたら、身寄りがなくなる。結婚は望めないが、結婚するか現状を維持する以外に選択肢をつくれていなくて苦しい。いつ別れることになるか、不安で落ちつかない。

③ 生活全般

1. 体調・体力に自信がない	
	・週3日のアルバイトですら疲れてしまい、自立が遠い。 ・体力にも自信がないので、いつまでこの状態が続くのだろうと不安になる。 ・「めぐカフェ」に通っている時から体調が悪くなり、現在も続いている。いつよくなるのか不安でたまらない。
2. 自分で生活できるのか	
	・将来、親から自立して自分で生活できるか不安。 ・収入面でも、体調面においても、将来設計を考えられるほど安定していないので、この先自分はどのように生きていくのかを考えると、自信が持てず不安。 ・30歳目前になり、親も70歳近い。親が死んだらホームレスか孤独死か…と暗い気持ちになりつつ、現状を打破する努力を何もしていない自分はダメだと感じている。
3. 親が老いたらどうなるのか	
	・親が老いてきているので、親の健康面、家の経済状況(金銭面)が心配。 ・親が高齢化し、介護等、将来的な不安もある。 ・親が病気や介護が必要になったときの自分の境遇の変化。このまま1人でいるべきか、自分が犠牲になってお世話をするのか。
4. その他	
	・すぐ人を頼ってしまうので、自分で考えて行動すること。 ・暴力をふるう親族から逃れ、生活している。が、いつか再びひどい目にあわせられたり、今の生活をめちゃくちゃにされるのでは、と不安。

Q29-2 自分の将来について感じていること、考えていること

《めざすこと・周囲への期待》

回答を「今後の抱負」「仕事と経済」「社会への期待」の3項目に分け、キーワードごとに整理・抜粋した。

- ①今後の抱負としては、「自分らしく生きていきたい」と「ひとり暮らしをしたい」という希望がたいへん多かった。それに加えて「人とのコミュニケーションを上手に」「体調を整え、体力をつけたい」が続いた。その他として、「結婚」「家庭」「安心して住める家」の記述もあった。
- ②仕事と経済では、「仕事に就く・続ける・収入を得る」「スキル・資格を得たい」という希望が記された。
- ③社会への期待としては、「若者支援の拡大」「支え合える仲間」「40歳過ぎてもらえる居場所」という書き込みがあった。

① 今後の抱負

1. 自分らしく生きていきたい	
	・自分らしく生きたい。 ・自分にできることからひとつずつやっていく。 ・自分のできることに自信を持つこと。人からの目を気にしすぎないで、ストレスをためすぎない。 ・体調や心がすぐれない時が続くと、いつまでも何も乗り越えていない気がして、自分自身を責めてしまうので、周囲と比べず、自分自身を認めるよう心がけたい。 ・何事にも後悔のないように取り組みたいとは思っている。世間体はどうしても気になるが、自分が楽しい、やりがいを感じる、頼られていると思える場を大切に、「昔の自分」と向き合った時、誇れるようになりたい。 ・あまり忙しくない土地で自分らしく生活すること。
2. ひとり暮らしをしたい	
	・ひとり暮らし。実家を出る。 ・自立をする。ひとり暮らしをする。 ・少しでも自分の力でお金を稼ぐ努力をすること。少しずつ親から自立すること。 ・フルタイムで働けるようになって、いつかひとり暮らしがしたい。 ・自分の力で人生が終わるまで生活できる能力を身につけること。 ・なるべく早く就職して、自分一人で生活できるようにしていきたい。 ・ひとり暮らしできるくらいの収入を得て、実家を出る。 ・フルタイムじゃなくても自分ひとりで生活できるだけの収入と労働。
3. 人とコミュニケーションを上手にとっていきたい	
	・コミュニケーション能力を高める。言葉づかいを身につける。 ・もっと周りの人との距離感をうまく取れるようになりたい。素を出せる人が増えるといいなと思う。新しい出会いも欲しい。 ・特別トラブルがあるわけではないが、人間関係に苦手意識があるので、人ともっとうまくコミュニケーションがとれるようになりたい。
4. 体調を整え、体力をつけたい	
	・体調を整え、心身ともに健康でいること。 ・体力をつけて、家事と外で働くことの両方をしっかりやっていけるようになりたい。 ・体調が良くなって、自分に合った仕事を見つけて働けるようになること。

	・アルバイトを続けることを目標にして、体力をつけていきたい。
5. その他	
	・外に出ると、常に神経が張りつめて緊張しているので、リラックスしてその場を楽しむこと ・物事を多面的に見られるようになりたい(思い込みや白か黒で考えがちなため、人間関係でよく悩むため) ・理解してくれる人とつきあって結婚し、家庭がもてるようになりたい。 ・家庭や安心して住める家がほしい。 ・経済的に困ることなく、心身ともに安定した生活を送りたい。

② 仕事と経済

1. 仕事に就く・続ける・収入を得る	
	・自分で生活できるくらいの収入を得ること。 ・適材適所を見つけて、安定した収入を得たい。 ・卒業に2年かかるので、通信の大学を卒業したら、飲食で就職するつもりだ。 ・正社員として就職したい。 ・仕事に就いてお金を稼いで働きたい。
2. スキル・資格を得たい	
	・資格を取得したい。 ・必要な技術や資格を身につけたい。 ・今の職場でまずは2～3年働き、その間にフィットネススタジオで体力をつけたり、人脈を広げたり、興味のあることやスキルを増やしたい。

③ 社会への期待

1. 若者支援、公的支援が広がってほしい	
	・若者支援の分野が広がってほしい。 ・公的支援などが充実。
2. 支え合える仲間と居場所がほしい	
	・支え合っていける仲間がほしい。 ・数年後に40歳になるので、40歳を過ぎてもいられる居場所がほしい。

Q30 質問への回答以外に伝えたいこと、感想

質問への回答以外に伝えたいこと、感想回答を下記にすべて列挙する（一部、読みやすいように内容を変えずに編集した部分あり）。

① 社会の中でこのような場の必要性

● ガールズ講座・「めぐカフェ」はともに、青春時代のなかった私の大切な青春の1ページのような存在になっています。とてもいい出会い・経験がたくさんあったので、これからも続いてほしいです。講座・カフェ就労体験、どちらも必要としている方がたくさんいると思います。

● 自分の場合は体調から来る生きづらさを抱えていたが、病院で障害だと認定されたことで福祉サービスを受けられるようになり、結果、職に就くことができてとても生きやすくなった。同じようなタイプなら、福祉の力を借りると楽になると思う。反面、そういったものを抱えていなくても生きづらい人がある。（「めぐカフェ」のように）そういった人たちもだれでも使うことができる制度やサービスがもっと増え、知名度が上がると良いと思う。

● 「めぐカフェ」にすすんだおかげで、一步一步ステップアップできてこうして働いています。動くのは自分だけど、いきなり就労する自信がない人にとっては本当に貴重な場所だと思います。参加してなかったらもっと時間がかかっていたはず。感謝しています。

● 私自身がそうなのですが、“誰かに相談すること”を躊躇して、自分の中だけで考え込んだ結果、間違った選択をしてしまったことが多かったです。だから、言葉は飲み込まず、助けを求めていいこと、相談していいことを今、孤独に一人で悩んでいる人に伝えたいし、自分自身にも言い続けたいです。

● 以前、「めぐカフェ」を見たときに私の働いていた時よりメニューが増えていたりしてすごいなと思いました。これからも働く一歩が踏み出せない彼女たちの支えの1つとして、頑張ってください。

② 自分が新たな一歩を踏み出せた場

- 「めぐカフェ」で経験させてもらったことは、今の仕事にも役立っています。分からないことは聞くこと、お客さん（今の場合、患者さん）を第一に考えること、そして私に仕事内容を教えてくれたスタッフさんの優しさは、新しい一歩を踏み出す大きなきっかけになりました。本当に感謝しています。
- アンケートを書いている、自分はいつホームレスになるか分からないなと感じた。暗い気持ちになった。一方で、めぐカフェにとびこんでみからの約2年の間に、ささやかだけれど収入を得られるバイトを数年ぶりにできたり、さまざまなボランティアや学校など人との関わりを持つ場へトライしてきたり、たくさんの良いことがあったな！とうれしく思えた。現実をシビアに捉えつつも、ネガティブな視点だけに立たないでコツコツ向上していきたい。
- フォーラム南太田とよこはま若者サポートステーションのおかげで、なんとか働くことができるようになりました。ありがとうございます。今後もしよろしく願いいたします。
- 自分では、時間をしばられて忙しいのは無理だと思っていたが、しっかり息抜きをしながらだと、絶対に難しいと思っていた週4、週5の仕事もできるのかもしれないと新たに発見できた。マイナスやネガティブな事を考えすぎるという無駄な時間が減るからだと思う。
- 「めぐカフェ」があったから何とか少しの自尊心を保てていました。そこで経験したからこそ、ジョブトレ、就労とつながりました。「めぐカフェ」、スタッフの皆様に感謝しています。
- 今はアルバイトをしています、その当時はアルバイトもできない状態でした。「めぐカフェ」での就労体験は現在につながっていると思います。本当にありがとうございました。
- 今でも「めぐカフェ」就労体験をすることができてよかったなと思った。今思い出しても、とても楽しかった。
- 「めぐカフェ」終了後、体調不良が続きましたが、ボランティアをしたり、バイトをしたり、今は充実した日々を送っています。ガールズ講座、「めぐカフェ」とフォーラムスタッフの方に感謝しております。
- 今回このアンケートを通して、改めて当時の状況を振り返ることができました。当初は不安だらけでした。しかし終わってしまえばあつと言いう間で、思い切ってチャレンジして良かったと思いました。「めぐカフェ」のスタッフさん方やフォーラムの職員さん方がいつも笑顔で迎え入れて下さって、本当に嬉しかったです。現在もずっと感謝しております。どうもありがとうございました。
- カフェの就労体験等、様々な機会でも、人とつながることの大切さをフォーラムの皆さんから学びました。この体験は、私にとって、とても大きなものでしたし、次へとつながる大切な一歩でした。1人ではなかなか踏みだせずにいた1歩ですが、フォーラムの皆さんや、カフェの就労体験で出会ったたくさんの方のおかげで、貴重な体験ができ、参加させていただいて、本当に良かったです。
- こうした支援の場をいただいて、とても大きな励みになりました。ガールズ（講座）と、「めぐカフェ」のようなサポートがなければ、今ふつうに働いていなかったかもしれません。とても感謝しています。
- 「めぐカフェ」の就労体験はとても楽しく充実した時間が過ごせました。自分に少し自信をもつきっかけになったと思います。
- 「めぐカフェ」は自分にとって大きな一歩でしたが、期間が限られていたので、それだけで充分という訳ではありませんでした。その後、フォーラム紹介のボランティア活動に参加し、自分のペースで少しずつ自信をつけていかれたことも、とても役に立ちました。
- ガールズ講座に参加できて本当に良かったです。この経験は、自分の誇りや自信になりました。

③ さまざまな試行錯誤

- 正直、自分には「めぐカフェ」は人間関係、仕事内容的に合っていなかったと、今では思います（もちろん感謝はしております）。人・環境・仕事内容…人には向き不向きがありますね。“向き”を見つけれられるまでの間、何度も挫折を味わうかもしれませんが、その先には挫折を忘れさせてくれるような場所があります。「自分は社会に出られない」と諦めていても、ちょっとした「見返したい」「変わりたい」が急に現れて、生活が180度変わることもあります。本当人生何があるかわかりませんね♪
- 大学に行く事がツラくなり、引きこもっていたところ、母がどこかで情報を仕入れてフォーラムに連れていってくれました。接客業やカフェに全く興味がなかったのに、乗り気ではありませんでしたが、言われるがまま申し込み、アルバイトまで進めて良かったです。正直、「めぐカフェ」

に参加した事で身についたスキルはありません。ですが、家から出てほかの人と過ごすきっかけとなった…という事だけで、私には価値ある存在です。コーディネーターの方が素敵だったので、近くで働けて楽しかったです。自立した大人の女性ってステキだな、と感じたのは初めてでした。

- 現在、電車での外出は難しくて、その分、家で自分のペースでできることを探したいです。今は家事手伝いですが…。
- 「めぐカフェ」で働けてとてもよい経験でした。が、途中で体調をくずし病気になってしまったので、次のステップにスムーズに進めずにいます。また「めぐカフェ」のような所で働いて自信をつけたいです。

④ 要望・提案など

- アルバイトは「めぐカフェ」とは違って、柔軟な対応が求められます。したがって、「めぐカフェ」でその練習ができれば良かったと思います。
- 「めぐカフェ」と出会って働く自信につながったのはよかったけど、その後のひきつぎがサポートステーションに行くだけなのはあんまりかと…。サボステもあまり時間がとれないので、アフターサポートももっと気軽に使えるようなものがあればと思っています。
- ステップ2への参加を希望しながら人数等の関係で参加できなかった（選考に通らなかった）人向けに、（サボステだけでなく）フォーラムさんからも「めぐカフェ」に代わる就労体験先やアルバイト先を紹介していただくと助かると思います。

- 各期の垣根を越えてガールズの交流会を1年に1～4回程開催して欲しい。講座修了から時間が経つにつれ、みんなと疎遠になっていることや修了したからそれで終わりではなく、ガールズならではの悩みや問題を話せる場所が必要だと思う。
- 未婚中高年（35歳以上）女性のひきこもり状態にある人の居場所が欲しいです。
- 女性のひきこもり、不登校は家事手伝いの名のもとに表面化することがなく、きています。男性以上に家の概念に縛られやすいので、家の中で息苦しさを抱えている人も多いと思います（親・兄弟との確執）。もっと気軽に家を出るといった選択肢が得られれば社会は変わると、1人暮らしを始めて実感しています。

3. 考察

(1) 回答者の状況

●年齢

回答者の現在の年齢は平均 29.9 歳で、体験修了時は平均 26.2 歳であった。その差＝経過年数の平均は 3.7 年である。

●同居の状況

4 人に 1 人に変化があり、「ひとり暮らしを始めた」者が最多の 5 名だった。Q29 で将来の希望について「ひとり暮らしをしたい」という回答が多かったことを考えると、希望を達成した人たちとも言える。「結婚した」と回答した者は 1 名であった。

●体調

約 6 割が「まあよい」「よい」と回答しながら、半数強の 52.2% が医療機関に「かかっている」ことから、心身の健康課題と長期につきあいながら生活している人が多いことがうかがわれる。

●障害福祉サービスの利用

3 割弱が利用したことが「ある」と回答している。実際に利用できる制度の一つとして機能していることがわかる。

(2) 「めぐカフェ」就労体験の成果

●就労体験の役立ち度

就労体験ステップ 1 とステップ 2 の役立ち度を比較する (Q12 と Q16)。後者では回答者の母数が減るとはいえ、ステップ 1 では 51.2% だった「役に立った」が、ステップ 2 では 84.6% に達している。ステップ 2 では体験が 20 日間と長期間にわたること、実習手当があることなどが要因かと思われる。

●就労体験を経て変化・成長したこと

次に就労体験前の悩みから体験修了後に変化したことについて、段階を追って次の表にまとめた (Q8, Q13, Q17)。

「働くのに不安やこわさが先に立つ」、「自分に自信がなく、自分を否定してしまう」、「人といっしょに何かすることがむづかしい」という体験前の悩みは、ステップ 1 (10 日間)、ステップ 2 (20 日間) と段階を踏むことで悩みが着実に解決に向かっていると見られる。

図表 27：就労体験を経て変化・成長したこと（複数回答）上位項目の比較

就労体験前に悩んでいたこと n=46	就労体験ステップ 1 (10 日間) で役に立ったこと n=43	就労体験ステップ 2 (20 日間) で役に立ったこと n=26
働くのに不安やこわさが先に立つ 69.6%	働く不安やこわさが軽減した 41.9%	働く不安やこわさが軽減した 50.0%
次に向けて一歩踏み出すきっかけがつかめ ない 58.7%	次に向けて一歩踏み出す きっかけになった 44.2%	次に向けて一歩踏み出す きっかけになった 38.5%
自分に自信がなく、自分 を否定してしまう 56.5%	自分を否定することが減り、 少し自信がついた 14.0%	自分を否定することが減り、 少し自信がついた 23.1%
体調の波があり、整わ ない 37.0%	体調管理をする練習 になった 30.2%	体調管理できるよう になった 3.8%
決められた時間にどこ かに通うことがむづかしい 17.4%	決められた時間に通 うことに慣れた 27.9	
休憩や気持ちの切り 替えがうまくできな い 13.0%	休憩や気持ちの切り 替えができるよう になった 14.0%	
人といっしょに何か することがむづかし い 10.9%	人といっしょに何か する練習になった 44.2%	人とチームで動く練 習になった 61.5%

また、体験前の設問では聞いていないが、ステップ 2 で役に立ったこととして、「業務の向き不向きを知ることができた」(46.2%)、「声を出し、応答する練習になった」(42.3%)、「わからないことを聞けるようになった」(23.1%)という回答が多い。自己理解や行動面で、一歩進んで成果があったと考えられる。

(3) プログラムの検証

●「よかった点」

次ページにまとめた表をみると、ステップ 1 (10 回) では、修了者は次のような点を評価している。

- ① バランスをとって組み合わせたプログラム=導入のソーシャルスキルトレーニング、集客のアイデア出しとブログ等広報実務研修、野菜市実習・カフェ現場実習 (4 回) 等
- ② 現場や事務所のさまざまな立場・世代のスタッフによる適度なサポートとお客さんにも見守られている、安心できる環境
- ③ 集合研修が多く、同じ立場の仲間とともに体験が進むこと

次に、ステップ 2 (20 回) では、修了者は次のような点を評価している。

- ① 回数が多く、長期にわたり、共同作業を体験できるプログラム
- ② サポートがあり安心できる環境に加えて、実習手当があること

ステップ 2 参加者の回答には、「人と働く」イメージをつかめた、働くことへの抵抗感が減り自信がついた、という感想が多く上がっている。

●「改善点」

検討会では委員より、(改善点について)声を寄せること自体、支援を使う成功体験を経て、要望を言えるようになったと考えられる。(あきらめていた) 社会に期待を持てるようになったのは大きな変化であり、就労体験の成果ではないか、という指摘があった。

次に具体的な声を挙げる。ステップ 1 では「カフェ現場実習の回数を増やしてほしい」「集客アイデアやブログの実践機会がほしい」「手厚いサポートがほしい」、ステップ 2 では「悩みを同期と共有できる場がほしい」「長いシフトに挑戦したい」「レジをもっと練習したい」などがあつた。

「考えたアイデアを実践する機会」「悩みを同期と共有できる場」については実現可能であり、それによって自信がつき、仲間の中で自己洞察が深まることから、プログラムに取り入れつつあるところだ。とりわけ、ステップ 2 で「悩みを同期と共有できる場」が求められていた。ステップ 1 が半分は集合研修で他の人の体験や振り返りを聴く機会が多く、グループの力が生かされるスタイルなのに対し、これまでステップ 2 では一人ずつカフェ現場に入る内容がほとんどであった。

そこで、このアンケート結果を把握後の 2018 年に行ったステップ 2 では、中間振り返りと最終振り返りを同期の集合研修として行ったところ、同じ体験をしていても互いの受けとめ方、悩み方、対処の仕方などは異なり、励まし合いと知恵の交換ができる場となった。

一方、「回数や時間がもっとほしかった」「手厚いサポートを」という要望について、専門的な福祉サービスではない当センターの態勢下でこれに応えることは困難である。就労体験では日数と枠組み、サポートの態勢が限られており、制約がある条件の中で次へのステップとして有効活用してもらえればと考える。

図表 28：修了者があげる「よかった点」「改善点」（記述、複数回答）

① ステップ1をふりかえって

	修了者にとって「よかった点」	修了者が思う「改善点」
体験の内容	・身だしなみ、あいさつ、業務の流れ、などの座学で心構えができた ・現場実習が無理のない回数であった ・集客を考えたり、ブログ投稿したりすることが勉強になった	・現場実習回数を増やしてほしい ・考えたアイデアや練習したブログの実践機会がほしい
環境	・スタッフや先輩のサポートがていねい ・まわりの人(お客さん、スタッフ)が優しく、安心して実習できる場だった	・個別の相談機会や、手厚いサポートがほしかった ・担当が男性スタッフと事前に把握したかった
自分の変化	・体調管理を心がける習慣がついた ・自分の向き不向きを確認できた ・仲間がいると実感でき、励まされた ・定期的に通う場所ができ、通う練習ができた ・働くということをイメージできた	

② ステップ2をふりかえって

	修了者にとって「よかった点」	修了者が思う「改善点」
体験の内容	・現場実習の回数が多かった ・他の人と共同作業が体験できた ・日誌を書くことが振り返りになった	・同期の人たちと悩みを共有できる場がほしかった ・レジをもっと練習したかった
環境	・安心して体験をできる場だった ・丁寧なサポートがあり、着実にステップを踏めた ・実習手当があるのがよかった	・(3時間よりも)長いシフトに挑戦したかった
自分の変化	・自分の向き不向きを知ることができた ・定期的に通う場ができた ・働くことへの抵抗感が減り、自信がついた ・「人と働く」イメージをつかむことができた	

(4) 体験修了後の就労状況

●就労率と継続性

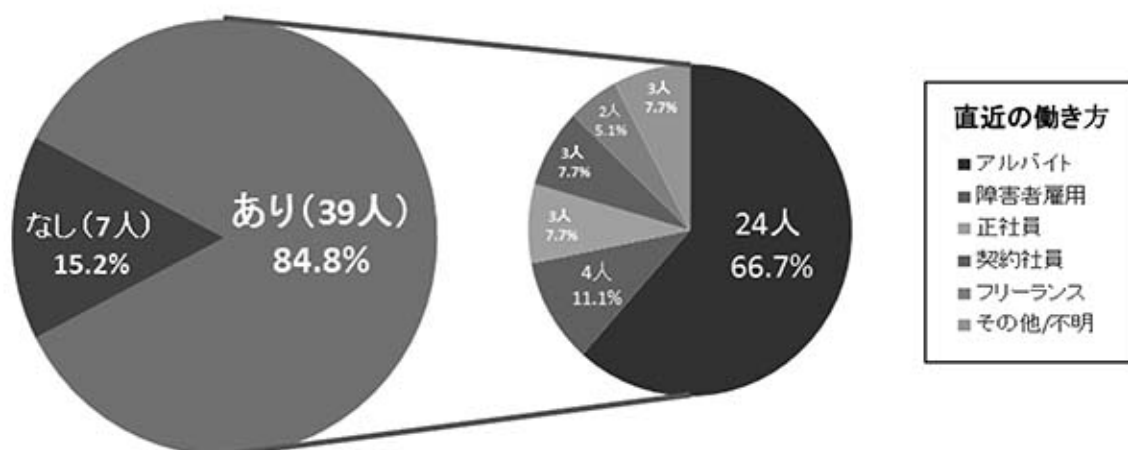
就労体験後、何かしらの仕事に就いたと回答した者は全回答者 46 名の 84.8%にあたる 39 名に上った。一方、現在収入がある仕事等があるか尋ねた設問であると回答したのは 31 名であった。この差 8 名は、一度は仕事に就いたが現在は収入がない状況にあると推測される。仕事に就いたりやめたりをくりかえしているように見えるが、契約が短期間のアルバイト・パートで、不安定な働き方をよぎなくされているとも言える。

就労体験後に経験した仕事の数を見ると、2 つの仕事を経験した者が 21 名と最も多く、1 つの仕事を経験した者が 16 名、3 つ以上を経験した者は 2 名である。就労体験後、1 つ目の職場で働き続けている割合は半数以下であり、自分に合った仕事を探しながら就業している様子が見られた。

また、就業の継続期間を見ると、1 つ目の仕事では 17 名が 1 年未満となっており、1 年以上継続して働く割合は高くなかった。

図表 29：体験修了後の仕事の経験の有無と直近の働き方

就労体験修了後の仕事の経験について



●働き方

直近の働き方を見ると「アルバイト」が24名と過半数を占めている。就労体験後に「アルバイト」を経験した者は32名に上っており、「アルバイト」経験後に他の働き方に進んだ者も8名となっている。「アルバイト」が次の仕事に進むために一定の役割を果たしていると考えられる。

「アルバイト」に次いで多いのが「障害者雇用」である。就労体験後に「障害者雇用」を経験した者は5名おり、これは回答者の約8人に1人である。障害福祉サービスを利用したことがある者が回答者の4人に1人であることから、就労移行支援事業所などの障害福祉サービスの効果と思われる。

また、「フリーランス（個人事業）」での働き方を選んでいる者が3名いる。就労体験参加者の中には、絵を描いて表現することが上手だったり、物を作ることが好きだったりする者が少なくない。自分の得意な分野を生かして仕事にしていることの表れである。

●職種

直近の仕事の職種を見ると「販売」や「受付」「接客」など人と関わる仕事に就いた者が22名おり、めぐカフェでの接客経験を仕事探しに活かしていることがうかがわれた。一方で、軽作業や事務などの人とあまり関わらない仕事に就いた者も17名いた。就労体験で「自分の向き不向きを確認することができた」という声が多くあったが、自分の適性を確認して次の仕事探しをしていることがわかる。

なお、体験修了後の年数と仕事の経験、本人の年齢と仕事の経験について、特段の関係はみられなかった。

IV グループインタビュー

1. 実施概要

(1) 実施方法

- ① 参加者の募集：Ⅲのアンケート調査票の最後にグループインタビューへの協力を呼びかけ
- ② 実施期間：参加意向を示した15名（連絡先記入者）と実施側の日程を調整
2018年2月下旬～3月上旬の期間に下記3回を実施
- ③ 実施日時と参加者数：
第1回 2018年2月23日（金）10:00-12:00 参加者4名
第2回 2018年2月24日（土）10:00-12:00 参加者4名
第3回 2018年3月07日（水）14:00-16:00 参加者5名
参加者計 13名
- ④ 実施場所：男女共同参画センター横浜南 ミーティングルーム
- ⑤ 実施体制：1回につき被験者4～5名、調査者4名。計8～9名の体制で実施
インタビュー……杉田真衣（首都大学東京准教授、本調査検討委員）
記録……飯島絵理（独立行政法人国立女性教育会館 研究員）⁷
事務局……小園弥生、関根崇年（男女共同参画センター横浜南 職員）
- ⑥ 当日の流れ：
 - ・調査者紹介、謝礼金の支払い
 - ・アンケート調査の結果概要について説明
 - ・情報の扱い等に関する説明と同意（同意書の内容は《資料編》参照）
 - ・参加者の自己紹介
 - ・インタビュー（途中ティータイムあり）

(2) インタビュー項目

- ① 「めぐカフェ」での就労体験をふりかえって～よかったこと、改善してほしいこと～
- ② 体験修了後からこれまで～利用した相談や場、支援サービス等で役に立ったこと～
- ③ 現在の悩みとこれからの希望

⁷ 若年無業女性支援事業について研究論文を執筆している研究者。飯島氏からこのインタビューへの参加希望を受け、記録者の役割で協力していただいた。

(3) 参加者(13名)の状況

●現在の年代

20代前半：1名 20代後半：6名

30代前半：3名 30代後半：1名

40代前半：2名

●就労体験修了からの経過年数

1年：1名 2年：3名 3年：2名

4年：3名 5年：1名 6年：2名

8年：1名

●体験ステップの利用状況

・ステップ1のみに参加した人：6名

・ステップ2まで参加した人：6名

・ステップ設定のない立ち上げ時に参加した人：1名

●現在の就労等の状況

・アルバイト・パート勤務をしている人：11名（※就労日数は週に2～5日で様々）

・家事に従事している人：2名

●現在の住まいの状況

・実家で暮らしている人：9名

・ひとり暮らしをしている人：2名

・パートナーと暮らしている人：2名

●障害福祉サービスの利用状況

・現在、障害者雇用、障害年金などの福祉サービスを利用している人：4名

※「利用していないが手帳を持っている」と話した人もいた。

2. 結果と考察

(1) 「めぐカフェ」での就労体験をふりかえって

① よかったこと

【語られた内容】 ※抜粋・要約して記す。

- お客さんがゆっくりした雰囲気、働いている私たちにやさしい。全体的にあたためた雰囲気にいられる安心感があった。体験が終わった後、働こうという気持ちになれ、気持ちを後押ししてくれた。
- 働くことや社会から離れていた時間を埋めてくれたのが「めぐカフェ」だった。自分の中で一歩踏み出せた思い出の場所。午前のシフトが終わって、カフェでランチをして帰るとき、自分が働いていて、その場所で食べるという充実感があった。
- おだやかに、無理なく続けられた。決められた時間にちゃんと出勤することを続けられたのが自信になった。
- 人間関係の「ごたごた」を久しぶりに経験した。仕事って人間関係がだいじなんだと学べたことが、その後の仕事にも役立っている。
- レジ打ちの経験が今の仕事にも役立っている。
- 温かい目、サポートがあった。働く人同士のコミュニケーションや、自分の苦手なところ、相手に伝えたいけど伝えにくい、どういう場面でやりにくいとかいうところを本格的に働く前に再確認できた。
- 何かをしに外に出るのがよかった。ムリしないのでできる範囲だったのもよかった。接客は合わないと思っていたが、すごく忙しいのでなければ、自分にもできると気づけた。
- 落ち込みがひどく寝たきりのようだった生活の中で、外に出てどこかに通うことで生活リズムが整った。話す相手がいた。
- 失敗が恐くて何もできずにいたが、失敗してもいいと教えてもらい、気持ちに変化した。
- 働いたことがなくて、体力にも自信がなかったもので、週2日、1回3時間なら自分にもできそうと思えたし、実際に少し自信がついた。
- 高校を卒業したばかりの頃、ガールズ講座から続けて「めぐカフェ」立ち上げに参加した。「うつ」だったので週1回くらいでハードルが高くなかったのがよかった。カフェをこうしていこう、などの話し合いにも参加できた。
- 高卒後、アルバイトもしたが、気分の波がひどく続かなかった。「めぐカフェ」では自分の体調を維持しつつ、最後まで投げ出さずにやりきることができた。いきなり6時間ではなく、週2回3時間ずつだったので自分に合うペースでできたのがよかった。
- 体験当時は、毎回仕事をこなすことで一杯いっぱいだったが、今でも実習日誌をだいに取ってあり、こうして一つひとつ悩んでステップアップしてきたのだと思い返すことができる。レジ打ちができるようになったことで自信を持てた。
- 当時、ガールズ講座で久しぶりに医療以外の人とかわった私に就労体験は少しハードルが高く、時間どおり来れない、来てもクラクラして寝かせてもらう、などがあった。が、そんなときも叱責されたり問い詰められたりせず、見守ってもらえる場だったのが本当によかった。
- 男性が怖いという気持ちがあったので、女性センターという女性が守られる雰囲気、安心できる場所であったのがよかった。野菜市の体験でも、説明してくれた男性が野菜について語ってそれ以外のことは話さなかったのが、男性に慣れる場となった。
- 食べ物を扱う業務ということで、食べ物の力を感じられた。
- 当時何もしていないという切羽詰まった思いの中で、スタッフの方たちがみんなやさしく温かく迎えてくれた。それで、自分はだめだという恐怖心がやわらぎ、安心して通える場だった点が一番大きかった。求人に応募するきっかけにもなった。

●お客さんが何を求めているのか、どうしたら喜んでもらえるのかわからなくて、臨機応変な対応もできなくて困っていた。でも、「めぐカフェ」ではたくさん質問しても、だれも「さっき言ったでしょ」などと言わないので安心できた。

●野菜市の手伝い（ステップ1）で、帰りに野菜をお土産にもらって、家族で美味しくいただいた。仕事にはお金をもらって終わりというだけでなく得られるもの、うれしさがあったと感じた。

これらの声からは、プログラムが役立っているのと同時に、お客さんがゆったりと過ごしている「めぐカフェ」の場の力が実習生に安心感をもたらしていることがうかがわれた。「お客さんがゆっくりした雰囲気、やさしい」「温かい雰囲気の中にいられる安心感」など。

当初より「ここに来ればだれかに会える」というキャッチフレーズを付けているが、カフェスペースがだれでもふらっと利用できる交流ラウンジの中に位置していることは大きな意味をもっているようだ。就労体験中はセンターのスタッフも全員で見守っているが、お客さんの存在が大きく、お客さんの人間力にも助けられていることがうかがえる。

さらに「(体験の)シフトが終わってカフェでランチを食べる充実感」という言葉からは、所属や居場所がある安心感とともに、体験の場が同時にくつろげる場にもなっていることが感じられる。「温かい見守りと安心感があつた」「目的を持って通うことで生活リズムが整った」「無理せずできる範囲やペースだったのが良かった」「一歩ずつステップアップする達成感」などはアンケート結果とも符合する。

初期の参加者からは「カフェ立ち上げに参加した。こうしていこうという話し合いにも参加できた」という自負のようなものが語られた。「食べ物の力を感じられた」というのは、食材に地元産の元気な野菜を使っているカフェならではの思われた。

ステップ1の参加者と思われるが、「質問してもだれも『さっき言ったでしょ』と言わず安心」、「時間どおりに来なくても叱責されたり問い詰められたりせず、見守ってもらえた」など、ジャッジされる場でないことが安心感につながっているとわかる発言が複数あった。

そのほか、体験メニューの中ではステップ2の最終段階で体験する「レジ打ち」について、「レジ打ちが自信になった」「その後の仕事に役立った」という声もあった。

② 改善してほしいこと

全体のなかで、「改善してほしい」点についての発言はたいへん少なかった。が、次の2点をあげておく。

●ステップ2で、同期の人とわかちあう研修機会

「ステップ2では（集合研修がなく）一人ずつ実習に入るスタイルだったので、自分だけがきていなくて悩んでいると思っていたが、実習後に同期の仲間と話したら、同じことを悩んでいたとわかった。実習の中で同期の皆と話す機会があればよかった」

これはアンケートにも記入されていたことである。グループの中で互いの体験の状況を確認し合い、自分の体験を語って自らの中に定着させる意味が大きいと思われる。

現在、ステップ1は10回のうち6回が集合研修であり、とくに第10回には一人ひとりレポート発表をし、聴き合う場を設けている。ステップ2は長らく、全20回を1人ずつカフェ現場に入

る実習としてきており、終盤でブログに自分の体験を振り返るレポートを書いてもらうことはあったが、集合研修の場は設けていなかった。

実際にこの調査と並行して実施した就労体験事業の中で、20回の中盤と最終回に職員が進行役となって同期の人と体験を振り返り、わかちあう場を設けたところ、気づきが大きいという効果が認められた。今後もこの方法で継続していく。

●担当者の性別への配慮

「担当者が男性だと事前にはっきりわかったらよかった。または、女性の担当とダブルで対応してもらえるとよかった」

このように明確に表現しなくても、男性が怖いという気持ちをもつ参加者は一定数存在する。担当職員は4人目の現在、初めて男性が担当となっている。「ガールズ講座」の終盤で就労体験プログラムの内容を担当が伝える際には、担当者が男性であることが参加のブレーキにならないよう、穏やかに対応するなど意識している。しかし、女性特有の月経周期からくる不調をかかえる参加者も少なくない。そういったことは女性スタッフに話してもらうなどの配慮も必要である。

いっぽうでは、「野菜市で(主催の)男性が野菜以外のことは話さなかったの、男性に慣れる場となった」と語られている。担当者が男性であってもそれに「慣れる場」となるよう、また男女どちらであっても自分の価値観を押し付けたりしないよう、参加者の気持ちに寄り添っていく必要がある。

③ 就労体験の場が「カフェ」であったこと

インタビューの中で、体験が「カフェ」の場であったことはどうだったのかと聞いたところ、「カフェ」であることが奏功しているのかと思われる発言が多数あったため、ここにまとめた。

キーワードは「お客さん」「野菜」「食べること」「空間」「開放的」などである。

【語られた内容】 ※抜粋・要約して記す。

- 事務だったら職員の人としか触れあわないが、いろんなお客さんと話すのがカフェのいいところ。やりとりして、お客さんってやさしいと感じた。
- お客さんの多くなる時など、いっしょに働く人とコミュニケーションをとりながら、やらないといけない。どうやったらうまくお客さんや仕事の流れるか、自分がどういうふうに動いたらいいかという練習になった。
- 近くの病院婦人の高齢者、フォーラムの講座参加者、親子連れとか客層がいろいろなのと、野菜にこだわったメニューとか、空間として憩いの場なのが開放的でいいところ。
- 声を出すのに苦手意識があったが、お客さんの番号を呼ばなくてはならないので、緊張しな

がらやっているうちに大きい声を出すのが嫌いじゃないと思えるようになった。お客さんとレジで話すのも、まあまあ大丈夫かなと自信になった。

- カフェで料理をつくるコーディネーターを隣で見ていて、次にバイトするなら技術が身につくのがいいと思った。実際にその後パンを作ったり、サンドイッチを作ったりする仕事に就いたので、きっかけになった。
- おいしいスープが出てくる、おしゃれなカフェで働いているということが純粋にいいイメージだった。それまで人と接しない生活を送っていたので、お客さんや人と関わるのも悪くないと思えた。工場とか作業のバイトをやるより、働くことのイメージがよくなったと思う。

- 野菜が好きなので、大量に切るのが好きで楽しかった。変わった野菜は買って帰って。仕事の中でも自分の好きなことがあると、ほっとしたり楽しめるんだとわかった。
- カフェに実習で入った後にここでご飯を食べていると、お客さんの目線とサービス側の目線と両方で見られたのがよかった。

- 飲食の仕事は食べることや健康を大切に考えないと成り立たない。自分にとって、健康を考える場所になった。めぐカフェの食べ物にはムキムキになるようなものじゃなくてほっとするもの。おじいさんやおばあさんも幅広い年齢の方が食べて落ち着いて帰っていかれるのを見て、自分もまずはちゃんと食べなきゃ、働く前に食べることが大切だ、自分を大切にしなければいけないと考えるきっかけになった。

（２）体験修了後からこれまで

～利用した相談や場、支援サービス等で役立ったこと

【語られた内容】

※以下はインタビューの席上で語られた具体的な発言の要約である。それぞれの固有の経験が語られている部分がほかの人たちにも役立つのではないかと考え、個人が特定されない範囲で、できるだけ削らずに残した(発言者には事前に送付し、了解を得ている)。

- (ガールズ講座修了生向けの)メルマガで子ども向けのイベントのお手伝いがあり、2,000 円の謝礼金をもらって、希望を感じた。そのときガールズ講座でいっしょだった人と少し話して、がんばろうねという感じで別れて。とにかく外に出る機会を作り、続けていくことができたのがよかった。去年ついに普通の求人情報で単発のアルバイトを始め、次に一定の場所に行くパートの仕事に就いた。

何か新しいことに挑戦するたびに波が大きくて落ち込み、眠れない、食べられない、などがあつた。1 日働いたら 3 日寝る、という感じで繰り返していたが、だんだん寝込む日や時間が減った。そのうちに素のままの自分でいこうと意識。元気じゃないときもあつて当然だと思えたのが一番いい変化かなと思う。

3,4 年通っていた自助グループの運営側にまわっている。話すのもハードルが高い人のために手作業とかアートワークを用意したり、部屋の鍵を開けたりする係をしている。

実家とは断絶して、病院やカウンセラー、若者サポートステーション、そしてここ「フォーラム南太田」に寄ることもある。ちょっとしたこと

ですごく落ちてしまったときなど、友だちに“うつ”だと言うと悪いと思って、ただ単純に外の風に当たって、知った方と話せて、それだけでも何か元気になれる。この「めぐカフェ」のある空間のことを思い出し、足を運んで、少し気持ちを立て直している。

- 修了後はサポステに通っていたが、自分のやりたいことがはっきりしていなかったので相談員も困ったようで、サポステでやれることはもうないと言われた。ハローワークのようなところへ送られ、複数応募して面接で落とされた。圧迫面接のようなものもあった。その後自分で見つけて、新しくできた商業施設で行われた合同面接会に行った。履歴書の要らないハードルの低い場だったからか、ここで今の販売の仕事に就くことができた。

- サポステをカウンセリング代わりに、体調を整えていきましょう、みたいな感じで利用した。私も、じゃあ働きます、とか受診して精神面を整えますというでもなく、どうしたらいいんだろう、という時間が長かった。

- 「めぐカフェ」と同時にサポステに行き始めて、カフェ修了後も週に一度のペースで。家にいるとずっと考えて行動しないので、毎週用事を入れるのが私には大事だった。欲しいものを買うお金もなくなったのでアルバイトに応募して、週に2-3回の仕事が半年続いた。もう少し日数の多い仕事をしたいくなって、電話して若者向けハローワークに行った。合わなければ別のところに行けばいいと思ったが、担当の年配男性がとても合っていた。2ヵ月で10社も紹介があり、ちょっとスパルタだったので「ペースを落としたい」と言ったら、ゆっくりすぎず、少し引っ張ってくれる感じになった。いくつか落ちて、一度面接をすっぽかしたときに「会社に電話しなさい」とその場で注意してくれた。

今の事務パートは1年になる。週4日、1日7時間。ある程度お金が貯まったら自分のやりたいことをしようと思っている。ここにずっといなきゃ、というプレッシャーなく続けられている。

ずっと通っていた心療内科（保険適用）の相談員とは何でも話せる。何かあったらまた行こう、と心の支えになっている。

- 「めぐカフェ」でサポステを初めて知って、担当者がよかった。仕事のことでより過ごし方や考えていることなど話して、カウンセリングのような感じで利用した。

求職者支援訓練をやりたいとハローワークで手続きをして施設見学にも行った。が、面接で通院していることを正直に言うと、そのせいかどうか、みんな受かると言われていたのに落選してしまった。ハローワークで募集する訓練は、健康で労働力になる人を想定しているのかな、と。メンタルを整えようと、サポステの認知行動療法や、別の心理療法も学んだ。

就労移行支援事業所も利用してみたが、男性が多かった。「めぐカフェ」のような開放感がありなく、がんばって通うことに疲れてしまった。

- 「めぐカフェ」修了後、病院のデイケアに通ったら、思ったより生活リズムが整っているとわかり、辞めて知り合いの料理屋を手伝うようになった。週1日から3日になり、4日になって、10ヵ月続けた。

同時に、身分証明書になる免許がほしくて、教習所にも半年通った。これはステップが目に見えてわかるのと、人と話す練習になってよかった。教官は車の話しかしないので。

その後パン屋の面接を受けてホールの仕事。途中で店舗の閉店もあり、2店目で通算1年半。

今はパン製造の仕事。週5日、フルタイムのアルバイト。

いちばんわかってくれるのはカウンセラー。「家を出た方がいい」とアドバイスされて、一人暮らしをすることになり、3ヵ月たった。「めぐカフェ」でいっしょだった女の子にも相談できる。

- 「めぐカフェ」の後、フォーラムで紹介しているボランティアをいくつか体験した。その中の一つ、着物のリサイクル団体のボランティアがとても自分に合っていた。就労体験は期限が限られているが、ボランティアはそうではないので、これが終わったらどうしようという不安がなくてマイペースでできる。ボランティアを紹介してもらってよかった。

自分で仕事を探すつもりだったが、実家で（一度家を出て戻ってきた）きょうだいの子どもの世話と、体調が悪い母に代わって家事全般をやらねばならず、毎日が一杯いっぱい。

- 「めぐカフェ」修了後は人の紹介で週1回7時間半の事務アルバイトを2年間したが、体調を崩して辞めた。病院へ行ったら診断名が付き、出された薬が合って体調がよくなった。それで障害者手帳も取って、福祉パスで市内のバスや地下鉄が無料になるので行動範囲が広がった。デイケアに通ったり、ひきこもりの居場所に通う。そこに通ったのはとてもよかった。同年代で病気を抱えていたり、同じような立場の方と交流する中で安心したし、孤独感が癒やされた。友だちができて、週4回は通えていたので、次のステップに行けそうだなと思った。ボランティアで子どもと遊んだり、ニュースレターの発行などもして、これだけできるのだから、お金を稼ぐ作業もできるのではないかなと思った。

福祉のルートでいくために就労移行支援事業所Fに期限一杯の2年通った。結果的に障害者雇用で郵便局のパートに決まり、1年働いている。障害福祉のサービスをフル活用したのが私にはよかった。就労移行支援事業所では同じような状況の人たちががんばっているから、自分もがんばろうと思った。スタッフにも障害を抱えた方がいて、仕事のこともプライベートなことも相談に乗ってもらえて気が楽になった。そこは利用者が男女半々で、年代も10代から50代まで多様だった。通う間は働けないので日々のお金は障害年金をあてて、パソコンの勉強や心理的な行動療法なども学んだ。職を得た今も、そこに相談に行けて助かっている。

- 修了後すぐの年末に年賀状の仕分けのアルバイトに応募して、1日4-6時間、遅刻せずにシフトどおり通いきった。次に学童保育のアルバイトに入ったが、先輩の女性にガツと言われても「私は悪くない」と思えて心が折れなかったのには自分でも驚いた。4ヵ月続けたが、夏休みはすごく忙しくて人手不足で休憩もなく精神的にもたないの、もうがんばったからいい、と思って辞めた。その後は登録制の単発バイトを週2回ほどしながら、自分のペースでハンドメイド作家活動に。出展していたカフェでこれから働かせてもらうことになった。

いやな思いもしたけれど、自分がどれくらいできる状態に変化しているのか、そのつど知れてよかった。相談相手は、母に相談すると衝突することもあるので、フォーラム、地域活動支援センター、友だち、とあちこちにちょこちょこ自分の居場所を分散して少しずつ「聞いてくださいよ」と言えているのがいいと思う。

- 現在、派遣会社で登録して週2,3回、単発のアルバイトをしている。倉庫内でピッキング、検品、タグ付けなど。1日7時間半が最初は長いと感じていたが、半年続けて慣れてきたところ。以前働いていた倉庫はブラックなところだったが、今はいい環境。同時に、子どもにかかわるボランティアをしていて楽しい。

- 体験修了後に若者サポートステーションの紹介でパン屋さんでのジョブトレーニングを試みたが、場所や人とかかわりが合わなくて、体調を崩してしまった。パン屋は男性が8~9割。生活支援センターも利用者の8割が男性。そういう環境での作業や、男性に声をかけられるのがストレスになってしまった。その後は「めぐカフェ」以前からボランティアをしていたカフェで週2回接客。

両親との関係は子どもの頃からよくなかったの、生活支援センターのスタッフに相談している。また、友人から紹介された横浜市の地域活動支援センター「T cafe」に週3日くらい通い、デイケアのようなプログラムや女性スタッフによる相談を利用して、ここは今も通っている。スタッフもいいし、交通費が全額出るので収入がなくても通えて助かる。行きたいときに行き、帰りたいときに帰って、話したい人がいたら話せる。

何年か前のガールズ講座の同期の仲間にも、いろんなことが話せる。今でも連絡を取っている人が3人いて、近況を報告し合っている。ここで出会った仲間の存在は大きい。

- ステップ1が修了後、週に一度ずつ通っていたカウンセラーの支えもあって、恐怖心が和らぎ、求人に応募することができた。そこで現在まで4年、販売職で働いている。日数も少しずつ増やして、今は週に5日。ちょっとミスをしたときに落ち込んで、クビになったらと思った気持ちを見せないようにするとか、そういうことが大変だった。でも続けるうちに体力がついてきて、気持ちの面でも楽になってきた。

若者サポートステーションの相談員や通院先の先生に相談している。友だちにはあまり弱いところは見せたくなくて、見栄を張ってしまうので。「ひきこもり女子会」にも参加している。ひきこもりじゃなくても、いろいろ就労などで悩む人が参加できる。テーマトークをテーブルごとにするのもとてもいい。

- ステップ1が終わった後、語学学校に通い始めて、今資格試験を受けようと思っている。同時に週2日、夕方にアルバイトで調理補助をしている。その職場の健診で精神科をすすめられたが異常は見つからず、すすめられてカウンセリングにも通い始めた。でもカウンセラーは月1回45分だから、仕事のことは言えない。平日の朝に、みんな会社に行っている、自分は家にいたり外でぶらぶらしていると思うと、今のところは親にしか言えない。

アルバイト先で人が辞めて、上司も替わって、私に指示を出してと言われたけれど、仕事もわからないのに人に教えないといけないことに困って。今まで言われたことだけやっていればよかったのが、主体的にやらないとだめだとなって、とても大変だった。パートのおばさんはすごく仕事ができるので、最近はおばさんに負けまいぞ、という気持ちでやっている。

ここでは、体験修了後、連携しているサポステでの個別相談が十分に機能していること、センターで機会を提供している社会参加（ボランティア）体験が役に立っていること、ガールズ講座の仲間がその後もセーフティネットとなっていることが明らかになっている。そのほか、個別のカウンセリングや福祉サービス、地域の居場所のよさなどが語られた。以下、項目ごとに見ていく。

●「よこはま若者サポートステーション」との連携

サポステの相談利用については最も多く語られた。本事業はサポステと連携して行っているため、これまで公的な個別相談を利用していない人には同所を紹介しており、逆にサポステから「ガールズ講座」を紹介されて当センターの支援につながる人が一定数いる。

「サポステをカウンセリング代わりに利用」「認知行動療法を学んだ」「サポステの紹介でジョブトレーニングをした」などが多い。それぞれの語りから、サポステは就労をめざす施設ではあるが、とくに連携先の「よこはま若者サポートステーション」はゆっくりと一人ひとりのペースや体調に寄り添って話を聴いたり、プログラムを繰り出したり、あるいは就職など次の行動へと背中を押したりしてくれる、つまり目的に向けて進んでいく本人に伴走する支援として機能していることがわかった。

●社会参加体験（ボランティアの活動）

次に当センターで地域の団体をお願いして徐々に受け入れ先を増やし、紹介している社会参加体験であるが、この体験がメンタルヘルスの向上に役立っていると話した人が多かった。「とにかく外に出る機会」「着物リサイクルのボランティアがとても自分に合っていた」「ボランティアで子どもにかかわることをして楽しい」「ボランティアで謝礼をもらって希望を感じた」など。就労してからも「週2,3回のアルバイトとボランティアを組み合わせることで生活がうまく回っている」という人もいた。

「ボランティアは就労体験と違って期限が限られていない。紹介してくれるのはすごくいい」と参加者が話している。これ以外にもボランティアは「支援する・される」という関係をこえてさまざまな人（多くは年配者）に触れられること、活動の中で人の役に立つ手ごたえを得られることなどがとてもよいと考えている。あたたかい見守りがあることで、人や社会に対する怖さが減り、人の中にいるのはよいものだという新しい体験になっている。横浜市内でもここが下町である地域性からか、ボランティア先でアルバイトの紹介まで受けた事例もある。

●ガールズ講座の仲間やグループ

「仲間には何でも話せる」「ここで出会った人の存在はとても大きい」という声は少なくなかった。また、よいところとして「ひきこもり女子会」「自助グループ」「ユースプラザ（横浜市の設置している若者の居場所）」などの場が挙げられた。医療では「心療内科の相談員」「病院のデイケア」。ほかに「自動車教習所」というものもあった。こうした声からは、月に1度、2度と反復して通える安心な場所が支えになっていることがわかった。

●カウンセリング

カウンセリングを定期的に利用している、ということも何人かから語られた。「カウンセラーの支え」「わかってくれている」「カウンセラーからひとり暮らしを勧められ、家を出た」など。

アルバイトをしている職場の健診から精神科の受診に至り、次にカウンセリングを利用すること

になったという人もいた。保険適用の相談を利用しているという人もいた。

しかし、カウンセリングの多くは民間のサービスで費用負担が大きいため、経済的に余裕がないと利用は難しいと思われる。

●障害福祉サービス

障害福祉サービスを活用してよかった、という体験も詳細に語られた。これらは障害者手帳（精神疾患による）を取得したことで活路が開かれたということだ。だが、中には生活支援センター、地域活動支援センターなどで手帳を持っていなくとも利用できるサービスもある。「福祉パスでバス等が無料になり行動範囲が広がった」「日々のお金は障害年金をあてた」「横浜市の地域活動支援センターはスタッフもいいし、交通費が出る」などの声があった。

とくに就労移行支援事業所にかんしては、「期限の2年間通い、障害者雇用で職を得た今も相談に行ける」という人もいる一方、「（利用者に）男性が多く、女性として見られること通うことに疲れてしまった」という人もいた。

●ハローワーク

ハローワークについては、「あまり役に立たなかった」という声が少なからずあった一方、相性のいい相談員にサポートされて職を得た、という報告もあった。

●親について

アンケートでは相談できる相手は「親」が最多であった。が、インタビューの場では親について話す人がなかったの聞いてみたところ、「母に相談すると衝突することもあるので、いろんな居場所を作って少しずつ聞いてもらっている」「両親との関係はよくなかったの、生活支援センターのスタッフに相談する」「実家とは断絶しているので」という声がいくつかあった。

（3）現在の悩みとこれからの希望

【語られた内容】 ※抜粋・要約して記す。

● いまの仕事は一生は続けられない。人の顔が覚えられないので、自分は接客には向いていないと感じる。だからといって、何がしたいのか迷っている。

メンタル面を整えなくてはいいけない。お医者さんに対策を聞いた方がいいので、心療内科に行くのが課題だが、レッテルを貼られないか、ためらう。

母がなんでもしてくれるし、してくる。自立しなくてはと思うが、家を出るよりは家にいてお金を貯めた方がいいと思う。親が高齢になってきて、亡くなったら気持ちが落ちてくると、私は将来ホームレスになるんじゃないかと思うこともある。

● 月に15日の今の事務パートは家から近くていいが、長くは続けられない。社会保険なしが採用の条件だった。実家暮らしだからできるが、

親がいなくなったらどうか。35歳くらいまでという求人が多く、だんだん年齢的に近づいている。次は社会保険が付くところで働きたい。自分一人で生活できる収入を得られる仕事に就いて、できれば親元を離れたたい。が、現実的には入院したり学校に行けなかったりした時期もあり、学歴もない。正社員で働いた経験もないので不安。

● 今の事務の仕事は合っているが、苦手な電話対応が必ずある。ずっと完璧主義でいろいろ断念してきたので、今はちょっと気を抜きながら。週5で1日8時間の正社員でなくてもいいと思っている。何もしていない時より、している時の方が体調がいい。お金を貯めて、自分のやりたいことをできるようにしたい。一人暮らしをしたい。

- たまにガーンと落ち込むと過食してしまう。治せたらいいし、精神的にもう少し安定できたらいい。ほとんどフルタイムのアルバイトだが、まだ気分の落ち込みは根強い。いま大学の通信にも通って心理学を勉強している。夏だけスクーリングがあり、基本は自宅。それを選んだのは、自分と同じような思いをしている子どもがいたら、なんて声をかけたらいいのかなと思ったのがきっかけ。でもこういう考え方をしたら楽になれるというのがわかり、自分のためになる。2年して卒業したら正社員で働こうかなと思っている。

一方で、カウンセラーにすすめられ、1人暮らしをして3ヵ月。洗濯もお弁当づくりも全部自分でなくてはならない。明日着る服がないと思えば洗濯もするし、落ち込んでいる時間が減ってよかったと思っている。

- 家事が大変。どう工夫したら時間が作れるのか。私自身も体力に自信がない。家事の手を抜かずにアルバイトでもできるような体力をつけていきたいけど、どこに相談していいか。(世話をしている子の親である) きょうだいとも話さなくちゃと思うが、けっこう自分がやってしまって、悩んでいる。

- いまパートで6時間を週5日通っていて、やはり体力的に不安があるのであと2、3年はこのペースで働きたい。将来的には7、8時間のフルタイムで働けたらいいと思うので、体力をつけるのが課題。障害者雇用でいろいろなサポートを受けているので、まずは自分に与えられた業務をできるようになって、そこからサポートなしにいろんな業務を任せられて働けるようになったらと思う。親に生活を頼っているの、1人暮らしをしたいという願望はある。家事やいろんなことを自分でできたらと思う。

- いまアルバイトもしつつ、手作り品の作家活動をしている。自分の場合は二つ持っているのが動きやすい。作家活動ではいろんな人とのつながりができ、個性的な人ばかりなので自分のちっぽけさを感じたり、壁にぶつかって落ち込むことがある。そのときに自分を卑下して責めてしまうのを改善したい。

時間の逆算ができないのが困ること。イベントに出展するために予定を立てても、やる気がしなかったりして悩んでいる。ぎりぎりになって走り始めるのが心許ない。遅刻すること多いので改善したい。

実家暮らしで家の手伝いもやることが多く、分身しない限りきびしい。家を出て自分のペースで家事も自分の分だけでもやれるようになりたい。今は私の税金も父母が払ってくれている。(親と)距離を取らないと自分がダメになるんじゃないかと不安だ。

- いま週に2、3回しているアルバイトをどこまで増やせるかが不安。同時にしているボランティアもバランスよく続けていきたいと思っているのだけれど。

- 今自分にはあまり悩みがない。悩んでいる友だちに話を聞いてと言われて、「カウンセラーになれば」と言われるとうれしい。自分が悩んでいた経験を活かして、今悩んでいる人の話を聞いてあげる役割ができたらと思う。

- 両親に依存して生活しているので、週5日働き始めたのは大きな節目だった。もう少し安定して、正社員とはいかなくても契約社員とか、ステップアップを目ざしたい。そのためには、とりあえず心身健康でと毎日思っている。その上でもう少し自分で金銭を得て、しっかり自己管理できるようにになりたい。

「ひきこもり女子会」のような当事者で主催する会をいつか自分で、友だちを誘って主催できたらいい。自立、仕事、心身管理が課題と思う一方で、漠然とした不安とどう付き合っていくか。

- もともと人とコミュニケーションを取るのが苦手。自分の気持ちが自分でわからないこともある。今の生活をどこからどう変えていけばいいのか、課題をどう見つけたらいいのかが課題だ。

- 今お世話になっている人がいなくなったり、貯金が尽きたら、生きていけない。どうやって生活して生きていくかが課題。体調に左右されてしまうので、ふつうにごはんを食べて、寝て、お風呂に入る、リズムを整えることがなかなかできない。

いい風が吹いて、風をいっぱい浴びるところで暮らしたい。イメージとして、自分は海でおぼれて遭難していたけれど、いろいろな人の助けで船が少し進んでいっている。風で帆を張れたら。流される中でも、いい方向に気持ちよく流れていきたい。

動物が好きなので、もらってきて飼えるような場所があればいいと思う。

● 人からは大丈夫そうに見られるが、自分では大丈夫じゃないというギャップがある。障害年金受給者だが、手帳は持っていない。障害者枠で働くのか、ふつうに働くかどっちへいくのか、どこに相談すればいいか。かつてしていた一般就労でも今は働けないのかも知れないし。

（相談機関では）仕事ばかりをゴールとしないで生活全般、お金のことや、ひとり暮らしするならとか、もっと全体的に情報をくれたり、見てくると助かる。医療機関にも通っているが、自助グループやメンタルケアの講座にも行く。

働いていた期間に年金は納めていたが、（障害年金のための）診断書を出すことは大変だった。受給が決まって、自分のお金ができた時はほっとした。経済面は大事。親からの援助は嫌悪していたが愛情表現だと受けとめて、少しも

らっている。いつか障害年金を受けなくていいように働きたいが、社会はきびしい。うまくできた経験より悪いことばかり思い出して躊躇してしまう。「女性活躍して」と言われると、どうやって？と思う。家庭を持って、とかキャリアウーマンではない女性の生き方があってもいい。

働いてないので1人で家を借りるのに大変だったが、親が働いていること、自分が障害年金を受給していることで借りられた。首都圏で生活するのは大変。地方でやさしい自治体があれば移住も興味がある。週3日、4日で働いて生活が回っていくならそれもいい。お金はないけど満足度は高い、そういう道を開拓できたらと思っている。

最も多くの人々が語ったのは「実家を離れてひとり暮らしをしたい」ということだった。それは「親に多くを頼っている」「親がいなくなったら？」という声と対になっており、実家での生活から抜け出したいという気持ちを持っているが、1人で暮らせるほどの収入が得られないというギャップに悩んでいることがうかがわれた。

実際にひとり暮らしをしている2名は、親の援助と自分の収入や障害年金を組み合わせで暮らしており、その現状には肯定的な気持ちを持っていた。

ほかに複数の人が語った希望は「お金を貯めたい」「体力をつけたい」「正社員等にステップアップしたい」「自分のために勉強したい」ということであつた。

悩みとしては障害福祉サービスを活用している人では「一般就労か障害者雇用か」ということがあつた。また、「漠然とした不安と付き合っていく」ということも複数の人から語られた。就労しても、精神的な安定を得るのはなかなか困難であり、それぞれその人なりに頼れる相談者や場などを得て、工夫して生活していることがうかがわれた。自分が家事の担い手となっている人からは「家事がたいへん」という声もあつた。

（4）インタビューを終えて ～風を受けて進む

杉田真衣（首都大学東京 准教授）

アンケートが届いた時に「憂鬱なアンケート来ちゃったよ」と実は思ったのだと、インタビューの最後に打ち明けてくださった方がいた。アンケートをお願いすることがどれほど負担をかけているかを直接教えていただける機会は、なかなかない。だが、結果的にはアンケートもインタビューも自分のこれまでとこれからを見つめるよいきっかけになったとおっしゃって、うれしく、有り難く思った。

インタビューからは、お一人おひとりが、「めぐカフェ」での経験を一つの足がかりとして、試行錯誤を重ねながら、自分の人生を創っていつている姿が浮かび上がった。その軌跡を、風を受けて

進む船に例えて表現した方がいて、インタビューを終えてからも時々思い出す。「いい風」が吹くのはどういう時で、風を受けて進む時にはどのような感覚がするのだろう。

「めぐカフェ」は屋内にあるので、そこに風はさほど吹かない。とはいえ、「めぐカフェ」のある男女共同参画センター横浜南に入ると1階ラウンジは、窓が広く空が見えて、風が吹いてきそうな開放的な作りになっている。私自身、インタビューの前に「めぐカフェ」でスープとパンを楽しんだが、やってくるお年寄りや子ども連れなどの人たちは、そこでゆっくりとすごしているように見えた。

インタビューでは、就労体験の場がカフェであることについて尋ねたが、それに対する答えは、カフェ一般というよりは、男女共同参画センター横浜南の中にあるカフェであることについての答えであっただろう。公共施設であり、利用者にお年寄りや子どもが少なくなく、上記のような開放的でゆったりとした空間を持つ男女共同参画センター横浜南では、客が料理の提供を急がせるようなことは少ないはずだ。「めぐカフェ」が就労体験の場となっていることを知っている客もいるだろう。ある方は、「めぐカフェ」のレジで500円玉のお釣りがなくなり、動転して10円玉の棒金を1本(50枚)渡したら、スーツを着た男性の客は呆気にとられつつも、「しょうがないですね」とそのまま受け取ったというエピソードを語った。

そのような、緩くおだやかな場で就労体験ができることの意義を、本インタビューで聞き取ることができたと感じた。

V 専門家・支援機関の視点

1. 専門家（検討会委員）の視点

- (1) 第2の壁「社会との関わり」を乗り越えるための支援の拡充を
～自分で支援・リソースを得る成功体験を得て、この先も使っていけるために～

長谷川 能扶子

(有限会社Cマインド 代表取締役、キャリアコンサルタント)

“ガールズ”支援を利用される皆さんは、「ガールズ講座」に出会うまで家に引きこもり、貧困や生きづらさと孤独に闘ってきた方々です。その原因は、いじめられた過去かも知れません。あるいは、親・家族との関係、病気、発達の課題、うつなどのメンタルの問題など、一人ひとり、異なるバックグラウンドを抱えていたであろう方々です。彼女たちは、そこから「一歩、踏み出したい」という意思を持って、「ガールズ講座」そして「めぐカフェ就労体験」への扉を開けました。支援のゴールはどこでしょうか。彼女たちのために、何ができるのでしょうか？

フォーラムスタッフの皆さんは10年間、それを問い続けて来られました。報告書から見てきたこれまでの取り組みと成果、課題を、キャリアコンサルタントとしての視点から、少し客観的に捉えてみたいと思います。

4つの壁 ～①家から一歩出る決断、②社会との関わり、③就労、④自立

“ガールズ”の皆さんを取り巻く「壁」は4つあるように見えます。

まず一つ目は「家から一歩出て、講座に通うことを決断する」壁です。「ガールズ講座」に参加された皆さんは、この一つ目の壁を、自分の力で越えた方々です。ものすごい勇気です。彼女たちにとっての「機」が熟し、何かがガールズ講座との出会いを導いたのかも知れません。あるいは、それを乗り越えるための支援者と出会えたこともあるでしょう。若者サポートステーションのサポーターの皆様が、背中を押してくれたケースも少なくない聞いています。大きな支援です。しかし、この壁をまだ越えられずにいる方もいることでしょう。「まだそのタイミングが来ていない」方にとっても、情報はとても大きな援助になると思います。「今はまだ無理かも。でも、いつか参加できたらいいな」と希望を持って、何年も手元にチラシを持っている方もいるかも知れません。「一時的に参加者が減ったとしても継続してほしい。」私がそう思う1つの理由でもあります。

二つ目の壁は「社会との関わり」です。「ガールズ講座」では、スタッフの皆様が丁寧に関わり、その壁を乗り越える支援をします。安全・安心な場を作り、彼女たちは自分の「居場所」を見つけ、「仲間」を作ります。しかし、その「場」から外に出るには、もう一段、ステップが必要です。それがめぐカフェの「ステップ1」やボランティア活動です。自己否定、体調管理、不安、怖さ、コミュニケーション能力。社会と関わるための、自分の課題は何なのか？ できることは何なのか？ それを発見する場にもなっています。最初できなかったことができた時の喜び。分からないことを

開けた体験。体調を管理できたという自信。成長を実感した彼女たちは、「自分を責めず、認めて、自分らしく生きたい」という希望を持ったことがこの調査からわかりました。

次なる三つ目の壁は「就労」です。ここへ一足飛びにジャンプするのは簡単ではありません。安全な場で、「働く」ということをまずは体験してみる。めぐカフェ「ステップ2」が役に立ちます。報酬を得る喜びとともに、責任感も芽生えます。ストレスもあるでしょう。そのストレスと付き合いながら、体調を管理する経験もできます。ここでの成長・経験を元に、アルバイト等の就労へと自分で動き始める参加者もいます。

四つ目、最後の壁は「自立」です。経済的な自立だけでなく、精神的な面も含めての自立です。「自律」でもあります。キャリア支援の現場では、ここをゴールに支援を行います。

「社会との関わり」を乗り越える支援の場はほかにない

では、「ガールズ講座」や「めぐカフェ就労体験」の取り組みでは、どこをゴールに設定するのでしょうか？

私は一般的なキャリア支援のゴールである「第4の壁(自立)」ではないように感じます。ここを超える支援は、第2の壁を越えた人を対象に、ハローワーク等で行われています。では「第2の壁(社会との関わり)」を超える支援は、どこで受けられるのか？ 私は、それが「ガールズ講座」であり、「めぐカフェ」である気がしています。これほど丁寧に、無理のないステップを踏んで、第2の壁を超える支援を、若年女性に特化して行ってくれる場は、ほかには見当たらないと思います。

今後、支援のどこを拡充していくのかを考えた時、第3、第4の壁を超える方向に広げていくのではなく、やはり第2の壁を越えていく支援の場であってほしいと思うのです。ここで、「支援を得る経験」「SOSを求める経験」をした彼女たちは、この先、この成功体験を大事に胸に抱いて、一人ひとりが次の壁を超える準備ができたタイミングで、先に進み始めるように思います。

ずっといつまでも「ガールズ講座」や「めぐカフェ」の場や運営者が彼女たちに伴走し続けることはできません。支援の期間を延ばしたり、ステップ3を作ったところで、一人ひとりが抱えるもとの課題が異なることもあり、全員を就労・自立(自律)に導くことは困難でしょう。

しかし、最も支援が「手薄」である第2の壁「社会との関わり」を超える支援を、男女共同参画センターが担い続けることには、とても大きな意味があると感じます。卒業生が、自分で支援・リソースを得るノウハウを学び、それをこの先も智恵として使っていけることが大切だと思うからです。

最後に、卒業生の皆様の勇気に、そしてそれを見守り続けたスタッフの方々に、大きな拍手を贈りたいと思います。

(2) 「めぐカフェ」就労体験事業の4つの意義

杉田真衣(首都大学東京 准教授)

本調査のアンケートの結果で、就労体験をする前に悩んでいたことを尋ねた質問(Q8)への回答を見ると、「働くのに不安やこわさが先に立つ」が72.7%、「次に向けて一歩踏み出すきっかけがつかめない」が61.4%、「自分に自信がなく、自分を否定してしまう」が59.1%となっている。おそらく過去の失敗体験やハラスメント被害の経験もあって(実際アンケートで、「めぐカフェ」のよかった点は「怒鳴ったり、理不尽な理由で怒ったりされなかった」ところだとする回答があった)、多くの若者が仕事に不安や恐怖心をもち、求職活動に躊躇があり、そのような自分を責めているということがうかがえる。こうした状況にあって、何が課題となっており、「めぐカフェ」就労体験事業にはどのような意義があるのか。本調査の結果が示唆することはいくつもあるが、ここでは4つ指摘したい。

① 働く上で必要な知識や技術を獲得できる場

一つ目は、若者のニーズに即して、働く上で必要な知識や技術を獲得できる場になっていることである。アンケート結果からは、少なくない若者が、レジ打ちや接客の仕方という、サービス業に従事するための技術を習得できる機会を求めていることがわかる。

私を含む東京都立大学／首都大学東京のグループは、2000年代前半に高校を卒業した若者を対象とする追跡調査を実施した(詳しくは、乾彰夫編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか』大月書店、2013年、等を参照されたい)。この調査で、ある若い女性は、高校生の時にファミリーレストランでアルバイトをしたものの、コーヒーをこぼしたり配膳の仕方を覚えられなかったりで一日で辞め、その後は飲食店で働くのを避けていた。インターネットカフェでは、受付業務におけるパソコン操作の仕方などがわからず、当惑していた。ただし、新規開店時にいわゆるオープニングスタッフとして入職したことで、他のアルバイト従業員たちと一緒に接客方法を一から教わることでできていたし、入職時に連絡先を交換し合ったことで従業員間の関係がつけられ、パソコン操作がわからない時には他の従業員に頼ることができたので、辞めずに続けられていた。この話からうかがえるのは、専門的な知識や技術は求められないとされる仕事においても職業訓練が必要となっていること、にもかかわらず会社側がそれを提供することはあまりないこと、それゆえに、オープニングスタッフの仕事を探すといったように、若者は個人的に対処するよう強いられていることである。

本調査でも、アンケートの回答においてレジ打ちの習得を望む声が複数見られ(Q18、Q19)、グループインタビューでも「レジ打ちができるようになったことで自信を持てた」と話す人がいた。学校教育では、こうした技術を教える必要があることは想定されていない。職場は職場で、一から時間をかけて教えて育てるような研修制度を持たないことが多い。だからこそ、わからない、できないことを吐露しても、「そんなことはできて当然だ」と責められることなく、安心して教わることのできる場として、「めぐカフェ」に寄せられる期待は大きくなっているのである。

② 生活や労働について相談できる場

二つ目は、若者たちが生活や労働について相談できる場所になっているということである。アンケートの回答を見ると、相談相手として親を挙げる人が、83.3%と圧倒的に多くなっている(Q23)。グループインタビューにおいて語られていたのは、昼間働いているであろう友人には自分が働けていないことを率直に話せないこと、友人には弱いところは見せたくなくて「見栄」を張ってしまうこと、精神的な負荷をかけたくないので友人には自分がうつ病であると言えないことであった。「友人への負荷」に関しては、私が日々関わっている学生たちからも、「負担をかけるのは悪いから友だちに悩みを話すことはできない」という話をよく聞く。家族が大きな困難に直面したある学生は、「悲劇のヒロインにはなりたくない」から友人や恋人には家族のことを話せないのだと言った。

アンケートで相談先として親に次いで多く挙げられたのは友人・知人であるが(46.7%)、友人・知人にどれだけ事実を話しているかという疑問がある。だからこそ、同居していて自分の状況を隠しようがない親には率直に話せるということになるのだろう。しかし、そうした閉じられた関係においては、親による支配が強まりやすい。現にグループインタビューにおいても、干涉過多な親との距離の取り方に戸惑うなど、親との関係に悩まされる姿が見られた。ある人は、相談相手が親だけであると衝突した時に厳しくなるので、複数の公的機関や友人などに相談先を意識的に分散させているのだと語り、生きていくための術を獲得していったが、こうしたことは稀であろう。親にしか頼れない状況に風を入れることが必要であり、「めぐカフェ」は、それ自体が家族でも友人でもない相談先として機能するとともに、他の相談先へとつなぐ場としても機能していると言える。

「仕事以外の活動で参加しているもの」について尋ねた質問(Q27)で、「とくにしていることはない」と回答した割合が、「仕事をしている」者(44.4%)よりも「仕事をしていない」者(64.3%)において高くなっていることから、無業状態にいるほうが、仕事以外の活動を通じて家族以外の他者と出会う機会を持てずにいることがうかがえる。このことから、「めぐカフェ」の存在は大きいことがわかる。

③ 生きていくための一つの基準点となる経験の創出

三つ目は、先のことが見えにくい女性たちにとって、そのようななかにあっても生きていくための一つの基準点となるような経験をつくり出しているということである。

アンケートにおいては「ガールズ講座と“めぐカフェ”はともに、青春時代のなかった私の大切な青春の1ページのような存在になっています」という記述があり、グループインタビューでも「自分のなかで一步踏み出せた思い出の場所」、「今でも実習日誌を大事に取っており、こうして一つひとつ悩んでステップアップしてきたんだと思いつくことができる」ということが語られた。たとえこの先のことは不確実で見えにくくても、「あの時たしかに私(たち)はあの場にい(てがんば)れた」とたしかかな感触を伴って思い出せる経験があることが、「自分が今ここにいる」ということを照らし出し、その先へと漕ぎ出してゆく足がかりになると考える。「青春」とはおそらく、近い立場の人たちとともに過ごしたからこそ使われた表現だろう。仲間とともにあるなかで、自分だけではないのだと安心し、励まされ、また仲間を知ることが自分を知ることにつながって、自分の向き不向

きがわかってくる。一人でいては得られない経験であり、本事業が「グループ型の支援」を大切にしていることにはうなずける。

④ 主体的にその場をつくる担い手にもなる空間

四つ目は、支援されるだけの場ではなく、自らが主体的に関わり、その場をつくる担い手にもなる空間であるということである。集客方法を考え、情報発信の方法を身につける回が事業に盛り込まれていることから、参加者たちがカフェを運営する主体となり得る存在とみなされていることがうかがえる。

上記③における「グループ型の支援」にしても、参加者たちが自ら互いに関係を築き、自分たちの社会を創り出していく土台を提供している。このように、支援をしつつもなお、その支援の中に支援―被支援の関係を越えていく契機をあらかじめ内包させていることは、先の見えない困難な時代を生きる若い女性たちが自らの道を切りひらく主体となっていくための支援として参考になる。

2. 就労支援（連携）機関の視点

～よこはま若者サポートステーションのスタッフに聞く

就労体験の実施および実習生に対する相談体制として連携している「よこはま若者サポートステーション」（以下、「よこはまサポステ」）スタッフに、最近のジョブトレーニングの傾向、「めぐカフェ」事業への見方についてうかがった。

「めぐカフェ」は「社会経験の基礎となる場」「人と関わる場」「（支援においても）“就労”目的が強化される中で、福祉サービスではなく使える人が限定されない場」ととらえられていた。「このような支援の場が社会的に広がれば」という視点も共有することができた。

（1）実施概要

実施日：2018年10月19日

聞き手（質問者）：小園弥生、関根崇年（男女共同参画センター横浜南）

話し手：熊部良子、津田容子（よこはま若者サポートステーション）

（2）ヒアリング結果

◎ サポステではこの数年間にジョブトレーニングの変化はありましたか？

- ・ジョブトレーニングに加え厚労省の動きで職場体験プログラムができ、サポステでも新しくインターン・プログラムとして「シゴトライアル」ができました。スーパー、倉庫、ビル清掃、機材管理など現在4カ所の事業所で実施し、1現場につき1回に複数人が参加しています。研修1日、実習5日の枠組みで、実習を経てそのまま採用につながる可能性もあります。
- ・従来から行っているジョブトレーニングの受入れ先(注)もチームで開拓し、企業にアプローチする中で徐々にその数を増やしています。運営法人として神奈川県中小企業家同友会にも入会し、その中で知り合った企業の方々にもご協力いただき、サポステ内でミニ合同企業説明会も開催するようになりました。
- ・ジョブトレは利用者一人ひとりに応じたマッチングを行う、オーダーメイドの支援です。ジョブトレの担当と相談員が事前に話し合い、その人がジョブトレをやる目的など明確にし、本人に確認した上で実施するようにしています。

(注)2016(平成28)年度まで10年間のジョブトレーニング協力事業所は93件155カ所、ジョブトレーニング利用者数は543人。うち、私たちが連携を開始した2011(平成23)年度以降、横浜市男女共同参画センターでの受入れは100人となっており、この6年間の利用者数349人の29パーセントを占めている。
(『Empowerment』よこはま若者サポートステーション平成28年度報告書 参照)

◎ ジョブトレーニングの場としての「めぐカフェ」はどうですか。特徴はありますか？

- ・まず「めぐカフェ」の体験は年に2回、定期的に予定されているので、勧めやすいです。
- ・「ガールズ講座」もそうですが、公的機関がやっているのでも安心感があり、他の機関の情報も集まっている。他の資源にもつながりやすいです。
- ・特徴としては彼女たちの「居場所」になっていること。「めぐカフェ」は開かれた場で、いつもそ

こにあつてだれでも行けます。就労体験が終わったあとも寄ることができて、ときどき仲間が集まったり、ずっと所属している感じ。ジョブトレだと1回につき1人ずつの参加だし、シゴトライアルも複数人の参加ではあるけど、配属場所が異なったり、採用も関連する分仲良くなる余裕がないことが多いので、一緒に参加したことでの“仲間感”は「ガールズ」支援、「めぐカフェ」の特徴であるように思います。

- ・「めぐカフェ」は福祉サービスのように利用対象を限定した場ではないので、選択の幅がひろがって助かります。体験後に、納得して福祉サービスや医療につながるきっかけにもなっています。それは「めぐカフェ」で仲間の動きを見ることができ、比較をすることができるから。そういうことは1人で行って帰ってくる、他のジョブトレにはあまりないですね。
- ・サポステとして「めぐカフェ」に向くと思うのはすぐに就労しなければという人ではなく、とにかくその時点で(家から出て)集団の中に入ることができて、慎重に、ゆっくりじっくり取り組める状況、タイプの人。そういった女性に紹介していますね。それから孤立していて、孤独感をやわらげたいというような人にも勧めています。そろそろ人と関わってもよいかな、という人がいきなり濃い人間関係ではなくてまずは薄い人間関係を体験する場、かな。実際、初めての社会経験の基礎となる場、人と関わる場になっていると感じます。「めぐカフェ」でいろいろ悩んだり人間関係でやっかいなことがあったりしても、それもそこに行ったから経験できること。悩んだことも含めて、全体として体験した人にとっていい思い出として残っているのがわかります。

◎「親に相談する」という回答がアンケートで多かったですが、インタビューでは「親には話さない」と……。それをどう見ますか？

- ・話す相手が親しいないからでは。長い間、親しか話し相手がいなくて、親の価値観の影響を受け続ける。子どもの頃からの親子関係が30歳、40歳まで続くという感じですね。
- ・サポステでも親子関係、家族関係の悩みがテーマになることは多いです。

◎ 利用者の中で男女の差はどう見えますか。「結婚」についての悩みも出ていましたが。

- ・サポステで男女の利用率はかつて8対2でしたが、現在は6対4と女性の比率が上がっています。
- ・結婚したいという話は男女ともにありますが、出産年齢を気にするのは女性特有です。でも、結婚自体が人ととくに密に関わることなので、とても高い目標なのではと思います。
- ・利用者で女性(娘)のほうが家事介護の負担が大きいかというと、性別による差は以前よりなくなっていると感じています。少子化で1世帯の子どもの人数が少ないので、息子も大変になっている。家事介護は性別にかかわらず家にいる者が担うようになっているのではないのでしょうか。

◎ 若者が使える社会資源は増加しましたが、実際のところはどうでしょうか？

- ・法律が次々できて、福祉サービスは充実したと思います。以前はなかった就労移行支援事業所が増えて、「就労」が目的として強化されたと思います。発達障害分野も支援団体が増えてはいます。
- ・「めぐカフェ」のように福祉サービスではない場は、使える人が限定されず、全員に選択の幅があります。情報が得られて、どれを利用するか選べて、利用できて、選んだことで次の行動を自分で決められる。困っている若者に対して、「めぐカフェ」のような支援の場を充実させるため、もっと社会の投資が必要ではないのでしょうか。

VI 当協会の視点とこれからの可能性

1. 社会と支援の変化～横浜市を中心として

(1) 行政の支援は「自立」「就労」重視へ

横浜市は2012年と2017年の二度にわたり「子ども・若者実態調査」を行っている。調査結果を見ると、2017年に15歳から39歳の「ひきこもり群」と推定された人数は市内で15,000人。2012年の8,000人と比較すると2倍近くに上った（ただし、この調査でも「家事手伝いをしている」と回答した女性は統計から除外されている）。さらに2017年の調査では、ひきこもりの長期化や高年齢化に着目して40歳から64歳以上をも調査対象としている。

変化に呼応するように、この間、横浜市内外の若者サポートステーション、ユースプラザ、障害福祉サービスとしての地域活動支援センター等支援施設の数が増加した。私たちの現場に受け入れる女性たちも、あちこちの支援機関から紹介されてやってくるようになった。

社会的に困難な状況にある人への支援施策も増えた。2015年、「生活困窮者自立支援法」が新たに施行され、生活保護以前の生活支援が開始された。また、改正「障害者総合支援法」のもとで就労移行支援事業が活発化した。若者支援においても、精神疾患等の診断を受けて障害者手帳を取得することがすすめられるケースが増え、「めぐカフェ」の実習生でも手帳を所持するケースが散見されるようになった。

しかし、「困窮」「障害」など、法に定められた制度による支援対象者は要件が決まっており、その枠にあてはまらない場合は利用できない。実家で親と同居するシングルの女性に収入がなく外出に困っても、「困窮」状態とみなされることはほぼない。交通費がないといって就労体験に来なくなったケースがあったが、たとえ没交渉でも親の世帯から分離しない限り福祉サービスは受けられない。問題別でなく包括的なパーソナルサポートサービスのしくみができた2012年ごろ、遠方に住む親からの支援がなく住むところに困った就労体験中の女性がいた。彼女はパーソナルサポーターによる福祉窓口への同行支援を受け、生活保護受給につながった。だが、これはまれなケースである。

この間、障害やさまざまな困難な状況の人に対しても「自立支援」「就労準備支援」が盛んに言われるようになり、生活保護受給者バッシングも起きた。本調査の検討会でも、「雇用状況のきびしさや過酷な働き方など社会の問題についてはあまり取りあげられず、働けないのは本人に問題がある」という“自己責任”論がいまだに根強い。若者のなかには“私が悪いんです”とっていて、人に相談したり、サポートを受けることに罪悪感をおぼえる人もいる」という若者支援機関所属委員の発言があった。つまり、「自立」「就労」が厳しく求められる社会になったが、個々のサービスは「困窮者」「障害者」などの対象別になっている。利用するにも情報・知識や手続き、通所などのスキルと体力が必要だ。

(2) 当事者活動からの発信

一方、当事者によるさまざまな活動、発信が活発化したことも、この数年間の大きな変化であった。

2015年には横浜市を拠点にひきこもり当事者グループ「ひき桜」の活動が始まり、ピアサポートに関する調査研究にも取り組んでいる。2016年には「ひきこもり UX 会議」が「ひきこもり UX 女子会」をスタートし、またたく間に全国各地に広がっていった。2017年度には当協会との協働事業として横浜市でも女子会および女子会の開き方講座が開催され、ブックレット『私たちの生存戦略「ひきこもり女子会」』が発行され、版を重ねている。同会議はさらに実態調査を行い、『女性のひきこもり・生きづらさについての実態調査 2017 報告書』を発行した。

2018年にはひきこもり当事者団体の全国ネットワーク「NPO 法人 Node（ノード）」が発足。有識者による分析対象になるのではなく、当事者が自らの言葉で発信し伝えていこうという姿勢である。『ひきこもり新聞』『ひきボス』など当事者が発信する紙媒体メディアが生まれ、それらはマスメディアと SNS によって広がっていった。

2. 女性間に広がる格差と、支援の必要性

男女共同参画センターの現場では、2000年の「男女共同参画社会基本法」施行以前から、女性が就労の分野で不利な立場に置かれている課題を解決するため、女性に特化した就労支援事業を行ってきた。前述のように2008年の調査をへて、これまで支援対象から外れていた若年無業女性を対象とする支援事業を立ち上げてきた。その経緯は先に書いたとおりである(1・1)。

それから10年を経て各種の支援施策が実施される一方で、「自立・就労」が厳しく求められるようになった。このような社会のなかで、若年女性の状況はどうなっており、男女共同参画センターにおける支援はどのような意味をもつのだろうか。

(1) 若年女性の困難

「めぐカフェ」就労体験が軌道に乗り始めた2011年末、朝日新聞の一面で「単身女性 3割強が貧困」と発表された(2011年12月9日付)。その同じ紙面の社会面に、連載「孤族の国 女性編」第1回が掲載され、そこに「めぐカフェ」の活動と参加者の事例が取り上げられた(写真)。「収入も伴侶もないままで」という見出しは衝撃的で、新聞社には150通を超える(主として共感の)メールが届いたという。

労働政策フォーラム「アンダークラス化する若年女性」(独立行政法人労働政策研究・研修機構、日本学術会議 共催)では2014年、初めて若年女性がテーマとなり、センター横浜南からも支援事業の報告を行った。この時の議論を土台に、翌年『下層化する女性たち』(小杉礼子・宮本みち子編、勁草書房)が出版された。本書の副題となっている「労働と家庭からの排除と貧困」こそが現在、若年女性のかかえる社会的な困難であろう。所収の金井淑子レポートでは女性間でも格差が開いていることが報告され、不可視化された女性たちの一群があることを示唆している(図

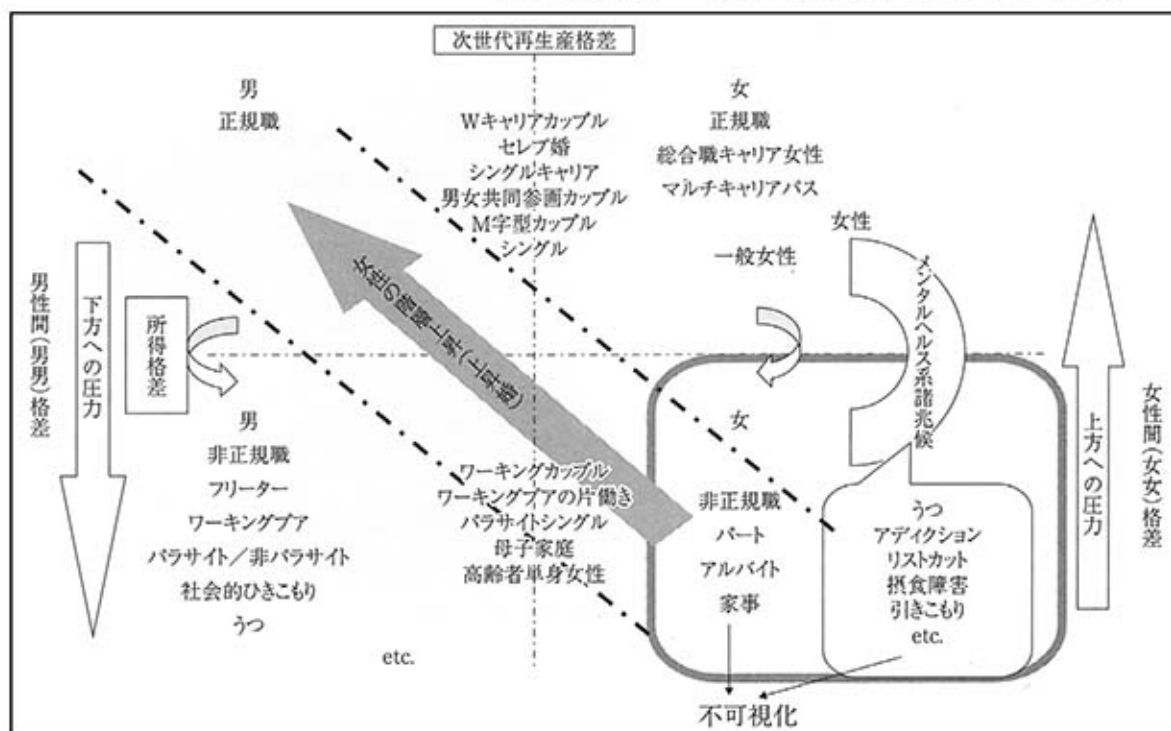


表 30)。そしてセンター横浜南で行っている若年無業女性支援の利用者には、図で右下の太枠の中に記された、メンタルヘルスに課題をもつ女性たちが多いのである。

図表 30：不可視化される女性の「若者」問題

作成：金井淑子

出典：『下層化する女性たち』（p. 78）



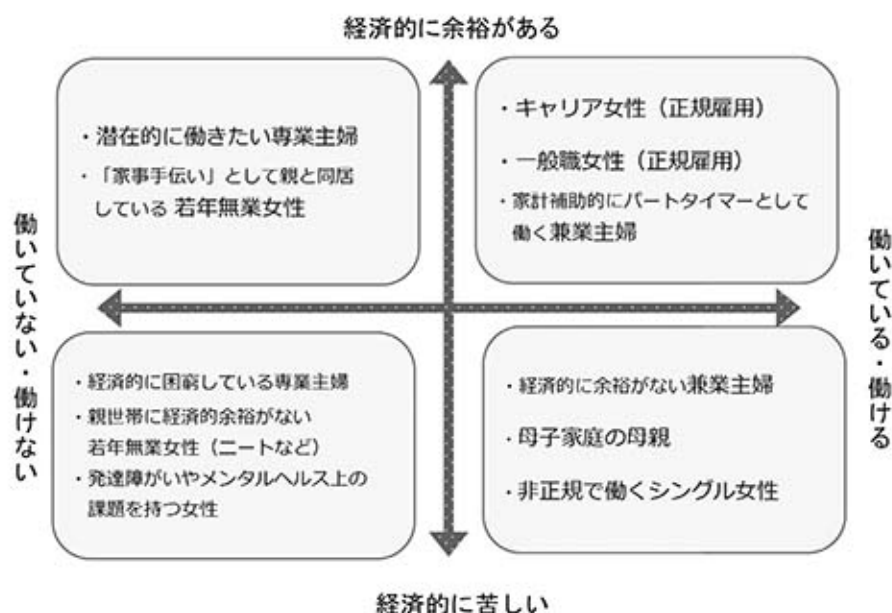
働く女性全体の過半数が非正規雇用であり、メンタルヘルスの課題から働くことが困難であるなど、女性間格差が開いていると考えられる。女性の非正規雇用は、男性稼ぎ主モデルを前提として女性のパート労働=既婚の主婦労働とされていたことに起因する。そのため、未婚率が上昇した現在にあっても、シングル女性の多くが非正規雇用となっている。とりわけ女性で学校を中退していたり初職が非正規職であったり、就労に空白期間がある場合にはアルバイト以外の選択肢はほとんどない。このことは本調査の結果にも如実に表れていた。

（２）当協会における就業支援事業対象層の見直しと若年女性

当協会では 2015 年、女性の就労支援事業の対象層の見直しを行った(図表 31)。縦軸に「経済状況」、横軸に「就労状況（可能性）」をとったマトリックスである。図の中で左下に位置する女性たち、つまり現在はさまざまな課題をかかえており無業だが、働く準備をしたいと考えている女性たちを対象に、センター横浜南では講座や就労体験の場を提供している。

「めぐカフェ」就労体験の受け入れ時点では 3 割強がまったく就労経験がない。あるいは経験があっても 1 か月未満であったり、数年間自宅にいたなどで声も出ない状態からスタートしたりする人もいる。にもかかわらず、今回の調査結果において就労体験修了者の 9 割近くが就労していたことは、大きな成果である。が、その働き方は 7 割以上がアルバイトで、契約が短期間ゆえ約 4 割の人は複数のアルバイトを経験していた。グループインタビューでも「就労しても収入が少なすぎて自立できない」という声が多数あった。

図表 31：女性の就業支援事業 対象層の見直し



作図：2015年、(公財)横浜市男女共同参画推進協会

当協会が2008年度に行った「若年女性無業者の自立支援に向けた生活状況調査」で「働いたりやめたり、を断続的に繰り返して生活している」女性たちの状況がみられた。が、2018年の本調査でもほぼ同じような状況にあることがわかった。しかし、状況は似たようでも見方を変えれば、自分が不十分だから自分ひとりが這い上がれないということではない、同じように悩む人たちがおり、みな、なんらかの道を探して生きていっているのだから自分も模索していこう、と考えも行動も変化していると言える。そうであるならば、これは彼女たちが力を尽くした結果であり、支援事業の成果ではないだろうか。

「女性活躍して、と言われるけどどうやって？」という声がインタビューであったように、女性間でも正規・非正規の格差がある。そしてあいかわらず、無業の若い女性は「家事手伝い」とみなされている。グループインタビューでも「しごとを探すつもりだったが、具合の悪い母に代わって家事全般、さらにきょうだいの子どもの世話をせねばならず一杯いっぱい」と語った人がいた。このようなケースはもはや家事手伝いではなく、主たる担い手である。家の中で精いっぱい働いているにもかかわらず、収入を得られないと働いていないとされるのである。この場合、外に出て働いていないことがスティグマとなり、女性たちの困難は深まっていると思われる。

このような状況においては、「就労・自立」を強制するような支援ではなく、より多様で柔軟な支援が求められているのではないか。つまり、各人がそれぞれ自分の持っている資源を点検し、組み合わせ、生き方や暮らし方を選び取る方法を自ら考えていけるようになることが望まれる。

3. 本事業の目ざすもの

(1) 自立のかたちは人それぞれ

2012年に「ガールズ応援サイト」を開設した際、以下のように書いた。

「生きづらさ、働きづらさに悩む若い女性たち（ガールズ）の自立としごとへの一歩をサポートします。（中略）。働き方やペース、自立のかたちは人それぞれ。あなたに合ったサポートをみつけてください」

上からの「支援」ではなく、本人が主体となり、それを「サポート」すること。「サポート」を選び、利用するのは本人であること。そのスタンスを明確にした。

「ガールズ講座」の中では「自立とは必要な時にヘルプを求められる力。情報や人とのつながりを増やし、選択肢を増やして行動しよう」とくりかえし伝えている。そのときに使える資源は、福祉、医療、カウンセリング、グループ、親、友人など、一人ひとり状況によってさまざまであり、自分で組み合わせを考え、試行錯誤していくものだろう。就労も資源の一部であるが、体調により働くペースや時間を検討しなければならない場合も少なくない。

今回のインタビューでも「就労だけをゴールにしては(トータルな)サポートにならない。生活や健康の面などもっと多角的な情報や支援がほしい」と語った人がいた。

(2) グループ型の支援

自分と向き合い、何に困っているのか課題を発見し、自分に合ったサポートを見つけていくことは容易ではない。が、「1人で悩んでいるときとは違い、同じように悩む人たちがいる」「その中に身を置いて体験を聞き、情報や気持ちをわかちあうことが糧になる」、このことはアンケート結果やグループの語りの中で繰り返し確かめることができた。男女共同参画センターで得意としてきたのは「グループ型の支援」である。センターでは個別の相談も行っているが、悩み別の自助グループの立ち上げをサポートしたり、個人を自助グループに紹介したり、近年では性的な傷つきやDV被害など同じような経験をした女性のグループをファシリテートしたりしてきた。ガールズ講座も、カフェの就労体験も、グループによる支援の場である。初めは自分の課題を言語化できていなくても、就労体験を行った後には自分の課題を明確化できるようになっていることが多い。

実習生は現場での作業や人とのやりとりを通じて自分の心身の状態、向き不向きや人との関わり方など自身の課題に気づいていっている。さらに実習中に自ら設定した目標を一つひとつ達成していくことで自信を持てるようになり、緊張が減り、笑顔が増えるなど目に見えた変化が見られる。ほかの人が活用している医療や福祉などの情報を知り、それらを活用するメリットや自分が使える制度を知ることも多い。レポート発表やグループでの振り返りを通して、なかまの気づきから「同じ体験をしてもそんなプラスのとらえ方があるんだ」と自分の可能性に気づく姿もよく見られる。今まで社会の中で嫌な経験を多くしてきた人が、ここで受け入れられる体験をし、「世の中捨てたものじゃない」と言っていることも大きな成果である。

前述したように支援制度が増えても、自らが困っている原因や課題を把握しなければ、どのサポートを使えるのかわからない。障害福祉サービスの情報は以前より周知が進んできたが、障害認定

には診断が必要だ。グループインタビューでも、診断を受けたことでサービスを利用できるようになり障害者雇用の道が開けたという人がいた一方で、「レッテルが気になって、医者に行くのは躊躇する」という声もあった。このような場合、後者が「道が開けた」という仲間の体験をきくことで、新たな選択肢が増えたかもしれない。

4. 本事業の成果

(1) 社会とかかわる成功体験

検討会の最終回では、調査結果を踏まえていくつかのことが確認された。

就労支援といえば、利用者は一直線に就労に向かい、自立していくかのように思われているが、そのような人は少ない。「めぐカフェ」実習生は体験を通して就労以前に「社会とのかかわり」をもち、成功体験を積み重ねているのではないか。彼女たちはこの支援を利用してここまで来ることができた。だから、今後の希望について「自分を責めずに認めて、自分らしく生きたい」と多くの人を書いたのだと思われる。とすれば、「就労・自立」より前に立ち上がる「社会との関わり」の壁をここで乗り越えていく成功体験が得られることが「めぐカフェ」就労体験の特長であろう。

さらに「3つの成功体験」が挙げられた。

①ここで支援を得たという成功体験、②必要な情報をつかみ取るという体験、③SOSを発信する力をたくわえる体験、である。

人それぞれ、道のりはさまざま。就労しても不調になったり、契約が切れたりして休むこともある。「めぐカフェ」就労体験の場合は、就労の手前で、「社会や人とかかわり」をもつこと、自分を取り戻すことができる場なのではないか。人によっては、人や社会に絶望していたところから、これまでなかった安心感や信頼感を初めて、人や社会に対して持つかもしれない。このように小さな成功体験を積み重ねることが自尊心の回復と自信につながっている。それが多くの人がアンケートに記述した「自分を責めずに認めて、自分らしく生きていきたい」という言葉から読み取れる。

また、「ガールズ講座」では参加者の状況や課題に合わせて多くの情報を提供している。その中で、「めぐカフェ」就労体験を選択して通った人たちにとって、体験が手ごたえある成功体験になった。そしてさらに継続して自分に必要な情報をつかみ取り、行動していつている。そのプロセスをらせん状に繰り返して体験を積み上げていつていると言えるのではないか。

「助けを求めていい、相談していい、ということを今悩んでいる人に伝えたい」という自由記述からわかるのは、あきらめから脱して人や社会への信頼感を回復していること。そして、要望を出してみよう、手を伸ばしてみようと思えるようになったという変化である。やはり頭で考えるだけではなくて、実際に行動して成功体験を積み重ねたからこそその変化と考えられる。

(2) 間口の広い支援

「障害者向け」「困窮者向け」などの縦割りではなく、どんな人でも受け入れる「間口の広い支援」

が案外世の中になく、これが「めぐカフェ」で提供できているのがよさであり、特長だということも検討会で確認された。

法や支援制度は対象者を限定して行われるものだ。しかし、男女共同参画センターの就労支援は対象を「女性」としているだけである(この場合は年齢を限定しているが)。入口では診断や家庭状況等も聞くことなく、さまざまな人を本人の希望という一点で受け入れてきた。これは制度に縛られることなくセンター独自の事業として間口の広い支援を行ってきたことにほかならない。

この方法は一人ひとりに専門家がびったり伴走するのとはまた違う、グループ型の支援だからできることである。当事者相互のかかわりによって各人の力が引き出されていくスタイル。この場を運営する講座ファシリテーターや就労体験担当者にとっては何が起きるかわからない、ミラクルで力のいる仕事である。しかし、本報告書でもくりかえし書いているが、「仲間の中で自分の課題を見つけることができている、グループの力」は検討会でも再度確認された。

5. 地域のNPOや企業の力を借りる

(1) 社会参加体験事業

若年女性支援事業を側面から広がりとお行きのあるものにしてくれたのは、支援機関との連携とは別に何年間かけて関係を作ってきた地域のNPOや企業による受入れであった。この社会参加体験事業について、神奈川新聞記事「無業女性 地域も支える」(2016年5月17日付)から抜粋する。

「社会から孤立していた期間が長かったり、働いた経験がなかったりする若い女性を対象に、フォーラム南太田が実施している『社会参加体験事業』が本格実施から1年を迎えた。就労体験の一手手前という位置づけで、地域の市民活動などに参加。さまざまな人との出会いや共同作業を通じ、『できる』という実感を培う。支援者が中心になった場だけで女性たちを支えるのではなく、地域住民らの力も借り、前進する機会をつくる取り組みだ」

具体的には、布資源循環の活動を行う団体の事務所でのリサイクル着物整理の作業や、地域の公園で行われるアートイベントの屋台ブースの手伝い、子ども向けのおもちゃリサイクルイベントのスタッフ等々。就労体験に入るにはまだ体調が整わない、あるいは講座後に通える場所がほしい、などの人に気軽に利用してもらっている。

「失敗を許される場」がもっとあっていい。そう考え、長く付き合いのある市民団体などに受入れを依頼して社会参加体験事業は始めた。ボランティアとして人の輪に入り、活動してだれかに喜ばれる経験をする事で自己肯定感が上がる。申し込んでも当日体調がすぐれなければ連絡をして休む、途中で帰る、などのやり取りを練習できる場にもなっている。参加者からは毎回かんたんな「振り返り」をセンターの担当者に送ってもらい、励ましのコメントをフィードバックしている。受入れ団体は約10団体で、参加者は多い年にはのべ200人に上った。

このプログラムのメリットは三つある。第一に参加者が特別扱いされないこと。受入れ団体は「支援者」として接するのではなく、参加者を同じ活動目的に向かう「仲間」として受け入れる。その場で注意を受けることも含めて、いろいろな人の中で起きることの一つひとつが糧になる。第二に、体験の内容が単発のイベントから定期的な活動、デスクワークまでさまざまで、参加者が選べること。

第三に、地域の人が「失敗しても大丈夫」と声かけをしてくれること。地域にはお世話上手な「おばさん」や「おじさん」がおり、その方たちの力は大きく、支援スタッフにはできない役割を果たしてくださっている。

(2) 職場体験

職場体験は社会参加体験の発展形である。

若者が市民グループの活動に参画することで生き生きと変化していくのを垣間見て、自社の社会貢献事業として彼女たちを「インターン生」として受け入れたいという地元企業が出てきた。例えば調査研究業務を行う株式会社での事例だ。インターン生のペースも尊重しながら仕事ができるようなプログラムをと、センターの事務局と同社は何度も打ち合わせを行い、大枠を作った。そして説明会を開き、インターン生を送り出した⁸。この後、就職を決めた人が複数出てきた。

また、電気設備を扱う株式会社が「何かいっしょにできることは?」と声掛けしてくれ、いっしょに職場体験プログラムを作っていた。ここには4名の「ガールズ講座」卒業生が参加し、見守られながら働く中で自信をつけて変化していった⁹。

いずれの企業も、トップの理解があり、熱意ある担当者が現場にいらしたことが大きかった。私たちセンターはどうしても支援者の立場であるが、企業のスタッフは第三者として熱心に指導にあたってくれる。インターン参加者は新鮮な気持ちを抱くようである。

(3) 中間支援の役割～参加者にも、受入れ団体にも安心してもらうこと

社会参加体験でも職場体験でも、センター横浜南の役割は次のようなことだ。

- ①受入れの素地を作ってもらい、無理のない場やプログラムをいっしょに考える。
- ②参加希望者をガールズ講座卒業生向けのメルマガで募集。必要に応じて説明会も開く。
- ③体験中の見守りをし、参加者にも受入れ団体にも「いつでも相談に乗る」態勢をつくる。
- ④体験後の振り返りを参加者1人ひとりと行う。受入れ先とも、ていねいに振り返りを行う。
- ⑤受入れ団体スタッフの安心を作り出すために、団体間交流の場を設定する。成果をわかちあう。

⑤は受入れ団体側からぜひにと迫られて行ったが、大きな意味をもった。受入れ団体では「繊細な彼女たちを不用意に傷つけてしまったらどうしよう」「どのように接したらよいか」とみな心配される。他団体ではどう対応しているのか共有することは、団体のみならずセンターの職員にとっても学びと励ましになる。さらに団体からは「若い人と接し、活気づいて楽しい」「定期的に来てもらえないか」「少しお支払いも」という声が上がっている。

地域力をテコにして若者への体験プログラムを創出することは、比較的どの地域でもできる可能性があるのではないかと。つまり、町の中の場合、活動が、人が、若者にとって社会資源になるのである。

⁸ 株式会社ティーアールアイ 「ガールズ講座修了者“TRI 職場体験”の記録」
http://tri2015.jp/8days_report20151115.pdf

⁹ 向洋電機土木株式会社 “ガールズ”職場体験の新規プログラムに4名がイキイキ参加
<http://girls-support.info/2353>

参加者を地域につなげるという中間支援は私たちの役割だが、時間のかかる、目に見えない黒子の仕事でもある。だが、少々大げさにいえば結果的に地域の活性化にもつながる。センターの中では「支援する・される」関係だが、地域に入ればそうではない。地域も若者を育てていくことで、あたたかい土壌となっていく。

土壌という点では私たちの職場も同じである。「めぐカフェ」実習生が最終日に泣いたり笑ったりしてそれぞれ次に向かう姿を季節ごとに見る。次々にやってくる若者を見守る職場には、多忙なかでも効率や数値だけでは測れない、やわらかな空気が生まれている。

6. 今後に向けて

「いろんな団体や部署が連携をとらないと、行政だけでは解決できなくなっている」

「(就労・自立をゴールとするのではなく、それ以前に)“社会とのかかわり”の一步を踏み出せる支援を男女共同参画センターが担い続けることは大きな意味がある」

「支援されるだけの場ではなく、自らが主体的に担い手にもなる空間。参加者が互いに関係を築き、自分たちの社会を創り出していく土台を提供し、主体となるための支援として参考になる」

これら検討委員の発言から読み取れるキーワードは、「連携を力に」「社会とのかかわり」「参加者が主体となるための支援」等である。

「めぐカフェは若者だれでもが使える場。ここを利用すると選んだことで、次の行動を自分で決められる。そんな支援の場を増やすため、社会の投資が必要ではないか」

この発言は「めぐカフェ」就労体験事業のコンセプトは社会の要請、つまり多くの地域で「めぐカフェ」的な事業が求められていることを示唆したものかと思う。本調査のために「モデル事業として広く知らせていく」という目的で三菱財団から助成が決定したとき、「種をまいていく」ことが次なる役割だと考えた。

本報告書をまとめていた2018年秋、「ガールズ講座」第20期を姉妹館の男女共同参画センター横浜北(横浜市青葉区)で開催した。この館は都内からも近く、アクセスがいいということで市外からの参加者が過半数を占めた。修了アンケートには「私の自治体ではこのような講座がないのです。今回、参加できて本当によかった」と書かれていた。

「ガールズ講座」に似た講座事業については現在、大阪市や埼玉県など複数の男女共同参画センターで、それぞれのプログラムで取り組まれている。しかし、女性に特化した就労体験プログラムは、まだあまり例がない。必ずしもカフェという形でなくても、コンセプトがしっかりしていれば、地域の事情に即した形態で展開できる可能性があるだろう。男女共同参画センター横浜でも、若年女性が施設内のライブラリの本を順番に並べて整頓・清掃し、利用促進のポップをつくるなどの体験プログラムを試行した経験がある。また、全国に広がる「ひきこもり女子会」や自助グループ支援、前項で書いた地域の団体の力を借りることなど、どの地域でも取りかかれることもたくさんあるはずだ。第一次産業など地域の特性や特産物を生かした試みや、事務所の中に実習生を受け入れるなど、地域のスタイルに合った取り組みが広がることで、若者の利用できる機会が増えることが望まれる。

個別の相談支援の場は若者サポートステーションで、また全国の男女共同参画センターで、すでに整備されている。それらに加え、グループ型支援を取り入れていけば、「支援する・される」を越えて新たなコミュニティが生まれるだろう。センター横浜南で試行してきたのは、同じ悩みをもち、生きていこうとする人たちが主体となるコミュニティづくりである。コミュニティは生き物だ。固定的なものではなく、作り替えられ、分岐し、多層になっていくことが望ましい。

人は一人では生きられない。人の輪の中で自分に出会い、人に出会い、可能性を広げていく。私たち自身もこの仕事を通して、自分たちのキャパシティを広げているのかもしれない。

次の一步を踏み出そうとする若い女性たちを支えたいと考える団体の方に、センター横浜南での経験が少しでも役に立てば幸いである。

資料編

1. 「めぐカフェ」関連

- (1) 就労体験事業実施要領
- (2) 就労体験についての説明資料
- (3) 就労体験受入通知書
- (4) 「めぐカフェ」紹介リーフレット
- (5) 5周年記念リーフレット「めぐカフェ物語」
- (6) 「寄付のお願い」リーフレット

2. 本調査関連

- (1) アンケート調査票
- (2) グループインタビュー同意書

1. 「めぐカフェ」 関連

(1) 就労体験事業実施要領

若年女性無業者就労体験事業 実施要領 2013年4月1日 (要領の目的) 第1条 この要領は、公益財団法人横浜男女共同参画推進協会（以下「協会」という。）が行う若年女性無業者の就労体験事業に関する基本的事項について定める。 (就労体験の目的) 第2条 就労体験は、若年女性無業者が協会の実施する就労体験事業に参加し、体験することにより就労意識の向上をはかることを目的とする。 (受入基準) 第3条 就労体験に受入れる者は、原則として協会が実施した若年女性無業者を対象とした講座を修了した者とする。 (実習生の決定) 第4条 実習は、第1段階と第2段階の別を設けて行う。第1段階の実習生は、希望した者の中から応募者及び抽籤により協会が決定した者とする。第2段階の実習生は、第1段階を修了した者から抽籤により協会が決定した者とする。 (受入期間) 第5条 就労体験事業に受入れる期間は、第1段階3ヶ月以内、第2段階6ヶ月以内の範囲で理事長が定め、段階ごとに就労体験受入通知書（第1号様式）をもって提示する。 (受入事務) 第6条 協会は、次に掲げる事務で実習生を受入れる。 (1) 男女共同参画センター横浜南で行う「南太田カフェ&ギャラリー」事業の中の、カフェの運営 (実習日及び実習時間) 第7条 実習日及び実習時間は、実習日程表により、あらかじめ実習生に提示する。 2 実習時間は、原則として午前9時から午後5時までの間で、1回3時間以内とする。 (実習手当) 第8条 協会が実習生に対して支給する実習手当の額は、別表1のとおりとする。 (実習手当の支払方法) 第9条 実習手当の支払方法は、月の初日から末日までとする。 2 実習手当は、その月分の全額を翌月の10日に支払う。 (実習に専念する義務) 第10条 実習生は、協会の職員及びカフェ・コーディネーター等の指示に従い、実習時間中は実習に専念しなければならない。	(信用失等行為の禁止) 第11条 実習生は、協会の信用を傷つけ、または名誉となる行為をしてはならない。 (秘密を守る義務) 第12条 実習生は、実習上知り得た秘密を漏らしてはならない。また、実習終了後も同様とする。 (実習生の提出書類) 第13条 実習生は、前3条の規定を遵守するため、協会に対して次に掲げる書類を事前に提出しなければならない。 (1) 契約書（第2号様式） (2) 個人情報保護の適切な取扱いに関する誓約書（第3号様式） (実習記録簿) 第14条 実習生は実習に参加のつと、実習記録簿（第4号様式）に必要事項を記入、押印しなければならない。 (実習の中止) 第15条 協会は、実習生が前5条の規定に違反する行為を行ったときは、実習を中止することができる。 (安全及び衛生) 第16条 協会は、就労体験における実習生の安全と健康の確保と、快適な実習環境の形成に努めなければならない。 (事故等補償) 第17条 実習生の事故等に備えるため、傷害保険及び賠償責任保険に加入しこれに対処する。 (委任) 第18条 この要領に定めるもののほか、実施について必要な事項は理事長が定める。 附 則 (施行期日) この要領は、2011年6月20日から施行する。 附 則 この要領は、2013年4月1日から施行する。 別表1（第8条関係） <table border="1"> <tr> <td>実習手当</td><td>第1段階 支給しない 第2段階 1回当たり 2,000円</td></tr> </table>	実習手当	第1段階 支給しない 第2段階 1回当たり 2,000円
実習手当	第1段階 支給しない 第2段階 1回当たり 2,000円		

(2) 就労体験についての説明資料

<就労体験全体の概要説明>



2018年6月1日
フォーラム南太田

めぐカフェでの就労体験を希望する方へ

■就労体験とは

就労体験は「働く」ことにおいて自分自身を整えていくものです。

「働く」ことはみなさんをお客として迎えているガールズ講座とはちがひ、今度は皆さん1人ひとりがお客さんになる、サービスを提供する側に立つことです。希望者は体験を十分整え、遅刻や欠席をしないように、参加してください。

【めぐカフェ就労体験（ステップ1）】（8名程度・3時間×10回・週2回程度）

目標：体験管理をする、時間を守る、自分の事情で遅刻や欠席をしない（どうしてもというときには電話連絡する）、あいさつする、声をだす、身だしなみをきちんとする、などの社会に参加するスキルを身につけること。

体験内容：裏面参照。

【めぐカフェ就労体験（ステップ2）】（4名・手付・3時間×20回・週2回程度）

※ステップ2の応募には1を修了することが必要です。再度面接を行います。

目標：カフェ業務においてチームの一員として働くスキルを身につけること。具体的には、

- ・業務の流れを自分で把握していく
- ・わからないことは聞く
- ・スタッフ間で必要に応じて声をかけあうことになれる
- ・日々の目標を自分で設定し、達成し、次の目標を立てていく

体験内容：接客準備（清掃、品出しなど）、調理補助（野菜を切る、下ごしらえをする）、番号札を呼ぶ、商品を出す、レジの操作をする（金額ではない）、振り返りなど

<就労体験（ステップ1）の説明>

就労体験ステップ1 2018年度 夏

1 実施期間 2018年7月4日から9月上旬（9月7日予定）の平日3時間程度×10回
カフェ実施は4回（日・金）10時～16時のうち3時間（午前10～13時午後13～16）
実施場所 フォーラム南太田（京急線「南太田」、横浜駅西口地下鉄「西野町」）

2 対象者（人数：8名程度）

- ・就労しようとする意志があること
- ・たれかのために参加すること
- ・ガールズ講座を3日以上欠席していないこと
- ・ステップ1の10回、全回参加できる体質であること（通院中の方は主治医の賛成を得る）
- ・野菜アレルギーなどがないこと（野菜を扱う業務のため）
- ・包丁で野菜や果物の皮むきができること、回流いができること

※相談・支援機関を利用していない場合は、実際に参加する前に必ず、ふくはま若者サポートステーションで個別相談を受けてください。

3 実施の内容（予定）
1 オリエンテーション①
・心構え、食生活、体調管理、みだしなみについて
・日程について
2 オリエンテーション②
・実習の心得、挨拶やコミュニケーション
・先輩スタッフの体験談、1日の流れ
3 接客方法を考える
・カフェの接客方法について考える
4 情報発信する・伝える
・ブログ、ツイッターへの投稿方法、投稿時のルールについて
5 マルシェやさい市
・野菜販売アシスタント
2チーム（午前・午後）に分けて実施
6 カフェ実習 ※個別日程
午前シフト（1000～1300）接客準備、ランチ前半 等
午後シフト（1300～1600）ティータイム、接客準備 等
7 カフェ実習
（ひとり4回：午前、午後2回ずつ）
8 カフェ実習
※カフェエプロン持ち、インナーは白を着用、髪はまとめること。
9 カフェ実習
10 ふりかえりと発表
・修了レポートの提出と発表（全員）

※期間中、他の若者支援機関での個別相談を平行して受けてください。

4 応募について

応募票と志望動機レポート（600文字程度）を次へ郵送または持参ください。いずれも手書き可。

6/15（金）必着。 選定は6/20（水）を予定しています。

※ふくはま若者サポートステーション以外の方若者支援機関（南青・横浜サポートステーション、青少年相談センター、かながわ若者就業支援センターなど）で個別相談を受けている人は、応募レポートにどこを利用しているかを書いてください。

送付先 〒232-0006 横浜南太田 1-7-20 フォーラム南太田 関係者宛て
後日、選定時間を電話で連絡します。
問合せ：フォーラム南太田 電話 045-714-5911 承継、関係まで

<ステップ1（最終日配布）の説明>

2018年8月
フォーラム南太田

めぐカフェ就労体験【ステップ2】について

ステップ2では下記のような実習生を募集します。
週に2回ずつ就労体験をするため、定員（4人）を設けています。
応募多数の場合、全員が参加できないことがあります。
期間は2018年11月13日～2019年2月15日頃まで各人20回の実習（手当てつき）を行います。

1 対象者

- 自分の事情で週割・欠席をすることは無い
- ロスステップ1で、自分できなかったこと、反例に苦手なことがわかった
- 今後自分がやりたい仕事に、ここでの接客など対人業務の経験が役立つと思う
- ロスステップ2を終えたら、アルバイト等に応募したいと思っている

2 ステップ1と2の違いについて

【ステップ1の目標】

体調管理をする。時間を守る。週割・欠席など電話連絡する。あいさつする。声をだす。身だしなみをきちんとする。などの社会に参加するスキルを身につけること。

➡

【ステップ2の目標】

調理補助・接客・集客・レジなどカフェ及び事務の業務に入り、チームの一員として働けるようになること。お客さんに少しずつ対応し、対人業務になれること。具体的には、

- ・業務の流れを自分で把握し、次にやるべきことを考え自ら動く。
- ・スタッフ間で必要に応じて声をかけあい、チームで動くことに慣れる。
- ・日々の自己目標を相談しながら設定し、達成し、次の目標を立てていく。

3 内容について

- ・カフェ内部（調理補助・接客・レジなど）の業務
- ・カフェの集客のため（看板、チラシの作成・ブログでの情報発信など）の業務
- ・中間、まとめの全体でのふりかえり、ブログでのふりかえり

4 応募について

9/7(金) 応募レポート
「ステップ2で身につけたいことと終了後の仕事について」（600字程度）を
担当 関係 まで郵送ください。（添削手渡し可）

9/13(木) 午前 面接実施予定。
時間については9月7日(金)以降に電話で連絡します。

(STEP1 カフェ実習最終日に配布)

<ステップ2 参加者向け（初日配布）の説明>

フォーラム南太田
2018年11月

めぐカフェ「就労体験」ステップ2に参加する
実習生各位

1 決まりごと等のご連絡

・「就労体験記入簿」を提出ください。
第2段階の実習回数は20回とし、欠席により遅延・延長することはありません。
・実習手当は月末締めで翌月10日に銀行振込にて支給します。
・「誓約書」「個人情報適切な取扱いに関する誓約書」をすみやかに提出ください。
・「銀行口座振込依頼書（本人の口座）」を11月23日（金）までに提出ください。
・実習記録簿：出席時は記録簿に時間を記入し、押印してください。紛失不可。
・実習記録：終了後、実習日ごとに記録を記入、提出ください。
・保険について
行き帰りの事故や現場でのけが等に対処できる傷害保険に加入しています。
万が一お客様に被害を与えた時は即座に加入している賠償責任保険で対応できます。
・遅刻・欠席等の連絡：わかった時点ですみやかに電話連絡してください。
体調が悪いとき、感染症や切り傷のある場合は出席できません。
・実習生とフォーラムは協力して安全・衛生に努めなければなりません。
・誓約書に反する行為があったとき、また、実習が不可能な健康状態になったときは
実習を中止することがあります。

2 実習の目標設定について

・ひとりひとりに合った目標を設定して段階的に設定し、目標達成できたことをたがいに確認していきます。実習記録は目標を意識して記入してください。

【目標の例】

- あいさつや必要な連絡などスタッフ間のやりとりができる
- しごとの流れを自分で把握し、動いていく
- わからないことは聞いて確認する
- お客様のような声を把握し、必要な声かけ・やりとりができる
- ブログを更新する
- レジがスムーズに打てる、伝票をまちがひなく書ける

・実習が効果的に行われるよう、よこはま若者サポートステーション等の相談員と連携して進めていきます。実習の状況を共有することがある旨、ご了承ください。

(3) 就労体験受入通知書

<ステップ1>

第1号様式 (第5条関係) 第1段階

就労体験受入通知書

年 月 日

様

公益財団法人
横浜市男女共同参画推進協会
理事長 川名 薫
(公印 略)

あなたを就労体験の実習生として受入れるにあたっての内容は、以下のとおりです。

期 間	年 月 日 から 年 月 日まで
受入事業	フォーラム南太田のカフェ就労体験事業
実習場所	男女共同参画センター横浜南
実習内容	社会参加のための基本スキル、「めぐカフェ」運営に関する準備、接客、調理、片付け、ブログ更新等の実習
実習日時	1回3時間程度で、あらかじめ提示した実習日程表による。開始時間は内容により異なる。
実習回数	第1段階 10回
備 考	第1段階では、実習手当は支給しない。

<ステップ2>

第1号様式 (第5条関係) 第2段階

就労体験受入通知書

年 月 日

様

公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会
理事長 川名 薫

あなたを就労体験の実習生として受入れるにあたっての内容は、以下のとおりです。

期 間	年 月 日 から 年 月 日まで
受入事業	フォーラム南太田のカフェ就労体験事業
実習場所	男女共同参画センター横浜南(フォーラム南太田)
実習内容	「めぐカフェ」運営に関する準備、接客、調理、片付け、伝票処理、ブログ更新等の業務補助
実習日時	原則として午前10時から午後1時、午後1時から午後4時のいずれかで、あらかじめ提示した実習日程表による
実習回数	第2段階 20回
備 考	第2段階では、1回につき2,000円の実習手当を支給(欠席の場合、振替は行いません)

(4) 「めぐカフェ」紹介リーフレット

めぐカフェって？

2010年11月のオープン以来、めぐカフェは地域のみならず、支えられ、育てられてきました。

めぐカフェで大切にしていること

- ①「食」を通じて地域とつながる
- ②ガールズの「働く」を応援する
- ③世代をこえた「つながり」をつくる

めぐカフェのメニュー

- ・スープ1種類のセット 500円
- ・スープ2種類のセット 700円
- ・ドリンク(コーヒー・紅茶) 250円～

※そのほかスイーツや季節のメニューも。

メニューボード

YouTubeで「みんなのめぐカフェ」(映像と語り5分)を配信しています。

「みんなのめぐカフェ」

※「若年女性の就業支援～夢と設計図」にみなさまのご寄付をお願いします。
めぐカフェは「若年女性の就業支援」の活動を行っています。

Special thanks to

立ち上げ助成: 日本マイクログラフ(株)、NPO法人全国女性会館協議会
協賛: NPO法人ユースポート横浜

京急・南太田駅徒歩3分、市営地下鉄・吉野町駅徒歩7分
バス「お三の宮」バス停下車徒歩5分
(横浜市営バス 2・79系統、神奈中バス 船20・港61系統)

営業: 火・水・木・金 11:30～16:00

(第5週とお盆・年末年始などに臨時休業あり)

運営: (公財)横浜男女共同参画推進協会

住所: 〒222-0006 横浜市中区南太田1-7-20

フォーラム南太田(男女共同参画センター横浜南)1F

電話: 045-714-5911

H P: <http://megucafe.sakura.ne.jp/home>

めぐカフェめぐちゃん

めぐカフェハッシュタグ: #めぐちゃん

デザイン: NOGAN

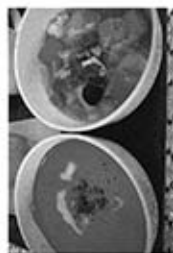
2018年3月

フォーラム南太田 めぐカフェ

ここに来れば
たれかに会える

①「食」を通じて地域とつながる

・スープには横浜・神奈川の生産者が作った旬の野菜を使用。
野菜のうまみを生かし、味付けには天然の塩を使っています。塩分はひかえめにしています。
・マフィンやマーマレードはめくカフェのキッチンで作っています。
・ランチのパンは国産小麦に天然酵母を使用。南区の地域活動支援センター「はれはれ」で焼いています。
・ジャコウケーキ、惣菜パンには米粉を使用。地元の米粉パン屋「カフェらいいざー」から仕入れています。



「からだどココロにしみる野菜スープ」というお声をいただいています。



めくカフェ特製マーマレード



フォーラム南太田マルシェやさい市＆手づくり市～めくカフェでも使用している旬の地場野菜をどうぞ。

開催日：毎月第3金曜日11:00～14:00

共催：神奈川・緑の劇場



②ガールズの「働く」を応援する

横浜男女共同参画センターの「ガールズ編しごと準備講座」を終了した若い女性たちの就業体験の場となっています。年間に約20人がここから次の一歩をふみ出しています。みなさまのご利用が、若者の就業支援につながります。

ゆっくり！ 歩ずつ、ていねいに



めくカフェの一日

10:00 朝、地モノ野菜の泥を落とし、きざんで、煮込んで、準備。
11:30 開店。今日のお客様を想像しつつ、コーヒーをたてます。
12:00 ランチタイムは列ができてお待ちいただくことも。
14:00 日替わりのスイーツで「ゆっくりお茶をどうぞ」
16:00 閉店。「またお会いできますように」

③世代をこえた「つながり」をつくる



カフェのある交流ラウンジは、どなたにもご利用いただける多目的スペースです。
「ここに寄るのが毎週楽しみ」、「子連れでゆっくりできる」、「おちついて本が読める」、「居心地のいい空間」など幅広い年代の方々からご感想をいただいています。



ブックコーナー

ブックカフェさながらに、お茶をしながら、ゆるりと読書タイムはいかが？ 本は貸し出しもできます。



ミニギャラリー

グループでも個人でも、カフェの壁面を小さな展覧会にご利用ください(3,000円/週)。



小箱ショップ

手づくりの好きな女性の小さな起業を応援しています。お気軽にご相談ください。(1,000円～/月。販売手数料別)



めぐカフェ物語



ありがとう♡5歳になりました

2015年11月

フォーラム南太田（男女共同参画センター横浜南）



2010年秋、フォーラム南太田1階にカフェがオープンしました。猛暑の夏、「ガールズ編しごと準備講座」を修了した若い女性たち10数名が準備に汗を流しました。

名前を考え、投票で「めぐカフェ」に。人にめぐりあう、などの意味をこめています。

若い女性の就労体験の場であり、夏と冬に新しい実習生が10名ずつ入ります。実習では、体調を管理して決まった時間に通うこと、いろいろな人とやりとりすること、チームで働くことなどになっていき、サービスを提供する側になっていきます。就労体験を終えたメンバーの声です。

「すべて完璧にと自分を追い込んでいたのですが、完璧より自分を大切にすることがだいじだと気づきました。無理せず、いま自分のできることを精いっぱいしていきたいです」「話しながら何かを作ったり、お互いに感想を言ったりする中で、仲間がいることは心強いことだと思いました」

5年間に約100人が就労体験を卒業し、そのうち約半数がその後の就労を果たしています。カフェや店員、クリニック受付、事務、子どもにかかわる仕事に就いている人もいます。たくさんの方の出会いと、葛藤、次へ送り出すための別れがありました。



あゆみ



女性たちの活動の足跡が刻まれたレンガの建物「男女共同参画センター横浜南」に2010年、「めぐカフェ」が誕生。前には大岡川。昔こまで海だった、汽水城といわれる地です。

2010年11月1日
本日オープン！



2010年12月
マルシェで
実習中です



2012年4月
「さくらテラス」



2014年春
はりきって
営業中！

2015年3月
実習生の
修了式



地モノ野菜の伝え手、三好豊さん

『神奈川・緑の劇場』運営者。めぐカフェで使用する野菜たちを届けてくれ、スープの深い味を支えています。マルシェでの野菜談義も実習生に大好評。ありがとうございます♡



「地産地消は物の売り買いより、人と人の心がつながり、交流することが大切だと思うよ。農家の方が育てたこんな美味しい野菜があるってことを地域に広げる。神奈川県はとても気候風土に恵まれていて、一年中地元の農作物や水産物で食料をまかなえる。天然記念物のトキや白山山地を守るように神奈川の農業は我々が守らないと。」

地産地消を通して日本の農業に興味を持つ人が増えて、ここに住んでいる我々が守ってあげたいよね。『2010 年めぐカフェよりから』



みなさんに感謝

めぐカフェはたくさんの方の力で始まり、継続してきました。

♡ インテリア会社代表の千葉聖美さんはカフェの家具を選んでくれました。「レンガと床や壁のタイルの建築にヨーロッパの風情を感じました。吹き抜けのガラス張りも光がさんさんと入る空間。ウィーンのオープンカフェのイメージで、ドイツのデザインチェアにしました」



♡ 元ホテル料理長で料理講師の木川雅雄さんには、オープン当初から食材の寄付とレシピの提案をいただいています。



【スタッフに調理講師のひとコマ】

♡ 初代めぐカフェコーディネーター（2010-2013）の遠矢美さんはいま「旅するコンフィチュール」代表として起業し、活躍されています。ご尽力、本当にありがとうございました。



就職氷河期以降、女性の働く環境はきびしく、研修や実地で、ゆっくり人を育てたり、教えたりする職場は少なくなりました。人に余裕がない職場で、パワハラにあったり、うつを患って家にこもりがちになった人もいます。20歳前後では、小学生時代からクラスが崩壊していた、安心な場はなかったと話す人もいます。決して特別なことではありません。

よく知り合ってみると、人一倍やさしくて、繊細な仲間です。1人ひとりがピカリと光るものを持っています。「この力が埋もれていては本当にもったいない！」と応援してくださるみなさんがおっしゃいます。

.....

ここでは、めぐカフェ実習生・卒業生の声をほんの少し、ご紹介します。

実習日記より (めぐカフェ スタッフブログ)



♡ 接客や野菜の仕込、レジ操作など、たくさんのことを学ばせていただきました。食器を割ったり注文を間違えたり、色々お客様やスタッフの方々に迷惑をかけてしまい、落ち込んでしまう事もありましたが、みなさんの温かい声に支えていただき、全員が実習を終えることが出来ました。めぐカフェでは、悩んでいるのは自分一人だけではないのだと教えてもらいました。受け入れていただき、本当にありがとうございました。（2014年6月 Sさん）

♡ 気づいたことは、自分が変われば環境も変わる、そして環境が変われば自分ももっと成長できるということです。就労体験を通して、たくさんの人と接することで、今まで失ってしまった自信を少しだけ取り戻すことができました。自分がここにいてもいい存在だと思えることができました。（2015年3月 Mさん）

♡ 先輩方のお客さまを第一に考える姿勢、職場のために自分を日頃からメンテナンスしておくことの大切さ。みなさんが失敗をたくさんしてもいいと優しく指導してくださったおかげで、私にもできた！と自信になりました。これから働く上で具体的なイメージもでき、時間を守る、挨拶をしっかりするなどの練習にもなりました。実習は楽しく、ほんとうにめぐカフェの就労体験に参加してよかったと感じています。（2015年2月 Kさん）

2010年のカフェ立ち上げに参加した

Iさん (事務職・30歳)



ガールズ講座が終わった夏、めくカフェの立ち上げから関わりました。いろいろな講習会があり、コーヒーのいれ方を習ったり、広報活動でカフェCMを作ったり、写真撮影の基本を教わりました。その後、何回か現場実習があり、面接後にアルバイトスタッフになりました。

ここに来る前は、怒られるのではないかと、まだ失敗してしまうのではないかと、接客業は初めてで、声が小さいことがコンプレックスで不安でした。一番うれしかったことはお客様から「このカフェにくるのを楽しみにしています」と言われたことです。失敗せずに仕事ができるという自信にもつながりました。めくカフェは安心して仕事ができる場所です。

自分らしさを出して認めてくれる人がいたので、やっと本来の自分が戻ってきたように感じています。相談できる人ができたことも大きな違いです。今でもガールズ講座やめくカフェで出会った友人とメールをしたり、会ったりしています。

その後、就活に苦心した末、今は週に4日、事務のアルバイトをしています。契約を更新してもらえるよう、がんばっています。がまんしていたことが多かった以前の職場に比べて、給料は少ないですが、今は楽しいです。

2015年、ひと夏の実習を終えた

M子さん (20歳)



私は人見知りで人が怖かったけど、たくさんの人と関わっていくうちに、本当は人が大好きだと思い出すことができました。カフェ実習ではお客さんが見てないときにすることがたくさんあって、どうしたら喜んでもらえるかを第一に考えているのがわかりました。店員さんスイッチが入ると恐怖心はなくなっている自分に気づきました。忙しいときも「落ち着いて。ゆっくりでいいよ」などのやさしい声かけて、支えてもらいました。実習前は忙しくない日がいいなと思っていましたが、やってみると忙しい日のほうが充実していて楽しかったです。

家にいれば安全で傷つくことはありません。でも外に出て、人と関わって悩んだことすべて、振り返ると濃密で楽しい思い出になりました。頼りない自分がいよになったり、気が回らない自分が嫌になったり、あわててミスしちゃう自分が嫌になったり、家では味わえない色々な感情と向き合えました。実習生同士で笑ったり、お昼を食べて悩みを相談し合ったり、時間を忘れてしゃべったりも楽しいことでした。

これからの自分には、何が新しいことを始めるか迷った時、心配はどんどん出てくるけど、やりたい理由が一つでも浮かんだらやったほうがいい、思い切って飛び込んで! と思います。

朝日新聞、神奈川新聞、タウンニュース様 掲載ありがとうございました!



■ 担当職員より みなさまへ

♥ めぐカフェはフォーラム南太田の1階、吹き抜けの交流ラウンジにあります。木のイスに座ってみてください。時間がゆったり流れています。カフェのポスターを飲んでいる小さな子どもの姿を見ると、ほっこりした気持ちになります。

実習生も表情がだんだんやわらいて、笑顔が増えていくのを見るとうれしく、私も共に成長していると感じられます。担当になって7ヶ月。これからも、誰もがほっとできる場をつくっていききたいと思います。(S)

♥ ここ横浜市内は、元気なシニアの方が多い下町です。女性たちはカフェでの体験以外にも、やさしい市での販売体験や古布・きものリサイクルのボランティア等を通じて、安心して人の輪の中に入り、つながりを増やしています。地域のみなさまに助けられ、一つの公共施設でできることを超えていきます。これからもどうぞよろしくお願いいたします。感謝とともに。(K)

YouTubeで
「みんなのめぐカフェ」
(映像と語り/5分)
配信



ご寄付のお願い

働きづらさに悩む若い女性(15-39歳)に、無料で参加できる「ガールズ編みごと準備講座」と就労体験の場を提供するため「若年無業女性の就業支援事業に関わる特定寄付」をみなさまにお願いしています。

※ご寄付(¥1,500~)のお礼にめぐカフェTシャツ等を贈呈



また、ご不用になった本やDVDを寄付いただく「フォーラム古本募金プロジェクト」も行っています。(提携会社バリューブックス)

くわしくは **フォーラム南太田 古本募金** をQ検索!
もしくは 045(714)5911 までお問い合わせください!

「ガールズ」応援サイト



2015年 ここに来ればだれかに会える



「からだどころにしみるスープですね」とお客様から言われるスープは、横浜・神奈川でとれた安心な野菜をたっぷり使って、天然の塩だけで味づけをしています。おやつときにはマフィンを焼く香りがたどって……。ごはんメニューや横浜産アイスクリームなどの季節メニューも増え、日々にぎやかな笑い声が響きます。お客様からは「小さな子でもお年寄りでも食べやすい、やさしい味のスープね」「ここに来るとゆったりした時間が流れていて、本や雑誌も読めます」「吹き抜けの明るい空間に、夏の緑のカーテンは楽しみ」などの声をいただいています。

地域のみなさまに見守られてきためぐカフェ。完璧ではない人どうし、フォローしあって、しんどい荷物をおろしながらやっていきたい。

これからも、人が世代をこえて出会い、元気になるこの場が続いていきますように。あなたの力をほんの少し貸してください。



創作ハンコ さえり

編集後記

昨年めぐカフェの実習、アルバイトを体験したKです。日ごろ、カフェのポップ等を担当しています。今回5周年の節目にこのリーフレット作りにも参加することができて、とても嬉しいです。私がめぐカフェの体験を通して経験したように、今後もめぐカフェが、働きづらさに悩む女性の背中を押してくれる場になることを願っています。(AK)

2015年11月1日 発行

フォーラム南太田 (男女共同参画センター横浜南)
横浜市南区南太田 1-7-20 TEL045-714-5911

(6) 「寄付のお願い」リーフレット

寄付のお願い

“ガールズ”の就労への一歩を 応援してください

若年職業女性のための就業支援事業に関わる特定寄付金

「ご寄付は・・・」
働きづらさに陥む 15 歳から 39 歳の単身女性を対象に、人のつながりの中で安心を
得て、就労へ向け準備していくことを目的とした無料の講座実施と、就労体験の場
の提供のための資金に充当します。個人、法人、いづれの場合も金額を問いません。

「利用者の声」『働き者支援活動報告書』などを掲載。
<http://girls-support.info/>

【ご寄付の方法】

① 現金
※銀行：男女共同参画センター横浜市の事務室で、現金にてご寄付を受け付けます。
※振込：下記の郵便振替口座にお振込みください。
※送付欄に「特定寄付」とご記入ください。

口座番号 記号 00240-9 口座番号 113865
口座名義 公益財団法人横浜男女共同参画推進協会

※当財団への寄付は税制の優遇措置が受けられます。
(法人・個人いずれも、詳細はホームページにて)
※1,500円以上ご寄付くださった方に
「めぐみカフェ」応募Tシャツ等を差し上げます。

② 古本募金
ご不用になった本やDVD等を当館へお持ちになるか、ご自宅から電話一本
で送れます。(5冊以上で送料無料/提携：株式会社パブリックス)
→くわしくは「フォーラム前田 古本募金」を参照

横浜男女共同参画推進協会 ～私たちのミッション～

- ・男女がともに性別にとらわれず生き生きする権利を尊重し、あらゆる分野に共同参画する、
豊かな社会を市民社会の活動と交流の拠点をつくり出す。
- ・横浜男女共同参画推進計画に基づき事業をNPOや企業・行政との協働・連携の
もと、横浜市の男女共同参画センター3館を拠点として全体的に展開します。

発行 2016年3月 男女共同参画センター横浜
<http://www.women.city.yokohama.jp/ind-from-06-minami/>
〒232-0006 横浜市中区南本町 1-7-20 電話 045-714-5911

男女共同参画センター横浜南
代表理事 公益財団法人横浜男女共同参画推進協会
〒232-0006

就労支援プログラム

- 1 ガールズ編しごと準備講座 2 社会参加体験(ボランティア) 3 「めくカフェ」就労体験



(春と秋開講:各20人・全11回)
自分をみつめる/仲間に出会う/
安心感を体験/情報やサポート
をつかむ



多様な人々がかかわる市民
グループの輪の中で、人の役
立ちを体験/仲間やサポート
をつかむ



(通年で計24人/のべ320回)
サービス提供側に立ち、チーム
の一員として働くことを経験

※修了者調査の結果では、回答者の約半数がなんらかの仕事に就いています。

修了者の声 ~めくカフェ・プログラ「実習日記」より

▽仕事のために日頃から自分をメンテナ
ンスする、時間を守る、挨拶をしつ
かりする、などの練習になりました。こ
こでは失敗とたくさんして、でも教えて
もらったおかげで、私にもできた！と自
信になりました。(K)

▽めくカフェ実習で、悩んでいるのは自
分だけではないと知り、お客様や
スタッフの方々に迷惑をかけてしまい、落
ち込むこともありました。ここで失って
自分の人と接することで、今まで失っ
てしまった自信を少しだけ取り戻し、自分
がここにいるのもいい存在だと思ふことが
できました。(S)

▽ガールズ講座が終わった夏、めくカ
フェの立ち上げから関わりました。接
客や広報などを学び、現場実習に。こ
こに来る前は恐ろしいくらいで、不安で
また失敗してしまうのでは？と不安で
した。でも、お客様から「このカフェ
に来るのを楽しみにしています。相談でき
るわね」と言われてうれしかったです。今は週に4日、事務
のアルバイトをしています。(I)



就労体験、地域協力で前進

「めくカフェ」
開設5年

女性の自立支援に手応え



カフェで接客するスタッフ
は、通年で計24人/のべ320回
サービス提供側に立ち、チーム
の一員として働くことを経験

「めくカフェ」を開設して5年が経ちました。この5年間で、就労体験を通じて、多くの女性が自立支援の道に進むことができました。特に、女性たちの自立支援に手応えを感じています。

「めくカフェ」を開設して5年が経ちました。この5年間で、就労体験を通じて、多くの女性が自立支援の道に進むことができました。特に、女性たちの自立支援に手応えを感じています。

「人の輪に入る」

「めくカフェ」を開設して5年が経ちました。この5年間で、就労体験を通じて、多くの女性が自立支援の道に進むことができました。特に、女性たちの自立支援に手応えを感じています。

自信持てる環境

「めくカフェ」を開設して5年が経ちました。この5年間で、就労体験を通じて、多くの女性が自立支援の道に進むことができました。特に、女性たちの自立支援に手応えを感じています。

メディア掲載・放送実績

- ・日本経済新聞2010年11月16日「就労体験で“壁”ひきこもり」
- ・朝日新聞2011年12月9日「働き方改革」
- ・NHK 2012年5月16日「ハートネットTV」
- ・読売新聞2014年10月21日「女性の貧困 若い世代への支援少なく」
- ・朝日新聞2014年5月21日「ガールズ講座対談 修了者の就職状況」
- ・神奈川新聞2014年6月4日「受け入れられる安心感 “ガールズ” 活動開始から」
- ・NHK 2014年9月24日「あさイチ」



2. 本調査関連

(1) アンケート調査票

「めぐカフェ」就労体験
修了者アンケート調査

Q1 2018年1月1日現在、何歳ですか? _____ 歳

Q2 「めぐカフェ」就労体験を修了したとき(あるいはアルバイトスタッフになったとき)は、何歳でしたか? _____ 歳

Q3 現在、同居のご家族等はいませんか? 左の欄に○をつけてください。

① いる	
② いない(ひとり暮らし)	

Q4 就労体験当時と比べて、現在の状況には変化がありましたか?

① 変化があった ⇒どんな変化でしたか? _____	② 変化はない _____
----------------------------	---------------

Q5 最終学歴をお知らせします。(○は1つだけ)

① 中学 卒業	② 高校 中退
③ 高卒 認定	④ 高校 卒業
⑤ 専門学校・短大 中退	⑥ 専門学校・短大 卒業
⑦ 四年制大学 中退	⑧ 四年制大学 卒業
⑨ 大学院 中退	⑩ 大学院 修了
⑪ その他 ※放送大学・在学中などであれば具体的にお願いします。 (_____)	

Q6 「めぐカフェ」に通う以前に、たとえ1日でも就労した経験はありましたか?

① あった	② なかった
-------	--------

⇒①「あった」と答えた方は Q7へ、②「なかった」と答えた方は Q8へ。

Q7 以前に経験した仕事の雇用形態はどれにありましたか? (いくつでも)

① アルバイト・パート	② 派遣
③ 嘱託・契約社員	④ 正社員
⑤ フリー・請負	⑥ その他(_____)

2017年12月

「めぐカフェ」就労体験 修了者アンケート調査

男女共同参画センター横浜南(フォーラム南太田)では2010年秋、働きづらさに悩む若い女性の就労体験の場として「めぐカフェ」を開設しました。現在、開設より6年をへて100名を超える方たちが「めぐカフェ」での体験を修了しています。

このたび、修了者のお一人おひとりに、「めぐカフェ」就労体験に参加した後どうお過ごしだったか、今どうされているか等について、アンケート調査を行うこととなりました。

「今働いていない」「言えられない」「言えられないようなことがない」などと心配される方もいらっしゃる。でも、うまくいかないこともあつて、ありのままの声をうかがい、役立つ支援、改善につなげたい。現在悩んでいる女性たちによりよいサポートを届けたいと思っております。大変お手数ですが、ぜひアンケートにご協力ください。

※あなたのお名前やご住所を書いていただく必要はありません(返信用封筒にも)。

☆ご回答については数値的に集計してコンピュータ処理をし、分析を行います。自由記述の回答に関しては、抜粋をさせていただくことがあります。

☆いただいた情報、回答は今回の調査結果をまとめるためにのみ利用し、その他の目的で利用することはありません。

☆調査結果は当協会のホームページで公開、印刷・発行するほか、報告会を開催します(2019年1月予定)。ガールズサポートサイト等で告知します。ぜひご参加ください。

★調査用紙の返送について

ご記入いただいた調査用紙は、同封の返信用封筒にて
1月20日(土)までに ポストに投函してください。

★ご不明な点がありましたら、下記までお問合せください。

【調査事務局】公益財団法人横浜市長官公署男女共同参画推進協会

男女共同参画センター横浜南(フォーラム南太田)

住 所: 〒232-0006 横浜市長官公署南太田1-7-20

電 話: 045-714-5911

Eメール: erfe@women-city.yokohama.jp

招 当: 小堀、関根

Q8 「めぐカフェ」就労体験に入る前に、悩んでいたのはどんなことだったでしょうか。
(Oは3つまで)

① 決められた時間にどこかに通うことがむづかしい
② 身だしなみを整えられない
③ 人にあいさつすることがむづかしい
④ 体調の波があり、整わない
⑤ 休息や気持ちの切り替えがうまくできない
⑥ 働くのに不安やこわさが先に立つ
⑦ 次に向けて一歩踏み出すきっかけがつかない
⑧ 人といっしょに何かをすることがむづかしい
⑨ 自分に自信がなく、自分を否定してしまう
⑩ あてはまることはない
⑪ その他()

Q9 現在の体調はいかがですか？(Oは1つだけ)

① よい
② まあまあよい
③ なんとなくいい
④ あまりよくない
⑤ よくない

Q10 現在、医療機関にかかっていますか？(Oは1つだけ)

① かかっている
② かかっていない

Q11 「めぐカフェ」就労体験にはどこまで参加しましたか？(Oは1つだけ)

① STEP1 (開始・10日間)まで参加した
② STEP2 (手当付き・20日間)まで参加した
③ STEP2を経て、アルバイト契約になった
④ 2010～11年カフェ立ち上げ時の研修に参加し、スタッフになった
⑤ 途中で参加をやめた

②③にOを付けた方はQ16へ、
それ以外の方はQ12から順に、答えられる質問にお答えください。

Q12 「めぐカフェ」就労体験ステップ1 (10日間)に参加した方に、お答えします。
プログラムはあなたの役に立ちましたか？(Oは1つだけ)

【参考：ステップ1の内容】 Oは付けないでください。

- ・身だしなみ・食品衛生 ・心構え・あいさつ・カフェ業務の流れ
- ・ツイッター・ブログ実習 ・カフェの宣伝を考える4看板実習
- ・やさしい声の体験 ・カフェ現場実習(4回程度)
- ・ふりがなレポート発表/終了式

① 役に立った
② まあまあ役に立った
③ どちらともいえない
④ あまり役に立たなかった
⑤ 役に立たなかった

Q13 役に立ったのはどんな点でしたか？(Oは3つまで)

① 決められた時間に通うことに慣れた
② 身だしなみを整えられた
③ あいさつの習慣がついた
④ 体調管理をする練習になった
⑤ 休息や気持ちの切り替えができるようになった
⑥ 働く不安やこわさが軽減した
⑦ 次に向けて一歩踏み出すきっかけになった
⑧ 人といっしょに何かをやる練習になった
⑨ 自分を否定することが減り、少し自信がついた
⑩ あてはまることはない
⑪ その他()

Q14 ステップ1をふりかえってとくによかった点があれば、自由にお書きください。

Q15 ステップ1をふりかえってこんな内容がほしかった、こうだったらよかった、など改善点があれば、自由にお書きください。

Q16 「めくカフェ」就労体験ステップ2（20日間）に参加した方に、お聞きします。

① 役に立った	
② まあまあ役に立った	
③ どちらともいえない	
④ あまり役に立たなかった	
⑤ 役に立たなかった	

Q17 役に立ったのはどんな点でしたか？（○は3つまで）

① 声を出し、回答する練習になった	
② わからないことを質問できるようになった	
③ 業務の向き不向きを知ることができた	
④ 体調を管理できるようになった	
⑤ 体力がついた	
⑥ 働く不安やこわさが軽減した	
⑦ 次に向けて一歩踏み出すきっかけになった	
⑧ 人とチームで働く練習になった	
⑨ 自分を否定することが減り、少し自信がついた	
⑩ あてはまることはない	
⑪ その他()	

4

Q18 ステップ2をふりかえってとくによかった点があれば、自由にお書きください。

Q19 ステップ2をふりかえってこんな内容がほしかった、こうだったらよかった、など改善点があれば自由にお書きください。

Q20 あなたが「めくカフェ」就労体験の後にしたのはどんなことでしょうか。あてはまるものすべてに○をつけてください。さらにその中で、あなたにとって、特に役立ったもの・して良かったことに、3つまで◎をつけてください。

① 体験教室に通うなど体力づくりに専んだ	
② ハローワークに行った	
③ 就労関連のセミナーやイベントに参加した	
④ 「めくカフェ」以外の就労体験(ジョブトレーニング)に参加した	
⑤ 職業訓練(校)に通った	
⑥ 求人に応募した	
⑦ ボランティア活動に参加した	
⑧ 障害者手帳を取得した	
⑨ 障がい年金を受給した	
⑩ 就労移行支援事業所などへ通所した	
⑪ あてはまるものはない	
⑫ その他 医療・相談・グループ・ひきこもり女子会など具体的に、()	

5

Q21 御書留はサービスを利用したことがありますか？

① ある	差支えなければ質的に
② ない	
③ その他	申請中など

Q22 「めぐカフェ」体験終了後からこれまでに経験した仕事がある方に、内容や期間、働き方についてお聞きします。ない方は無記入でけっこうです。

※本手は事件作品の販売などは個人事業です。

事業の内容 (地区、村や町、市町村など具体的に)	期 間（abcのどれかに記入下さい）			備 考（用語） （○をつけてください）
	a	b	c	
①	日	年月	年	7月6日・派遣・契約社員・正社員・パート 分限人事業・障害者雇用・その他
②	日	年月	年	7月6日・派遣・契約社員・正社員・パート 分限人事業・障害者雇用・その他
③	日	年月	年	7月6日・派遣・契約社員・正社員・パート 分限人事業・障害者雇用・その他
④	日	年月	年	7月6日・派遣・契約社員・正社員・パート 分限人事業・障害者雇用・その他
⑤	日	年月	年	7月6日・派遣・契約社員・正社員・パート 分限人事業・障害者雇用・その他

Q23 現在、収入のあるは事や活動を(少しでも)していますか。

158127 ②	158127 ①
----------	----------

⇒①「している」に〇をつけた方は Q24へ

⇒②「していない」に〇をつけた方は Q27へ

Q24 その仕事はどのような見つけましたか。(Oは1つだけ)

① 求人情報紙(紙)	
② 新聞広告・折込チラシ	
③ ハローワーク	
④ インターネット(求人サイト等)	
⑤ 掲示・はり紙などを見て	
⑥ 就労体験先からの紹介	
⑦ 人の紹介で	
⑧ 自分で始めた(モノづくりなど)	
⑨ その他(具体的に)	

Q25 現在についている仕事・活動の条件についてうかがいます。複数の仕事をもち方は、合計した時間・日数をご記入ください。

① 1日の重く時間 (平均)	休憩を除く	時間 分
② 1週間に重く日数 (平均)	週	日

Q26 奥く上で困っていることや悩みごとがあるとき、だれに相談したり、話したりして
いますか。(〇は3つまで)

① 親		② 愚ようだい
③ 友人・知人		④ 交際相手
⑤ 同僚の人		⑥ カウンセラー・精神科医
⑦ 行政など専門機関の人		⑧ NPO など民間相談機関の人
⑨ ネット上の知り合い		⑩ ネット上の質問サイト
⑪ 相談する人はいない		⑫ その他 ()

Q27 仕事以外の活動で参加しているものがあれば、○をつけてください。(3つまで)

①	ボランティア活動
②	自分の好きな程度の活動
③	スポーツやからだを動かす活動
④	とくに行っていることはない
⑤	その他()

Q28 働く・勉強はけるために、今の自分に必要だと思うことがあれば ○をつけてください。(3つまで)

①	心身の体力 (体調管理・休息・自分を費めない等)
②	人との関係をづくる力 (話を聴く・きもちを伝える・やりとりする・ヘルプを求める等)
③	家族との関係の再話し (適切な役割を考える・距離をとる等)
④	相談できる先・人
⑤	安心して過ごせる場 (グループ・施設・地域・居場所等)
⑥	仕事に役立つスキル (言葉づかい・パソコン・資格等)
⑦	その他()

(2) グループインタビュー同意書

「めくカフェ」就労体験終了者グループインタビューにあたって

調査団体：公益財団法人横浜市民協会の男女共同参画推進協会
調査時期：2018年2月～3月
場所：男女共同参画センター横浜南

目的：この調査は男女共同参画センター横浜南で「めくカフェ」就労体験事業を開始して9年目を迎えるにあたり、これまでの取組について振り返り、改善することを目指す。そこで就労体験終了者の皆さんが、その後どのような状況でいらっしゃるのかをグループインタビュー形式でお聞きし、役立つサポートのあり方、改善点などを探り、今後に生かしてまいります。

調査結果：お聞きした内容については個人が特定できない形にまとめ、今年中に作成する報告書に掲載させていただきます。

同意書

(調査内容とあなたの権利について)

- 1 この調査では、あなたが「めくカフェ」就労体験終了後に経験されたこと、これから希望することなどをお聞きします。
- 2 答えたくない質問には答えなくてかまいません。
- 3 話された内容は個人が特定されない形にまとめ、それを確認いただいた上で報告書に掲載します。話された内容が断りなく、この調査の目的以外に使われることはありません。
- 4 まとめ作成のときの確認のために、いったん録音しますが、報告書作成後は必ず消去・廃棄します。

●調査協力者 私は1～4までを調査員から種々に伝えられ、同意しました。
年 月 日 署名

○調査員 私(調査員)は1～4までを調査協力者に種々に伝えました。
年 月 日 署名

「めくカフェ」就労体験
終了者アンケート調査

Q29 あなたが自分の将来について、感じていること、考えていることを自由にお書きください。

★不安なこと

★自分がめざすこと、周囲への期待

Q30 最後に、質問への回答以外に伝えたいこと、感想があれば自由にお書きください。

以上です。ご協力いただき、ありがとうございました。

※本調査は、原則「無記名」です。

★このアンケートだけではお聞きできなかったことについて、フォーラムの職員等が、グループインタビュー(3～4人集まっていただく)をすることについて、ご協力いただけるでしょうか。2時間を予定、謝礼3,000円程度をお支払いいたします。

ご協力いただける方は、以下にお名前とご連絡先をご記入ください。

後日、ご連絡を申し上げます。ご都合が合えば、ご参加ください。

お名前 (ハンドルネーム可)	
電話番号	
メールアドレス	
その他 配達してほしい心配などあればどうぞ	

「めぐカフェ」就労体験修了者調査報告書

発行年月	2019年1月
調査業務支援	株式会社 ティーアールアイ 株式会社 リサーチワークス
表紙デザイン	メリノ
発行者	公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会
事務局	男女共同参画センター横浜南 〒232-0006 横浜市南区南太田1-7-20 電話：045-714-5911 E-mail：girls@women.city.yokohama.jp http://www.women.city.yokohama.jp/





2019年1月

公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
男女共同参画センター横浜南